

京都府遺跡調査報告集

第152冊

1. 丹波綾部道路関係遺跡
 - (1) 塩谷南古墳群
 - (2) 三ノ宮東城跡
2. 園部城跡第8次

2012

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



三ノ宮東城跡全景(南から)



(1)三ノ宮東城跡全景(北西から、空撮)



(2)石積S V10(北西から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、昨年度で創立30年を迎えました。また、平成23年4月には公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと法人名を変更いたしました。この間、当調査研究センターでは京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成22・23年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した、塩谷南古墳群、三ノ宮東城跡、平成23年度に京都府教育庁管理部の依頼を受けて実施した園部城跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・京丹波町教育委員会・南丹市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

(1) 丹波綾部道路関係遺跡

1) 塩谷南古墳群

2) 三ノ宮東遺跡

(2) 園部城跡第8次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	丹波綾部道路関係遺跡 (1) 塩谷南古墳群 (2) 三ノ宮東城跡	船井郡京丹波町曾根 船井郡京丹波町三ノ宮花ノ木	平成21年10月18日～平成22年1月20日 平成23年2月4日～3月4日、平成23年4月21日～11月29日	国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所	引原茂治・黒坪一樹・加藤雅士・牧田梨津子
2.	園部城跡第8次	南丹市園部町小桜町97	平成22年12月20日～平成23年3月3日	京都府教育委員会	戸原和人・引原茂治

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告	1
(1) 塩谷南古墳群	5
(2) 三ノ宮東遺跡	13
2. 園部城跡第8次発掘調査報告	61

挿図目次

1. 丹波綾部道路関係遺跡

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図	3
(1) 塩谷南古墳群	
第2図 古墳周辺地形図	5
第3図 古墳全体図	6
第4図 墳丘断面図	7
第5図 埋葬施設1実測図	8
第6図 埋葬施設2実測図	9
第7図 出土遺物実測図	10
(2) 三ノ宮東城跡	
第8図 三ノ宮東城跡周辺図	13
第9図 三ノ宮西城跡縄張り図	14
第10図 調査前測量図	16
第11図 三ノ宮東城跡全体図	17
第12図 曲輪1平面図	19
第13図 曲輪1西斜面・曲輪3断面図	20
第14図 曲輪1東斜面断面図	20
第15図 虎口(石段1・2)実測図	20
第16図 石積S V13等周辺実測図	21
第17図 石積S V13実測図	22
第18図 石積S V16実測図	23
第19図 石積S V9実測図	23
第20図 石積S V14実測図	23
第21図 土塁・堀切実測図	24

第22図	豎土塁・堀切实測図	24
第23図	集礫遺構 S X 4 検出状況	26
第24図	石積土坑 S K 6 実測図	26
第25図	礎石建物跡 S B 1 実測図	27
第26図	礎石建物跡 S B 2 実測図	28
第27図	礎石建物跡 S B 3 実測図	29
第28図	曲輪 2 平面図	30
第29図	石積土坑 S K 7 実測図	31
第30図	礎石建物跡 S B 5 実測図	32
第31図	石列 S V 15 実測図	32
第32図	豎堀断面図	33
第33図	柵形虎口平面図	33
第34図	曲輪 2 西・東斜面断面図	33
第35図	曲輪 2 斜面～曲輪 4・5 断面図	34
第36図	曲輪 3 平面図	35
第37図	石積 S V 10 実測図	36
第38図	石列 S X 17 実測図	36
第39図	曲輪 4 平面図	37
第40図	石列 S X 24 実測図	38
第41図	曲輪 5 平面図	38
第42図	曲輪 5 崩落土堆積状況	39
第43図	柱穴列 S X 23 実測図	39
第44図	土坑 S K 20 実測図	40
第45図	曲輪 6 平面図	40
第46図	曲輪 6 西斜面断面図	41
第47図	土坑 S K 18 実測図	41
第48図	礎石列実測図	42
第49図	切岸の堆積状況図	42
第50図	城内経路図	42
第51図	石積 S V 11 実測図	43
第52図	柵列 S A 21 実測図	43
第53図	道 D 断面図	44
第54図	道 E 断面図	44
第55図	道 F 断面図	44
第56図	出土遺物実測図 1 (土器・陶磁器)	47

第57図	出土遺物実測図2(陶器)	48
第58図	出土遺物実測図3(土器・陶磁器)	49
第59図	出土遺物実測図4(銅製品)	52
第60図	出土遺物実測図5(鉄製品)	53
第61図	出土遺物実測図6(石製品)	54
第62図	三ノ宮東城跡断面構造図	56
第63図	出土遺物分布図	59

2. 園部城跡第8次

第1図	調査地位置図	61
第2図	園部陣屋と発掘調査地	62
第3図	トレンチ東側断ち割り土層図	63
第4図	トレンチ西側断ち割り土層図	64
第5図	遺構配置図	65
第6図	石組み溝S D72実測図	66
第7図	溝S D85実測図	67
第8図	土坑S K77実測図	67
第9図	溝S D100実測図	68
第10図	掘立柱建物跡S B15実測図	68
第11図	柵列・土坑断面図	69
第12図	出土遺物実測図(1)	71
第13図	出土遺物実測図(2)	72
第14図	出土遺物実測図(3)	74
第15図	出土遺物実測図(4)	75
第16図	園部城調査地配置図	76
第17図	園部城跡絵図	77

付 表 目 次

1. 丹波綾部道路関係遺跡

付表1	出土陶磁器一覧表	58
付表2	三ノ宮東城関連年表	60

図版目次

- 巻頭図版1 三ノ宮東城跡 三ノ宮東城跡全景(南から)
巻頭図版2 三ノ宮東城跡 (1)三ノ宮東城跡全景(北西から)
(2)石積S V10(北西から)

1. 丹波綾部道路関係遺跡

(1) 塩谷南古墳群

- 図版第1 (1)古墳・調査地近景(掘削前、南から)
(2)古墳・調査地全景(掘削後、空中写真、西から)
- 図版第2 古墳全景(空中写真、南から)
- 図版第3 (1)古墳・調査地全景(掘削後、空中写真、上が東)
(2)古墳近景(掘削後、空中写真、上が東)
- 図版第4 (1)古墳近景(空中写真、西から)
(2)埋葬施設1(南から)
- 図版第5 (1)埋葬施設1 棺痕跡南端～中間(南から)
(2)埋葬施設1 棺痕跡断面(南から)
(3)埋葬施設1 棺痕跡内出土鉄鏃(北東から)
- 図版第6 (1)古墳近景(南から)
(2)埋葬施設2(南から)
- 図版第7 (1)埋葬施設2 出土遺物および横断面(南から)
(2)埋葬施設2 内出土遺物(有蓋高杯・鉄剣・刀子、東から)
(3)埋葬施設2 須恵器類出土状況(上が東)
- 図版第8 (1)埋葬施設2 壺・有蓋高杯出土状況(南から)
(2)同(北から)
(3)同(西から)
(4)同(東から)
- 図版第9 (1)南側周壕断面(西から)
(2)北側周壕断面(東から)
(3)北側周壕内須恵器杯出土状況(東から)
- 図版第10 (1)墳頂部断ち割り状況(南から)
(2)墳丘南斜面断ち割り断面(南西から)
(3)墳丘西斜面断ち割り状況(西から)
- 図版第11 出土遺物1

図版第12 出土遺物 2

(2)三ノ宮東城跡

- 図版第13 (1)三ノ宮東城跡調査前遠景(空中写真、北西から)
(2)同(空中写真、西から)
- 図版第14 (1)三ノ宮東城跡調査前遠景(空中写真、南東から)
(2)同(空中写真、北東から)
- 図版第15 (1)三ノ宮東城跡調査後遠景(空中写真、南から)
(2)同(空中写真、南東から)
- 図版第16 (1)三ノ宮東城跡調査後遠景(空中写真、北西から)
(2)同(空中写真、北から)
- 図版第17 (1)三ノ宮東城跡調査後全景(南西から)
(2)同(西から)
- 図版第18 (1)曲輪 1 全景(北東から)
(2)曲輪 1 集礫遺構 S X 4 (北東から)
- 図版第19 (1)曲輪 1 集礫遺構 S X 4・土塁(西から)
(2)曲輪 1 石積土坑 S K 6 (北から)
(3)同(北東から)
- 図版第20 (1)曲輪 1 石列 S V 14(西から)
(2)同(北から)
(3)曲輪 1 かまど基台部(東から)
- 図版第21 (1)曲輪 1 S B 1 礎石 P 1 (南から)
(2)同 S B 1 礎石 P 2 (南から)
(3)同 S B 1 礎石 P 3 (南東から)
(4)同 S B 1 礎石 P 5 (南東から)
- 図版第22 (1)曲輪 1 S B 3 礎石 P 1 (北西から)
(2)同 S B 3 礎石 P 3 (北西から)
(3)同 S B 3 礎石 P 4 (北西から)
(4)同 S B 3 礎石 P 5 (南西から)
- 図版第23 (1)曲輪 1 土塁への通路・石垣 S V 14(北から)
(2)同石垣 S V 14(北西から)
(3)同北東虎口石段・石垣 S V 16 (北東から)
- 図版第24 (1)曲輪 1 北東虎口・石垣 S V 16(東から)
(2)同石垣 S V 16(南から)
(3)同北東虎口・石垣 S V 16(南西から)
- 図版第25 (1)曲輪 1 土塁掘削状況(南西から)

- (2) 同土塁南東半部掘削中(南西から)
- (3) 同土塁内楕形台出土状況(南西から)
- 図版第26 (1) 曲輪1 土塁断ち割り(北西から)
- (2) 豎土塁1 断ち割り(北西から)
- (3) 豎土塁2 断ち割り(北西から)
- 図版第27 (1) 堀切(北西から)
- (2) 拡張区1(南西から)
- (3) 拡張区2・3(南西から)
- 図版第28 (1) 曲輪1 石垣S V 9(北西から)
- (2) 曲輪1 南西虎口(南西から)
- 図版第29 (1) 曲輪2 石積土坑S K 7(北東から)
- (2) 曲輪2 礎石建物跡S B 5(北東から)
- 図版第30 (1) 曲輪6 切岸、 豎堀1・豎堀2(南西から)
- (2) 豎堀1 土層断面(南西から)
- 図版第31 (1) 豎堀2・豎堀3(北から)
- (2) 豎堀3 土層断面(南東から)
- (3) 豎堀4 土層断面(南東から)
- 図版第32 (1) 曲輪3 全景(北西から)
- (2) 曲輪3 石積S V 10(北から)
- 図版第33 (1) 曲輪3 石積S V 10 中間断ち割り(西から)
- (2) 曲輪3 切岸、排水溝(南西から)
- (3) 曲輪4 全景(南西から)
- 図版第34 (1) 道D 排水溝(南西から)
- (2) 道D 石積S V 11(北西から)
- (3) 石積S V 11(西から)
- 図版第35 (1) 曲輪5 切岸(北西から)
- (2) 曲輪5 全景(北東から)
- 図版第36 (1) 曲輪5 全景(南東から)
- (2) 曲輪5 虎口(北東から)
- (3) 曲輪5 南門跡(北から)
- 図版第37 (1) 曲輪6 全景(北から)
- (2) 曲輪6 切岸堆積土断面(南東から)
- 図版第38 (1) 曲輪6 礎石列(北西から)
- (2) 曲輪6 土坑S K 18(西から)
- (3) 曲輪3～曲輪5(北東から)

- 図版第39 (1) C - 4 地区(南から)
(2) 同土坑内石臼・近世磁器出土状況(西から)
(3) C - 3 地区(北から)
- 図版第40 (1) 出土遺物 1 (中国製青花磁器、外面)
(2) 出土遺物 2 (中国製青花磁器、内面)
- 図版第41 (1) 出土遺物 3 (中国製白磁・青磁、国産陶器・土器、外面)
(2) 出土遺物 4 (中国製白磁・青磁、国産陶器・土器、内面)
- 図版第42 (1) 出土遺物 5 (国産陶器)
(2) 出土遺物 6 (土器)
- 図版第43 出土遺物 7 (銅製品、鉄製品)
- 図版第44 出土遺物 8 (鉄製品、石製品)

2. 園部城跡第8次

- 図版第 1 (1) 北半部空中写真(北から)
(2) 北半部全景(北から)
(3) 北半部全景(東から)
- 図版第 2 (1) 土坑 S K 27(北から)
(2) 土坑 S K 26・柵列 S A 06(南から)
(3) 柵列 S A 08(南から)
- 図版第 3 (1) 塀 S A 43(北から)
(2) 南半部空中写真(右が北)
(3) 南半部全景(南から)
- 図版第 4 (1) 南半部全景(北から)
(2) 石組溝 S D 72(北から)
(3) 石組溝 S D 85・柵列 S A 78(西から)
- 図版第 5 (1) 南半部西半(北から)
(2) 塀 S A 43、S K 74(南から)
(3) 塀 S A 43、S K 73(南から)
- 図版第 6 (1) 土坑 S K 77(北から)
(2) 溝 S D 100(西から)
(3) 溝 S D 100-2(上が東)
- 図版第 7 (1) 出土遺物 1
(2) 出土遺物 2
- 図版第 8 (1) 出土遺物 3
(2) 出土遺物 4

図版第9 出土遺物5

図版第10 (1)出土遺物6

(2)出土遺物7

1.丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告

はじめに

今回の発掘調査は、丹波綾部道路建設事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。平成22年度は塩谷南古墳群および三ノ宮東城跡、平成23年度は三ノ宮東城跡の調査を実施した。

古墳群は、京丹波町南東側、旧丹波町の丘陵地上に位置する。北側に隣接する丘陵には、京都府指定文化財となっている巫女形埴輪が出土した塩谷古墳群が位置している。周辺には深志野古墳群や宮の浦古墳群がある。このように、塩谷南古墳群周辺は、古墳時代中期から後期にかけて、比較的多数の古墳が集中して築造された地域である。

塩谷南古墳群は、調査の結果、直径15mの円墳1基であることが分かり、木棺直葬の埋葬施設を2基検出した。そのうち埋葬施設1は割竹形木棺で、棺内から鉄鏃1点が出土した。埋葬施設2は組合式箱形木棺で、棺内から鉄剣と刀子状鉄器が出土した。なお、棺の検出面において、須恵器長頸壺の周囲に須恵器有蓋高杯7点を輪状に配した状況を確認した。平成23年1月15日に現地説明会を実施し、53名の参加があった。

一方、三ノ宮東城跡は、京丹波町の西側、旧瑞穂町の山地内の丘陵先端部に位置する。城跡の西側250mの地点には、土佐藩祖山内一豊の祖父久豊に関係するという地元伝承をもつ三ノ宮西城跡がある。三ノ宮東城跡は、室町時代後期の戦国時代の城跡と考えられていた。城跡の麓では、西丹波・摂津方面から福知山を經由して山陰方面へ通じる道、綾部を經由して丹後方面へ通じる道、和知を經由して若狭方面へ通じる道に分岐する。交通の要衝地に位置する城跡である。

三ノ宮東城跡の発掘調査は、平成22～23年度にわたって実施した。平成22年度には、工事用道路予定地である城跡西側の丘陵裾部の調査を行った(A～C地区)。平成23年度は、城跡のほぼ全域の調査を実施した。事前に樹木伐採、土留設置、空撮図化などを行った。その後、人力により、表土除去や掘削・精査を行った。部分的に重機により表土層の除去も行った。曲輪とされる平坦地では、礎石建物跡や石積土坑、石列などを検出した。また、斜面部では、豎堀や切岸などを検出した。各平坦地(曲輪)を結ぶ道やそれに伴う護岸の石積、排水溝なども検出した。遺物では、中国製の青花磁器や白磁、国産の陶器甕や土師器皿、甲冑金具、刀装具、銭貨などが出土した。平成23年10月16日に現地説明会を実施し、134名の参加があった。

今回の調査では、京都府教育委員会や京丹波町および京丹波町教育委員会、地元三ノ宮、曾根の自治会などにご協力いただいた。現地調査にあたっては、地元有志の方々や各大学の学生諸君の参加があった。また、現地では都出比呂志、上原真人理事をはじめ、菱田哲郎氏、村田修三氏、千田嘉博氏、山上雅弘氏、森島康雄氏、福島克彦氏、中井淳氏、若江茂氏、高橋成計氏、南孝雄

氏、広瀬二郎氏、西森正晃氏、柏田有香氏、大高大輔氏、永恵裕和氏、笹栗拓氏にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、すべて国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が負担した。

(引原茂治)

〔調査体制等〕

塩谷南古墳群

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同 専門調査員 黒坪一樹

調査場所 船井郡京丹波町曾根

調査期間 平成22年10月18日～平成23年1月20日

調査面積 800㎡

三ノ宮東城跡

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸・水谷壽克

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同 主任調査員 引原茂治
同 専門調査員 黒坪一樹
同 主査調査員 柴 暁彦
同 調査員 高野陽子・加藤雅士・牧田梨津子

調査場所 船井郡京丹波町三ノ宮花ノ木

調査期間 平成23年2月4日～平成23年3月4日

平成23年4月21日～平成23年11月29日

調査面積 6,200㎡(平成22年度 200㎡、平成23年度 6,000㎡)

位置と環境

塩谷南古墳群と三ノ宮東城跡が所在する京丹波町は、平成17(2005)年丹波町、瑞穂町、和知町の合併によって誕生した。京都府のほぼ中央に位置し、兵庫県篠山市に隣接している。また、丹波高原の由良川水系上流部に位置し、旧丹波町の南側園部町との境界ともなっている山塊は、淀川水系と由良川水系の分水嶺となっている。

京丹波町内には『京都府遺跡地図』によると、現在140件の埋蔵文化財の登録がある。旧石器時代のナイフ形石器が蒲生遺跡で出土している。縄文時代では草創期の尖頭器が塩谷古墳群の調査で見つかっている。

弥生時代には京大農学部附属牧場付近に位置する美月遺跡(弥生時代中期)が昭和55(1980)年に調査され、京都府立須知高等学校周辺の蒲生遺跡では、昭和58(1983)年から4次にわたり発掘調査された。竪穴式住居跡をはじめとする弥生時代の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代では、旧丹波町で最も多くの古墳が分布する。豊田車塚古墳やカナヤ1号墳は、前方後円墳とされている。カナヤ古墳群、蒲生野古墳群、森ノ奥古墳群、塩谷古墳群など多くは円墳である。森ノ奥古墳群では、2号墳から古墳時代後期の須恵器が出土している。塩谷古墳群はすでに発掘調査が行われ、そのいくつかが整備されている。旧瑞穂町には古墳は少ないが、町内唯一の横穴、三ノ宮校裏山横穴がある。

古代の遺跡としては須恵器窯跡がある。崖面に多くの須恵器が散布している蒲生野窯跡は、飛鳥時代の遺跡である。崖面に灰原が露出している豊田シミ窯跡、中台(天ヶ棚・桜池)窯跡群、院内窯跡などの奈良時代の窯跡もある。

中世になると、京丹波町においても小規模ながら多くの山城が築城された。旧丹波町域には、豊田城跡、須知城跡、上野(須知)城跡、中畑城跡、実勢城跡、富田(愛宕山)城跡、水戸・殿谷城跡、水戸(水戸稲荷山)城跡、高岡下村城跡、高岡中村城跡、曾根城跡、塩田城跡、塩田北城跡、宇津木城跡がある。なかでも城主が須知氏とかかわる須知城は、守護の細川氏を大いに苦しめた、延徳元(1487)年におこった延徳の国一揆に登場する。『北野社家日記』によると、延徳元年の末に守護方は一揆方の須知城を破ったが、翌年には一揆方の手に戻り、激しい戦闘は続いた。

旧瑞穂町域では、三ノ宮東城跡、八幡(水呑)城跡、垣内城跡などがある。このほかに城主の明らかな城もある。橋爪城は山内貞通～久豊・盛豊、三ノ宮西城は山内久豊、八田城は上原久左衛門、鎌谷城・鎌谷南城は細見河内守、井尻城は谷垣兵部が城主であったとされる。丹波綾部道路建設に伴い、平成21・22年度に発掘調査を実施した井脇城跡は、標高およそ300mを測る最高所に中心施設がある。複数の曲輪や尾根を断ち切る堀切などが設けられており、地元では「瀧谷の城」ともいわれている。城主は明らかではないが、山内氏との関係が指摘されている。

旧和知町域には、出野甚九郎が城主であったとされる出野城跡や市場城跡がある。また、『京都府遺跡地図』に上栗野塚、下栗野塚、広瀬塚なども登録されている。

丹波は、京都の北西の入り口であるために要衝とされてきた。中世にはその位置から、旧丹波町から旧瑞穂町にかけて所在した山内荘が置かれていた。守護も南北朝・室町時代を通して重臣が務めたことから丹波の重要性がうかがえる。丹波においても中央の騒乱の影響を受けて複雑な動きを見せ、須知城や佐々尾においても合戦が起こっている。そして天正3(1575)年に織田信長から丹波・丹後の平定を命じられた明智光秀が登場する。光秀は、天正4(1576)年に安定的統治のために現亀岡市に亀山城の築城を開始する。このほか、各地の城を改築していることが指摘されている。その一つの須知城では、石積を築いている。こうして丹波は中世から近世へと移っていった。

(牧田梨津子)

(1) 塩谷南古墳群

1. 墳形・規模

塩谷南古墳群は、定高性の山々に囲まれた高原地形のなかにある。周辺は曾根川をはじめとする河川により形成された谷と尾根が入り組む。そうした地勢のなか、南東の山稜から北西の平野部近くまで張り出した尾根上に当初は塩谷古墳群と同じく複数の古墳の存在を想定していたが、^(註1)1基確認した。北側の塩谷古墳群よりもひとときわ高い位置に造られている(第2図)。

調査前の観察では、墳丘の一部に崩落が認められた以外、後世の大きな改変もなく、築造当初の状態をよくとどめていると思われた[図版第1(1)]。測量の結果、円墳とわかり、直径は南北溝の芯心間で約15m・南北溝の外側で約18m、裾部からの高さ約2.5mを測ることがわかった(第2図)。墳頂部の標高は207mである。

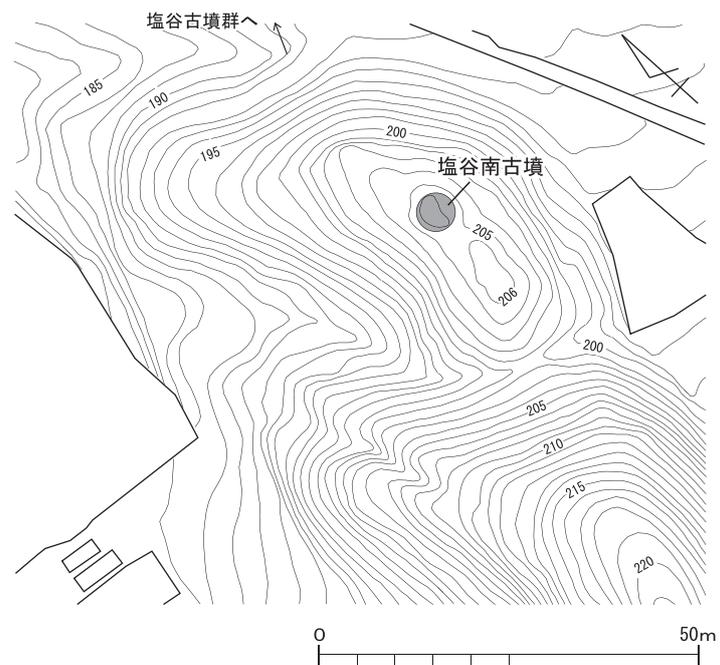
2. 墳丘(第3・4図)

墳丘は、もともとの地山面から最大1.3mの高さに土を盛って整形されている。墳丘規模は南北の溝を掘削することにより決定され、墳丘基盤となる地山には、第16層、第14層、第7層、第11層、第10層、第6層などが盛り土されていった。最上層に、灰白色粘質土を多く含む橙色粘質土(第2層)が直径約3.5mの範囲にわたって覆うようにのせられ、墳丘は完成している。この第2層は2基の埋葬施設とともに覆っている。出土遺物については、墳丘南斜面の表層に近い第6層中から須恵器甕の体部片が出土した。

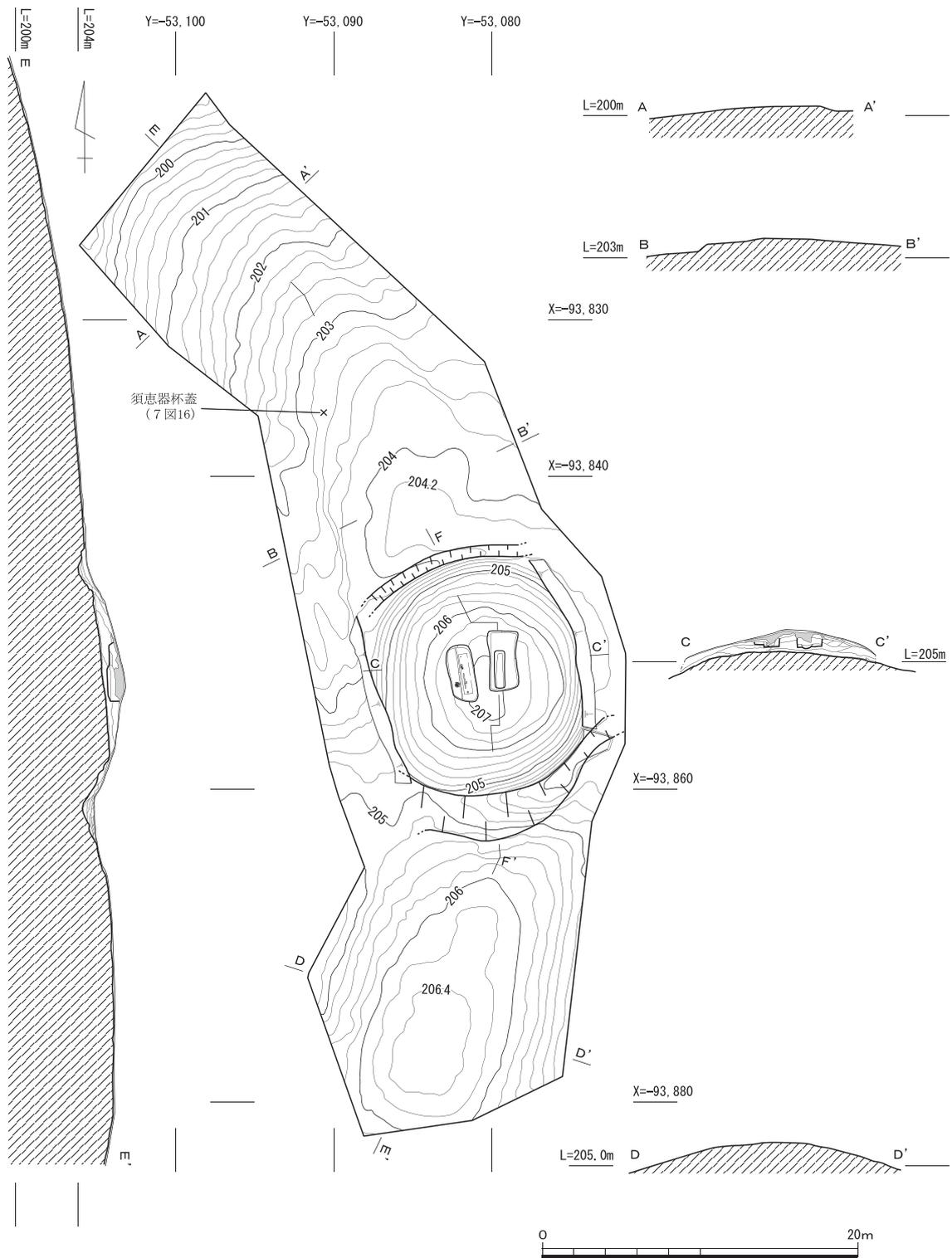
3. 溝(第3・4図)

溝は南北の古墳裾部に掘られている。全周をめぐっていたのではなく、尾根を切断・区画し、かつ古墳の高さをより際立たせるのを目的に掘られたものといえる。盛り土との関係でいえば、南北溝とも盛り土の一部が溝内に流れ込んでいるが、基本的に溝の掘形と裾部のラインはほぼ一致している。

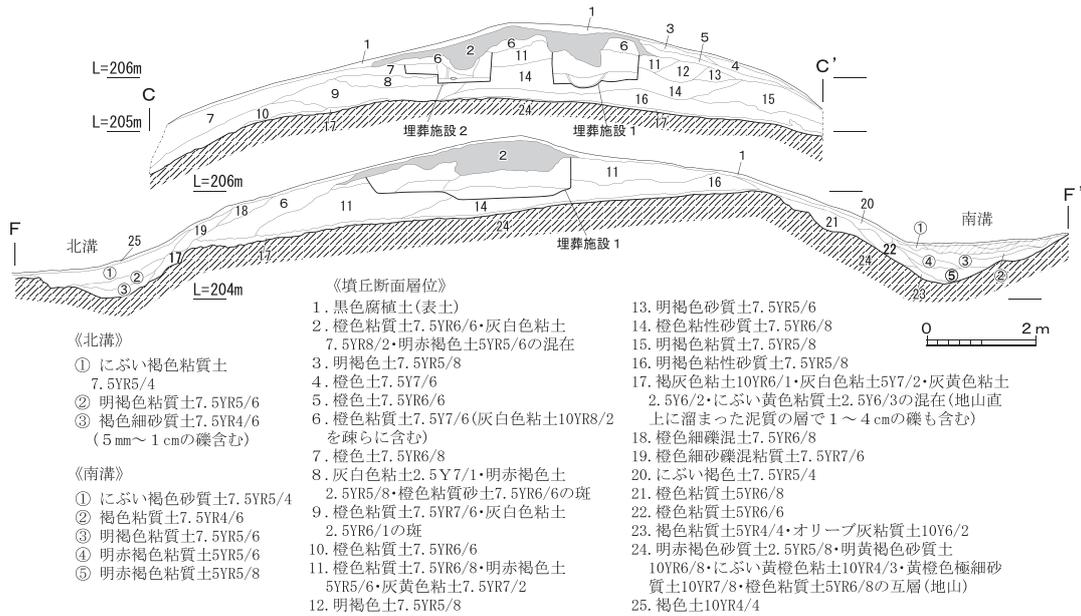
北溝は、幅0.8～0.9m、深さ0.25～0.85mを測る。埋め土は、3層に分けられ、上位から①に



第2図 古墳周辺地形図



第3図 古墳全体図



第4図 墳丘断面図

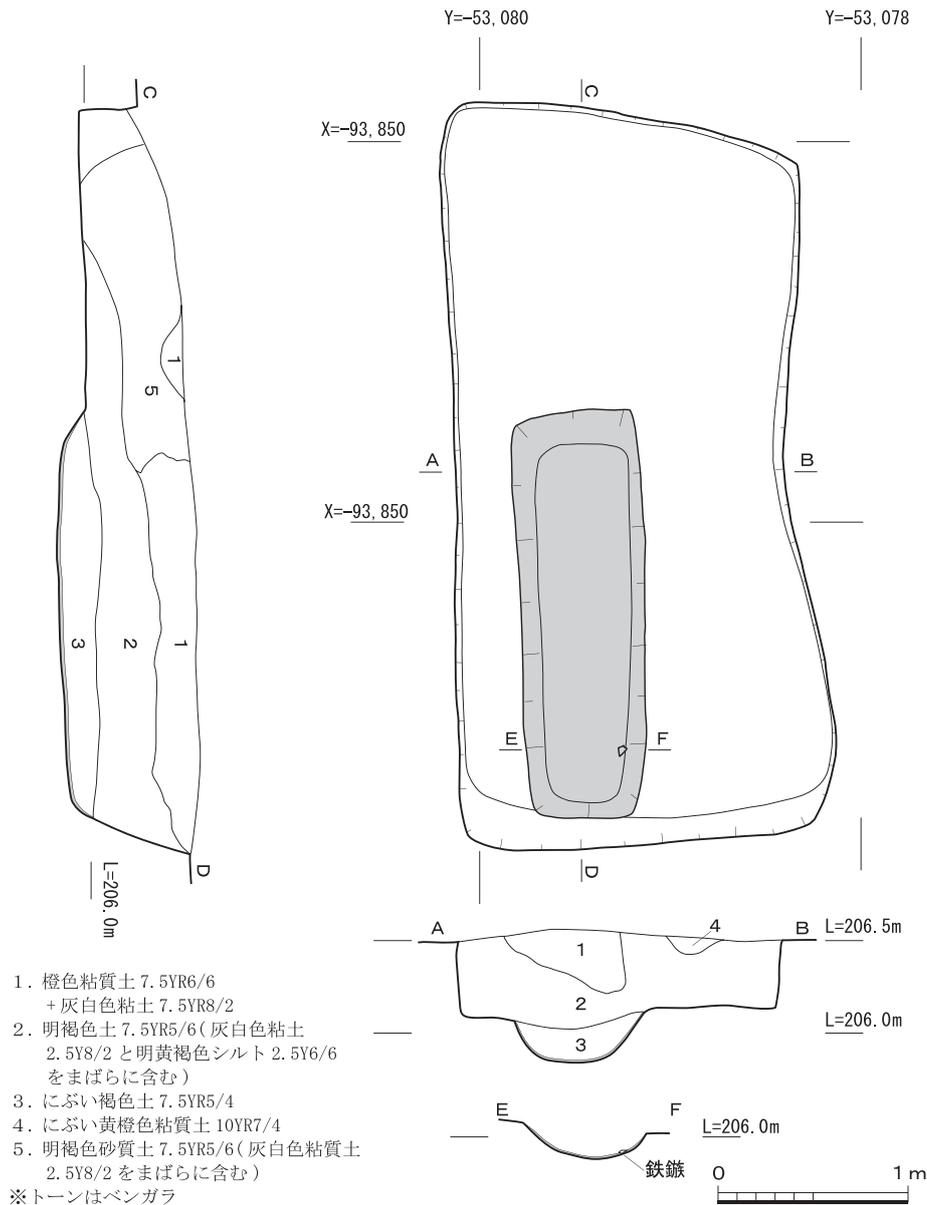
ぶい黄褐色粘質土、②明褐色粘質土、③褐色細砂質土となる。②層中から須恵器杯身(第7図17)の破片が出土した。

南溝は、北溝と比較して幅広で深い。幅1～3m、深さ0.2～0.6mである。埋め土は5層に堆積し、上位から①にぶい褐色砂質土、②褐色粘質土、③明褐色粘質土、④明赤褐色粘質土、⑤明赤褐色粘質土である。③～⑤層から、整理用コンテナ1箱分ほどの須恵器が出土した。古墳時代の須恵器甕・壺のほか、奈良時代の杯身・杯蓋・壺などの破片も混入していた。古墳築造後、溝が埋められていく過程で投棄されたと考えられる。

4. 埋葬施設

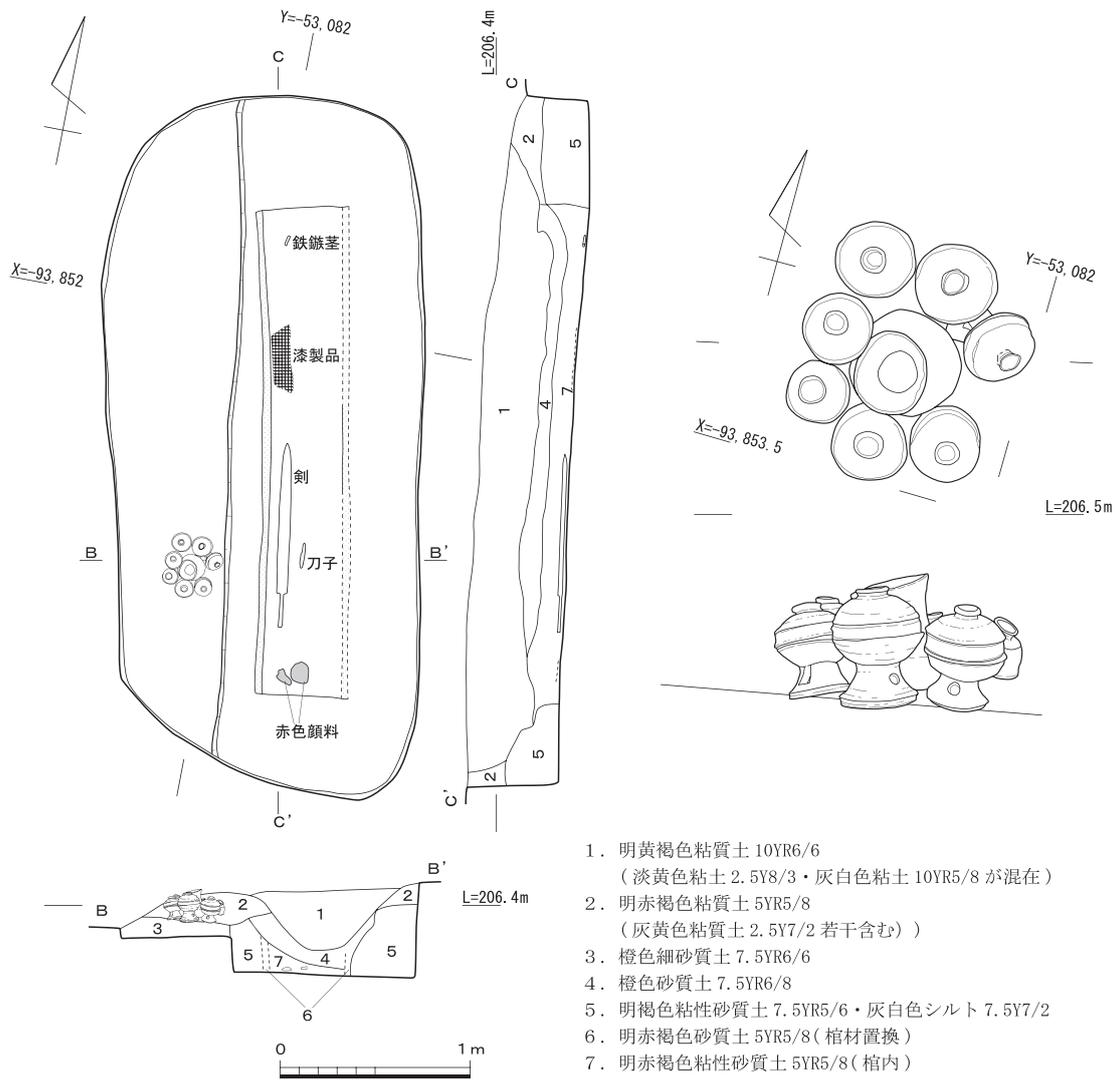
1) 埋葬施設1(第5図) 南北に主軸をもつほぼ長方形の墓壇である。長辺3.7m、短辺1.8mを測る。墓壇検出面から棺痕跡の底までの深さは70cmである。棺痕跡は墓壇の中軸より東寄りで確認した。形状は長楕円形で、滑らかな円弧を描く断面形から割り竹形木棺とみられる。棺の向きは南北軸である。長軸2.2m、短軸0.65m、残存の深さ0.3mを測る。両先端の棺痕跡の立ち上がりは、土に置き換わった断面で見ると限り、棺底から角度をもたず滑らかな曲面ラインを描く。内部には淡灰褐色細砂が詰まっており、棺痕跡内面にはベンガラとみられる赤色顔料が塗布されていた。棺痕跡内に入れられていた遺物は、鉄鏃1点である。南半のやや東寄りの地点で、先端部を南西方向にして出土した。被葬者の頭位については、棺痕跡の縦断面が北に向かってやや高くなることから北頭位と考えられる。

2) 埋葬施設2(第6図) 南北軸のいびつな隅丸方形の墓壇である。長辺3.7m、短辺1.6mを測る。墓壇検出面から棺痕跡の底までの深さは0.45mである。墓壇の中央やや西寄り、須恵器長頸壺の周りに配された有蓋高杯7点の集合を確認した。これらの須恵器は、棺の埋納後に、壇内



第5図 埋葬施設1実測図

の掘り残した面に配置したものといえる。棺痕跡については、その底を須恵器類の配置面から25cm下位で確認した。長辺に沿って棺痕跡を幅2～3cmで確認したことから、組み合わせ式木棺と考えられる。向きはN10° Eでほぼ南北軸に沿っている。棺痕跡の大きさは、最大長2.6m、幅0.55mを測る。棺痕跡内には、主軸より西寄りに鉄剣が一振り、その剣に並行して刀子一振りが置かれていた。剣は先端を北に向け、刀子は先端を南に向け、刃部側を東側にしていた。この鉄剣の先端から北側約1m離れて、鉄鍬茎の一部が見つかった。さらに鉄鍬茎の南におよそ40cm離れた位置で、黒漆状の塗膜を約10×40cmの範囲で確認した。弓矢を格納する鞆の痕跡である可能性がある。しかし、これは断片で残存状況が極めて悪く、取り上げることはできなかった。その他、棺痕跡南端中間部に10×15cmの範囲でベンガラ痕跡がみられた。被葬者の頭位は、鉄剣の向き・配置などから推して、南頭位と考えられる。



1. 明黄褐色粘質土 10YR6/6
(淡黄色粘土 2.5Y8/3・灰白色粘土 10YR5/8 が混在)
2. 明赤褐色粘質土 5YR5/8
(灰黄色粘質土 2.5Y7/2 若干含む)
3. 橙色細砂質土 7.5YR6/6
4. 橙色砂質土 7.5YR6/8
5. 明褐色粘性砂質土 7.5YR5/6・灰白色シルト 7.5Y7/2
6. 明赤褐色砂質土 5YR5/8 (棺材置換)
7. 明赤褐色粘性砂質土 5YR5/8 (棺内)

第6図 埋葬施設2実測図

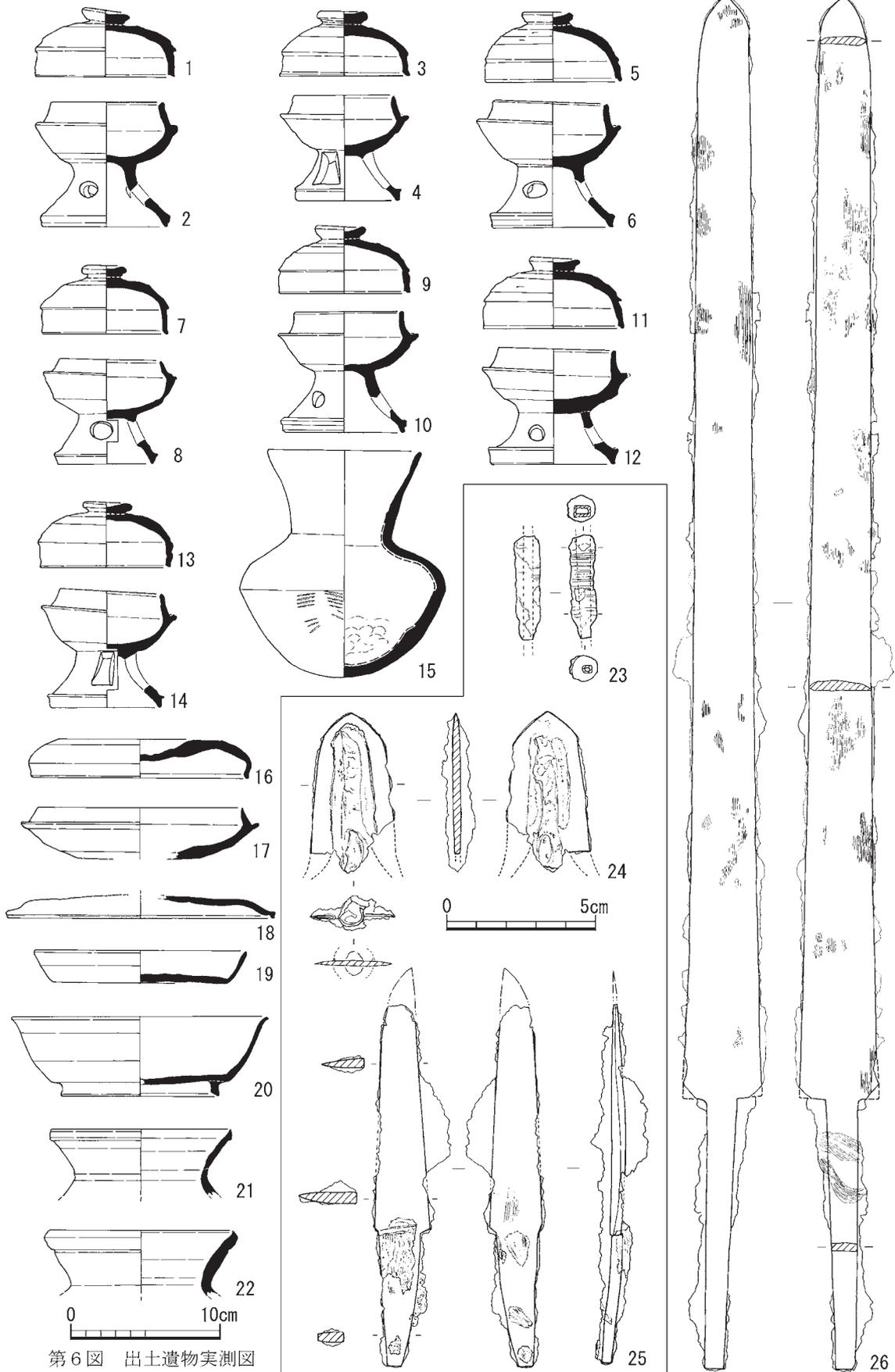
5. 出土遺物

埋葬施設1 (第7図24)

24は平根式鉄鍬で、長さ5.5cm、幅2.8cm、厚さ1cmの残存値である。逆刺の先端は残っておらず、基部形状は矢柄により明確にできない。両面から挟んで着装した矢柄の木質が、鍬身の先端近くまで達している。

埋葬施設2 (第7図1～15・23・25・26)

1～14は須恵器有蓋高杯である。有蓋高杯の法量、色調、器面の調整などはほぼ揃っており、一括生産品とみられる。法量の平均値を示すと、蓋の口径8.9cm、器高4.7cm、摘み径3.3cm、高杯の口径7.3cm、器高8cm、裾径7.5cmである。蓋の口径がいずれも10cmを超えず、比較的小型である点は陶邑編年TK47(5世紀後半)の特徴であるが、天井部と体部をわける稜が丸みを帯びていぶくなってきていることから、MT15併行期、6世紀初頭の時期としておきたい。^(注2) 高杯は、短脚一段透かしで、透かしの形は方形と円形のものがある。調整は蓋の天井部および杯部の底近



第6図 出土遺物実測図

第7図 出土遺物実測図

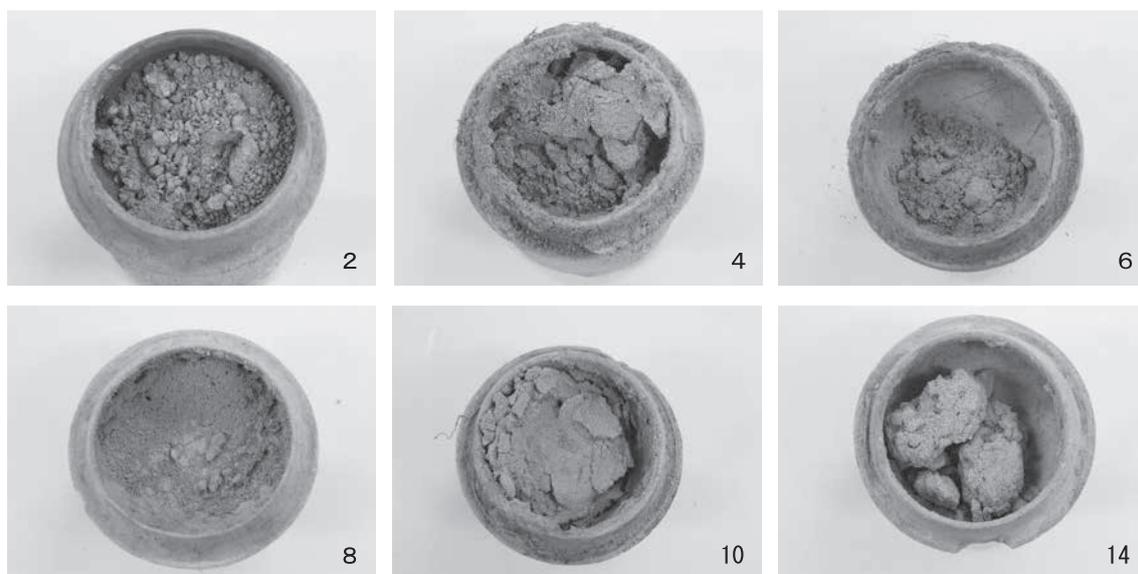


写真1 高杯内残存物(番号は第7図に同じ)

くをヘラ削りしている。色調は黒味を帯びた暗灰色である。蓋の天井部と高杯内面底に赤色顔料(ベンガラ)が塗布されている。杯・蓋の口縁部にもベンガラの付着がみられるが、塗布されたものではない。なお高杯内に残存していたものは、細かな土砂の塊のみであった(写真1)。土砂の量は高杯2で40g、高杯4で24.4g、高杯6で11.6g、高杯8で19.7g、高杯10で51.8g、高杯12で1.9g、高杯14で32.6gを計る。生産された窯の特定はできないが、園部窯跡群(南丹市園部町)における大向支群1・2号窯(5世紀末～6世紀前半)にその可能性がある^(注3)。15は須恵器長頸壺である。体部から緩やかに外反する頸部、肩の張った体部をもつ。口径10.4cm、器高15.5cm、体部径13.8cmを測る。

23は鉄鏃茎である。鏃身部ではなく竹材が挿入され樹皮が巻かれている茎の中間部である。残存長3.5cm、幅0.9cm、茎の金属本体の断面は方形である。

25は刀子である。残存長12.2cm、残存刃部長7.7cm、刃部幅1.8cm、関部幅1.4cmである。切先は残存していない。関部および茎部に木質が残る。

26は鉄剣である。全長94cm、刃部長74.4cm、刃部幅5cm、関部幅2cmを測る大型のものである。鞘に収められていたようで、刃部全体に木質が付着している。また柄部の目釘位置は現状では不明である。

溝内(第7図17～22)

17のみ北溝内、その他は南溝内から出土した。17は須恵器杯身で、復元径13.7cm、器高3.5cmを測る。底部ヘラ削りの部分は狭くなっている。暗青灰色である。端部の立ち上がりの形状から、埋葬施設2の有蓋高杯のMT15期よりもやや新しく、TK10併行期とみられる。北溝の埋没過程で混じったものがある。18～20は奈良時代の須恵器杯蓋(18)および皿(19)、杯B(20)である。18は口径17.6cm、器高1.6cm、19の皿は口径14cm、器高2.2cm、底径11.6cm、20は貼り付け高台をもち、全体に薄く仕上げられ、口縁端部がやや反っている。口径16.9cm、器高5.4cm、底径

10.5cmを測る。21・22は古墳時代須恵器壺の口縁部である。21は暗緑灰色で口径12cm、頸部径8.8cm、22は明灰色で口径12.2cm、頸部径9.4cmを測る。

その他の遺物(第7図16) 16は古墳から約20m離れた尾根北西側で出土した古墳時代の須恵器杯蓋である。口径14.4cm、器高2.6cmを測る。焼き歪みによる変形が顕著である。天井部をヘラケズリ、他はナデ調整している。表土直下の地山面で数点の須恵器片とともに出土した。

6. まとめ

古墳は、調査の結果直径15m、高さ2.5mの規模をもつ円墳であることが判明した。古墳頂部の標高は207mを測る。1基の小規模な円墳ながら、丁寧に造られているのが特徴である。塩谷古墳群の背後により高く、周囲をより遠くまで見晴らす格好の位置に造られているといえる。

また、南北の尾根部にも大きく手を加え^(注4)、盛り土により整形された墳丘の頂部に2基の埋葬施設を設けている。埋葬施設1は手間のかかる割り竹形木棺であり、鉄鏃1点が出土した。埋葬施設2は組み合わせ式木棺に立派な剣や、刀子、鉄鏃茎、漆製品などを副葬し、かつ棺外に須恵器の有蓋高杯と壺が特異な配列で供えられていた。儀式的なものにしてもかなり手の込んだ様子が窺える。棺内および棺上に土器を供えない点は、塩谷古墳群でもみられたが、一般的な傾向である。また、古墳の築造時期であるが、有蓋高杯の形態が、陶邑編年MT15併行期という点から、古墳築造時期は6世紀初頭と考えられる。MT15併行期の古墳は、丹波地域のみならず少なく貴重である。

最後に棺外に土器を特異な配置で供える事例を2つあげておきたい。まず1例は、三田市西山古墳群6号墳埋葬施設6(6世紀後半)で、杯身、杯蓋、高杯などの一風変わった集積状況が報告されている。それによると、6号墳埋葬施設6のA土器群では、須恵器杯身と杯蓋の7セットが3組ずつ2列(1セットは2重)^(注5)に並べられている。

もう1例は、古墳周壕中における事例である。長野県諏訪市一時坂古墳の第5・第6土器集中箇所(5世紀後半)で、土師器壺(第5土器集中)や須恵器甗(第6土器集中)の周囲に、須恵器杯身・杯蓋などの器物を載せた土師器高杯7セット(第6土器集中のほうは1セットが須恵器有蓋高杯)^(注6)を配置した例が報告されている。この一時坂古墳では、土器を設置する儀式の内容や手順に関わり、数量に一定の規制が働いたものと推定されている。埋葬儀礼に伴う須恵器を集積するという行為に、数量的規制がなされたという指摘は興味深い。

以上、この古墳は当地域を広く治めた盟主を被葬者とし、少なくとも塩谷古墳群の被葬者と同等か、さらにそれを上まわる力を持った人物の古墳といえる。

(黒坪一樹)

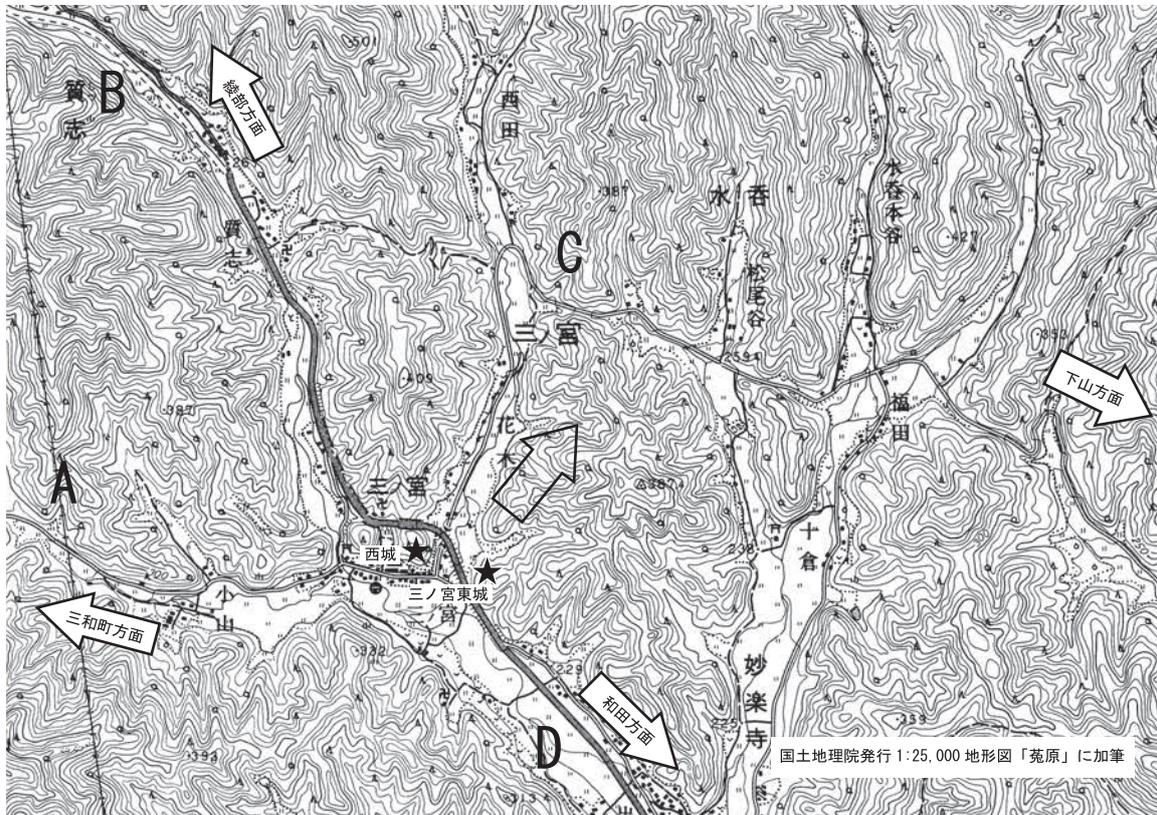
(2)三ノ宮東城跡

1. 地理的位置

町内の全域は丹波高地に属しており、大部分が山地である。町内には由良川の支流がいくつかあり、河川がつくる谷と小規模な盆地に分散して集落が存在している。三ノ宮東城が所在する三ノ宮は、京丹波町のほぼ中央部の旧瑞穂町域に所在する。瑞穂町は昭和26年に梅田村・三ノ宮村・質美村が合併して瑞穂村となり、昭和30年に町制移行した経緯がある。

三ノ宮付近には、由良川水系の高屋川が流れている。三ノ宮の西約150mの地点では、高屋川の支流のうち、小山方面(A)からの東流と、質志方面(B)からの南流が合流し、さらに三ノ宮付近で花ノ木方面(C)からの南流と合流し、南東の和田方面(D)へ流れている。これら河川がつくる谷筋のうち、小山方面(A)－花ノ木方面(C)には、これにほぼ沿うかたちで現在府道26号線が通っている。小山方面(A)は福知山市三和町へ通じており、国道9号と合流している。花ノ木方面(C)では、途中で質美川に谷筋を変えながら、下山の集落や由良川方面へ抜ける。質志方面(B)と和田方面(D)をつなぐ谷筋にほぼ対応しては、国道173号が通っている。国道173号は綾部街道の別名をもつ、綾部と篠山をむすぶ街道で、京丹波町内では和田付近で国道9号と交わるほか、綾部からは国道27号・JR舞鶴線のルートで舞鶴まで抜けることができる。

三ノ宮東城は、小山方面(A)・質志方面(B)からの流れと、花ノ木方面(C)からの流れの合流



第8図 三ノ宮東城跡周辺図

部にある。これらがつくるY字状の谷底平野の東にある山地(標高387.4m)から南西方向に尾根がのびており、この先端に城が築かれている。尾根は、地形的には山地の中間斜面に分類されている(国土交通省 土地分類基本調査「綾部」)。地質的には丹波層群に属しており、調査においても基盤層は主として泥岩・砂岩であり、所々でチャートの露頭が散見された。(加藤雅士)

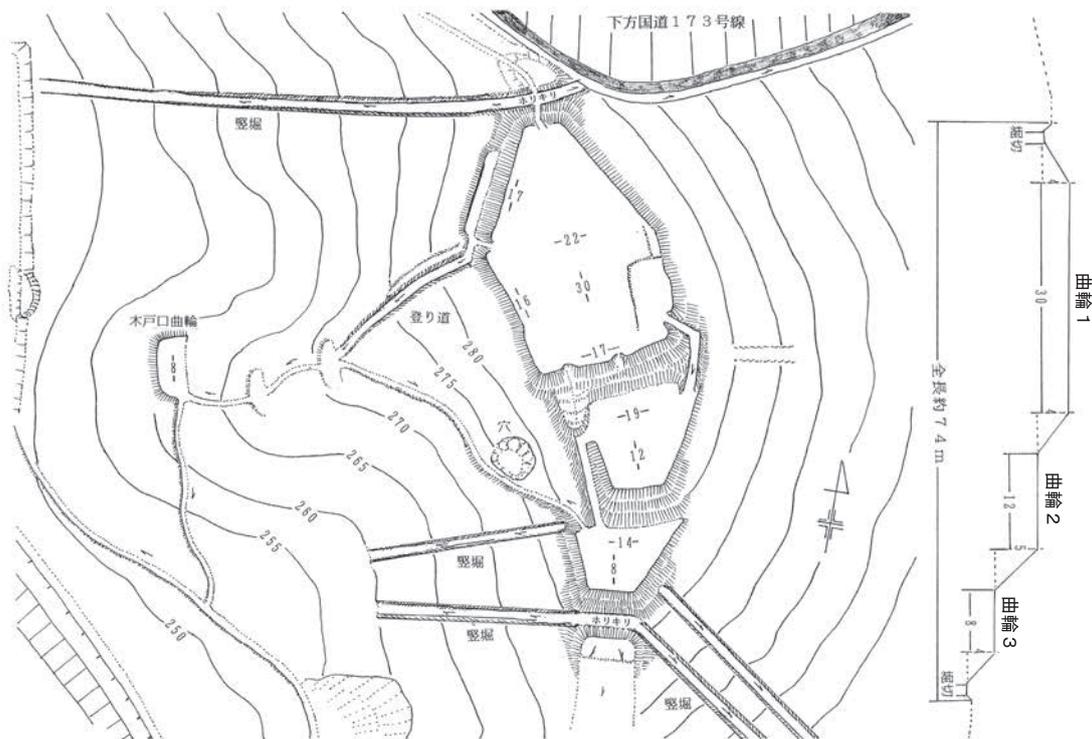
2. 京丹波町における中世山城

三ノ宮東城跡は、今回、山城の主要部分をほぼ全域にわたって調査したため、その詳細を知ることができたが、三ノ宮東城とともに、同様な規模で対峙している三ノ宮西城跡の存在はきわめて重要であろう。京丹波町域における山城の分布および縄張り図は、その一部をすでに報告している。ここでは三ノ宮西城跡についてのみ、実地踏査に基づく縄張り図と所見を記しておきたい。

三ノ宮西城跡は、三ノ宮小学校(現在は廃校)の背後にあった。現在、三ノ宮地域振興会によって整備されており、小学校の裏側に遊歩道の登り口がある。ここより15mほどの上方には、8×4mの木戸口曲輪とも称されるような平坦地がある。これよりさらに登ると、曲輪1の西側から斜面を降下する豎堀状の道が遊歩道まで達している。

頂上の曲輪1は南北30m、最大幅22mある。ここより北側の遊歩道を下ると、浅い堀切があり、これに続く西側の豎堀は山麓まで降下している。

『大日本帝国陸地測量部』(明治28年発行)の地図によると、北側の山頂(小字高尾)より城跡まで尾根が続いており、この鞍部に峠道が通っていたのがわかる。現在は、この場所に国道を新設したために旧観は失われ、東側(北)に在ったと考えられる豎堀は道路により消滅している。



第9図 三ノ宮西城跡縄張り図(若江茂作図)

曲輪1の南東の隅には、下段の曲輪2へ降りる虎口があり、掘り残し土塁(切岸)の上を通る坂道になっている。また、曲輪2の西側に最下段の曲輪3へ降りる坂道がある。この曲輪3は防御が厳重で、西側の虎口の方に堅堀がみられ、南側先端の4m下には堀切を穿ち、ここから両斜面は堅堀となっている。

『丹波志』および『姓氏家系大辞典』によると、先祖は久喜山内相模守宗昌と称し、寛政年代には天田郡上川合村(現福知山市三和町)の大庄屋を勤めた。また、氷上郡大河村に住した甚右衛門は三宮三ノ宮城主の子孫であったと記されている。(若江 茂)

3. 全体構造

城は、道でつながれた6つの曲輪から構成されている。曲輪の配置は尾根筋のラインに沿って、北東から南東へかけての配置(曲輪1・2・6)と、尾根腹面の北西斜面への階段状の配置(曲輪3・4・5)が基本となっている。尾根腹面のもう一方の斜面である南東側には曲輪が配されない。これに加え、付属的な2つの小さな曲輪と、曲輪5の東側の丘陵裾付近に平坦面がある。

曲輪1は最高所にある主郭となる曲輪で、北東-南西方向に長細い形状である。曲輪の北東端に土塁・豎土塁・堀切を設けて、北東方面からの尾根づたいの進入を防ぐ。南西方向に対しての防御意識から縁辺部に塀の基礎部分と考えられる石列SV14を断続的に設けるほか、一つの堅堀を配する。

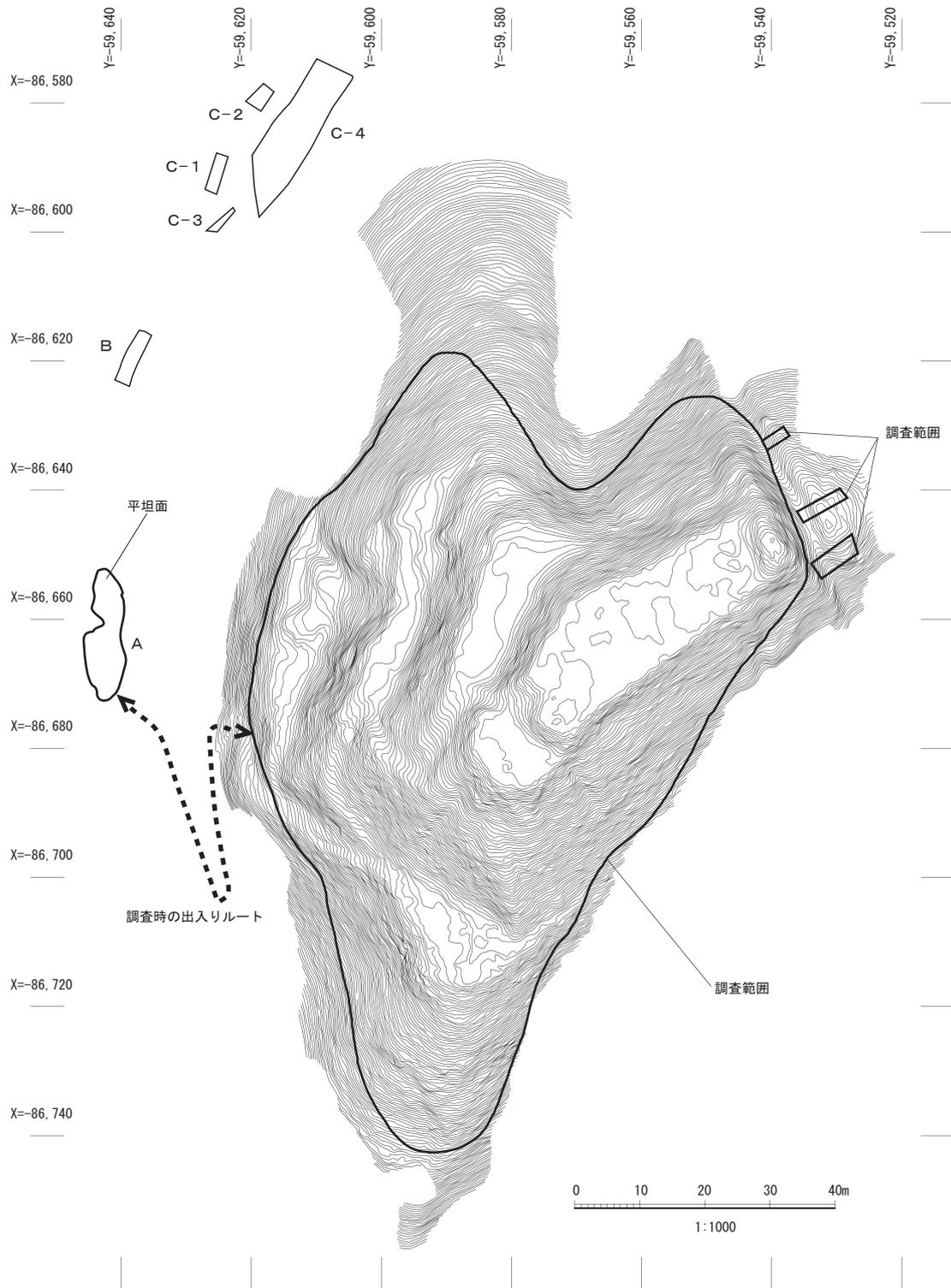
3棟の礎石建物や石積土坑があり、そのうち4間四方の礎石建物SB1は中心的建物である。曲輪1への出入りは堀切方面へぬける虎口1と、曲輪2・3からの虎口2がある。いずれの虎口にも土留めの石積を伴っている。

曲輪2は、曲輪1の南西となりにある曲輪である。半円形の平面形態をしているが、南西の縁辺は曲輪1にあわせて直線的になっており、やはり塀の基礎と考えられる石列SV15がある。また南東・南西斜面には計6条の連続した堅堀を設け、曲輪6方面からの進入を防いでいる。礎石建物SB5は2間×4間の建物で、虎口2を視覚的にも際立たせる効果をもっている。そのほか石積土坑SK7がつくられている。

曲輪3～5は丘陵の北西斜面に階段状につくられる曲輪である。山側を削った切岸と、谷側の整地で平坦面をつくっており、切岸の斜面裾には排水溝を設け、斜面からの雨水の処理を行う。各曲輪でも礎石やピットを断片的に検出しており、建物が建てられていたとみられる。そのうち曲輪5の北端には虎口と考えられる方形の落ち込みがある。

曲輪6は、曲輪2の南西方向の下位にある曲輪である。平面形態が半円形で、礎石列や土坑を検出した。

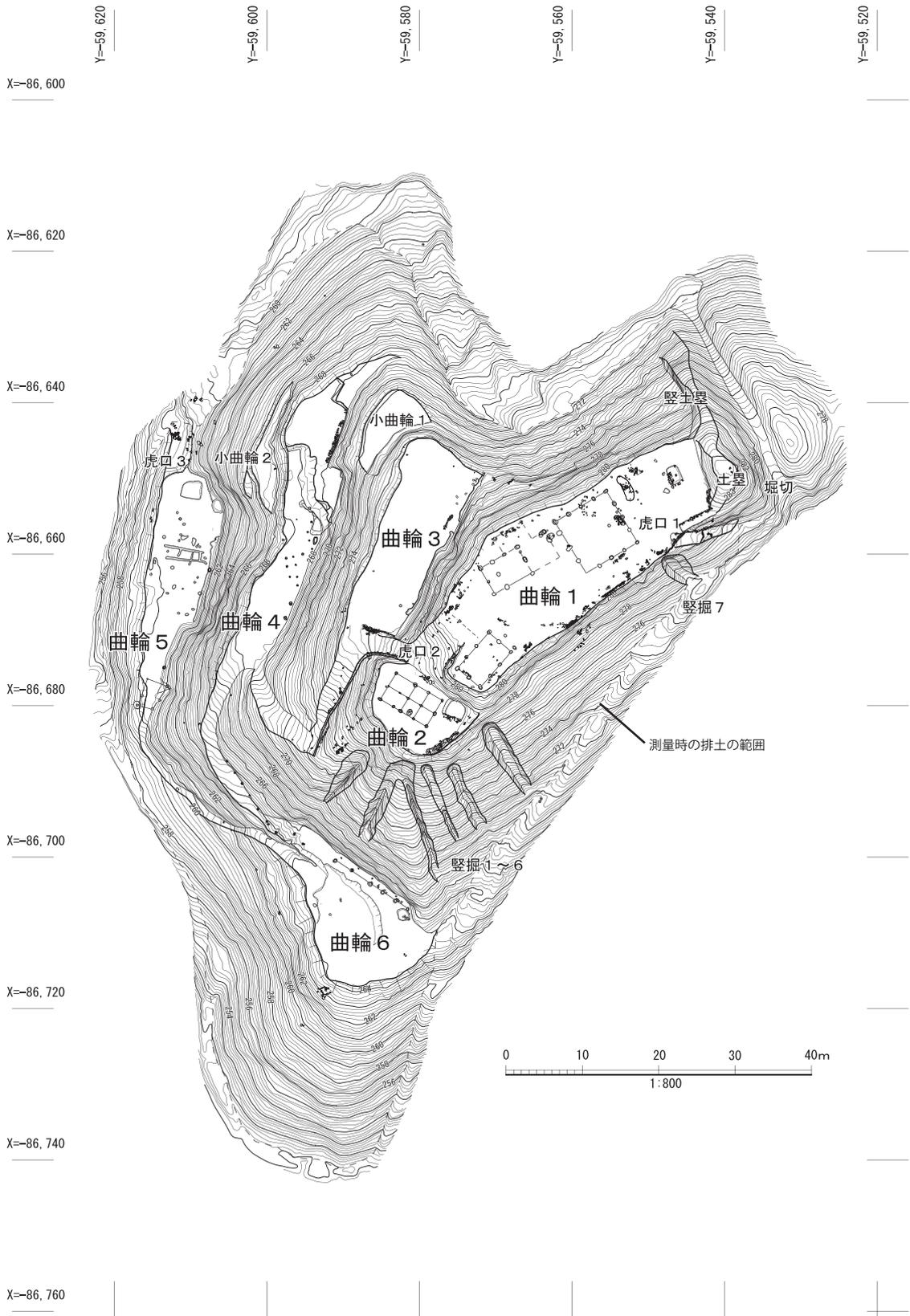
曲輪5の東側には、南北20.3m、東西の幅が最大で6.3m、標高239m前後の平坦面がある。曲輪5にある虎口はこの平坦面にむけて傾斜していることから、この間の道の存在が想定できる。現地調査時には国道173号(標高235m前後)から平坦面にのぼり、曲輪5の南にでる道を使用していたが、断ち割り調査の結果この道は城機能時のものではないと判断した。



第10図 調査前測量図

礎石や石積等に使用される石材は、主にチャートと泥岩であり、これに少数の輝緑岩も存在している。石は角のとれたものがほとんどで、一部に角礫が含まれる。後者は城内の露頭などで採取した可能性があるが、前者は周辺河川から川原石などを運んできたとみられる。

調査地は落ち葉・枝などで覆われており、まず人力でこれを除去した。次に畦の設定を行ったあと、表土の除去を行った。表土下には岩盤層や岩盤が風化した地山層、城構築時に岩盤や地山



第11図 三ノ宮東跡城全体図

層を動かしたとみられる整地層が存在する。また斜面や、斜面裾には城廃絶後に崩落したとみられる堆積層が存在する。遺構検出は岩盤層・岩盤層が風化した地山、および整地土上でおこなったが、いずれも由来を同じくすることから、所によってはそれぞれの峻別や遺構の認識が非常に難しかった。

4. 検出遺構

遺構には、主要6か所の曲輪(曲輪1～6)と斜面地の遺構(竪堀・竪土塁・階段状虎口・道)がある。道を除く斜面地の遺構は、これらが設けられた地点に近い曲輪との関連を重視し、竪土塁1・竪堀7は曲輪1のところで、竪土塁2・竪堀1～6は曲輪2のところで記述している。道については、曲輪1・曲輪2に関連する枅形虎口部分についてのみ分離して記している。

1) 曲輪1 (第12～27図)

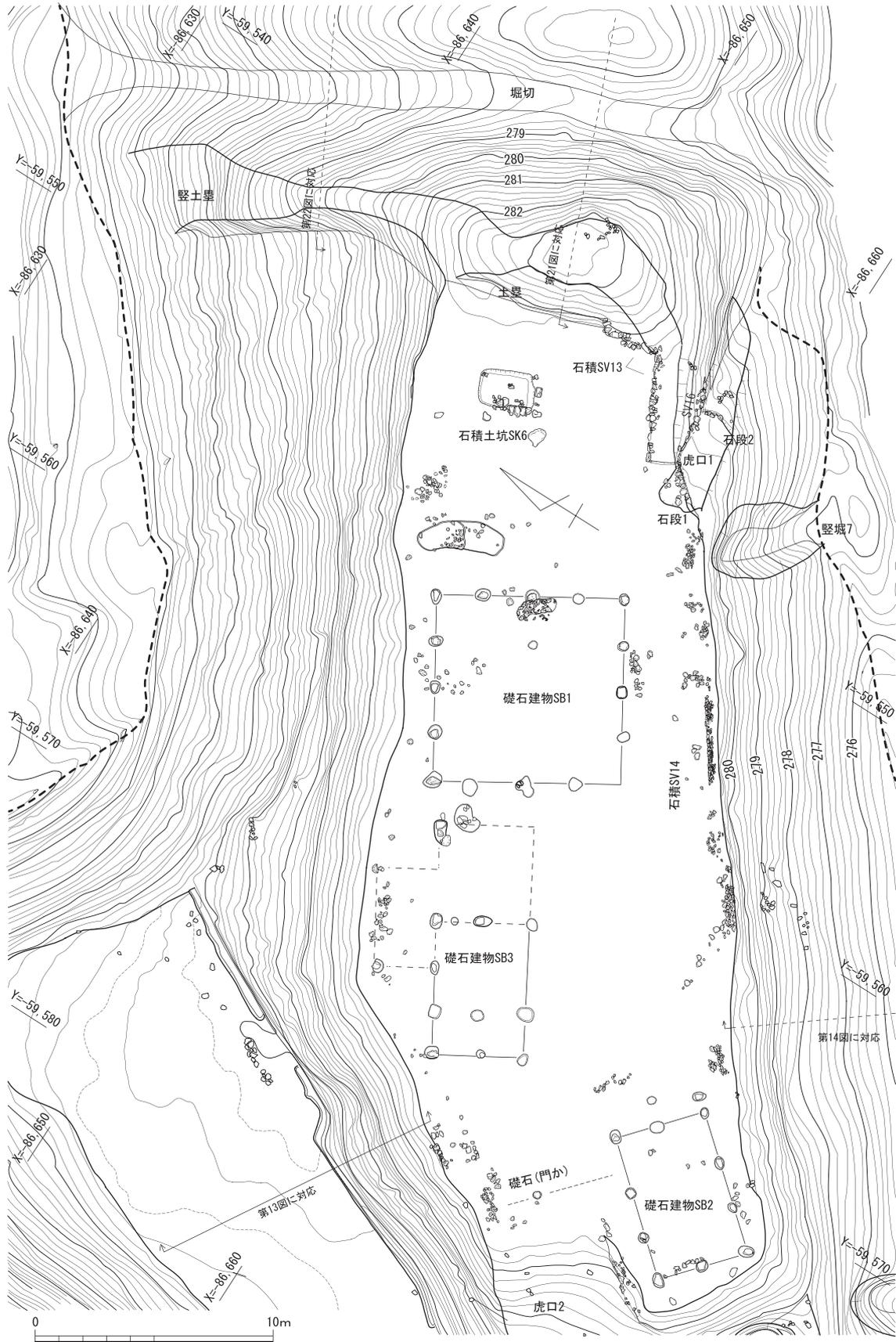
曲輪の形状・規模 曲輪1は、北東から南西方向に細長い形状の曲輪である。平坦面は最長42m、最大幅16mの規模で、平坦面の面積は約540㎡である。曲輪の南東の縁辺は、尾根筋を延長するようにはほぼ直線的である。これに対して北西の縁辺は、中ほどにおいて30°屈曲している。これは尾根筋延長線を、北西斜面に作り出した曲輪3・4・5の縁辺部に合わせるためであると考えられる。曲輪の南西部は虎口となっている。南東端は大きく張り出して造成されている。曲輪1の平坦面は概して北東部が高く、南西部が低い。北東端での標高は281.5mを測り、南東の突出部での標高は280.5mである。この平坦面は、中央部は岩盤のカットによって、縁辺部は整地によって作られたものである。東の縁辺部は整地土により若干盛り上げられている。その斜面は岩盤を削ったもので、30°程度の傾斜で、谷底に向けて延びている。西の斜面も岩盤を削った45～55°程度の傾斜をもっており、北半部は谷底にむかって、南半部は曲輪3に向かつてのびている。曲輪1は曲輪群の最高所にあり、最大である。複数の礎石建物があることから主郭となる曲輪であろう。

虎口1 (道A・石段1・石段2) 曲輪1の虎口は北東および南西に2か所ある。北東側を虎口1、南西側を虎口2とする。虎口1は、曲輪1北東部と堀切の南東部をつなぐ出入口である。土塁南西部から直角近くで土手が築かれ、土塁側からスロープとなって下りてくる。その下りきった所が虎口の始まりで、そこから堀切に向かって斜め方向の道がつけられている。道の土手側には石積が築かれ、路面には粗い造りながら2段の階段(石段1、石段2)が設けられていた。道A、石段1、石段2についてここで記す。

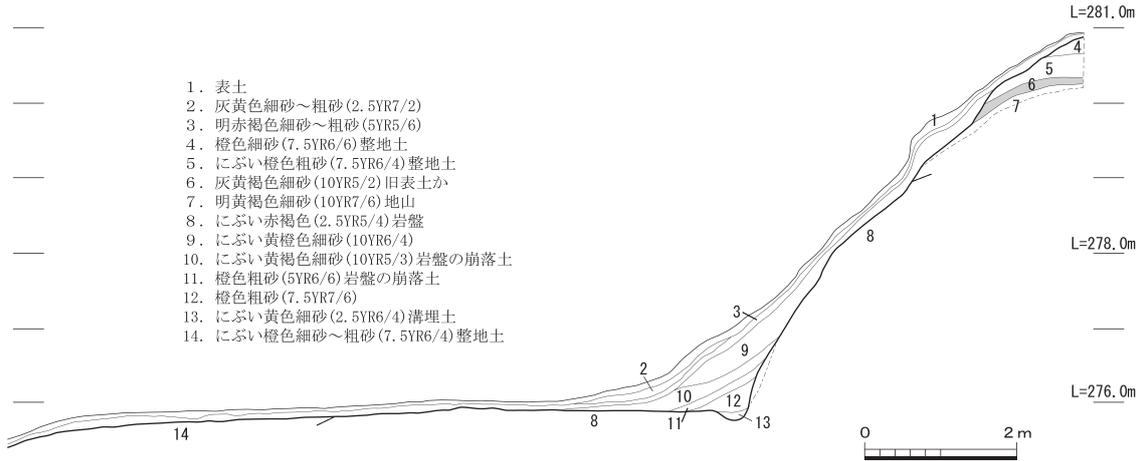
道A 東端は排土のため確認できていないが、堀切の南東部につながるとみられる。確認部の長さは8mで、幅は1～1.5mである。両端の比高は4mである。

石段1 曲輪1平坦面と道の境界線に並べられた石である。大きさ30cm、厚さ15cm程度の石を、7石平置きする。道方向に面を合わせており、高さ0.15mほどの段をつくる。

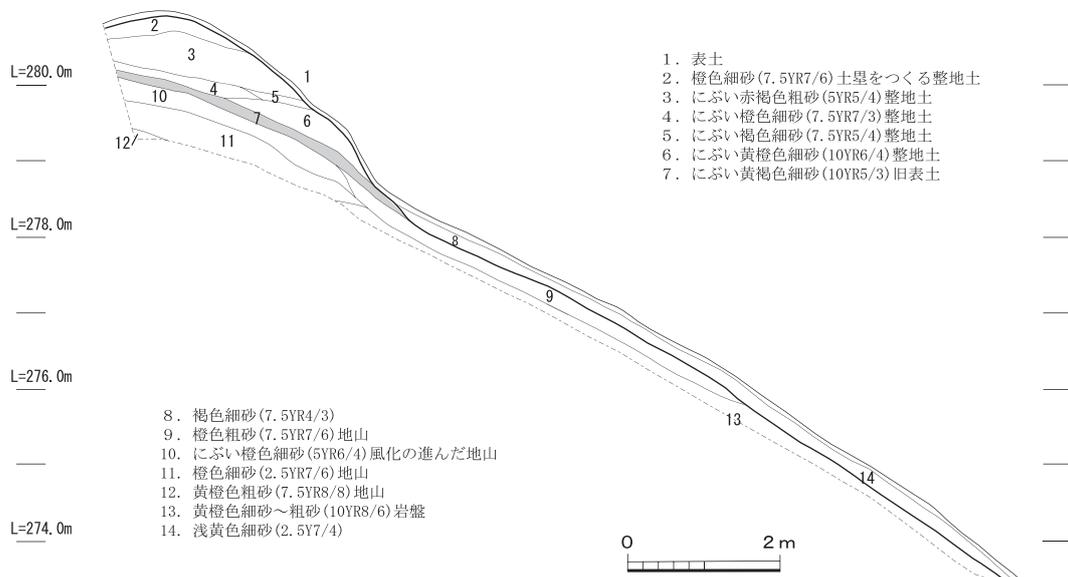
石段2 大きさ25～30cmの垂角礫を4石面をそろえて置き、平石一石をこの面にあわせて積んでいる。上方からの転落石の可能性あったが、面をそろえていることから、石段と判断した。



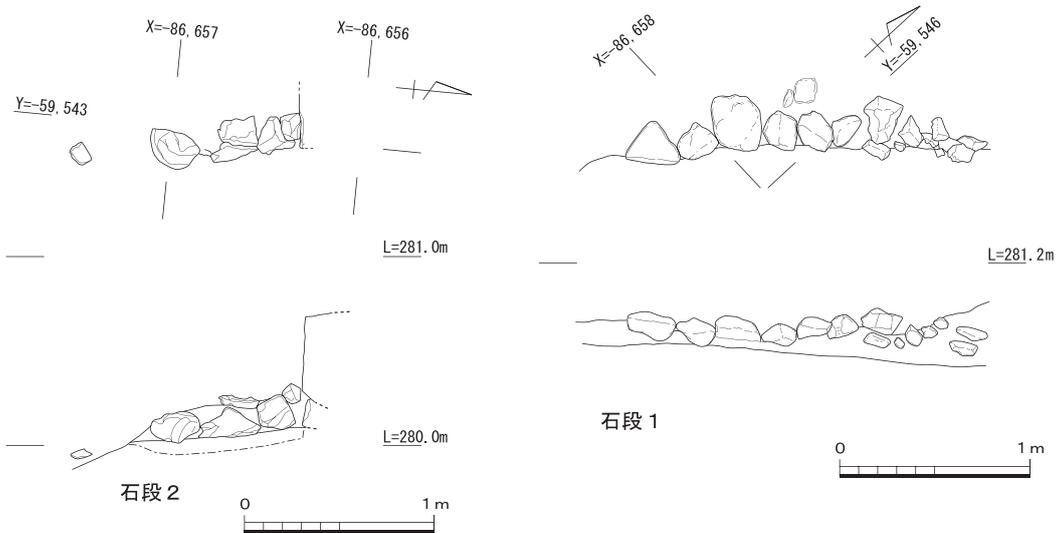
第12図 曲輪1平面図



第13図 曲輪1西斜面・曲輪3断面図



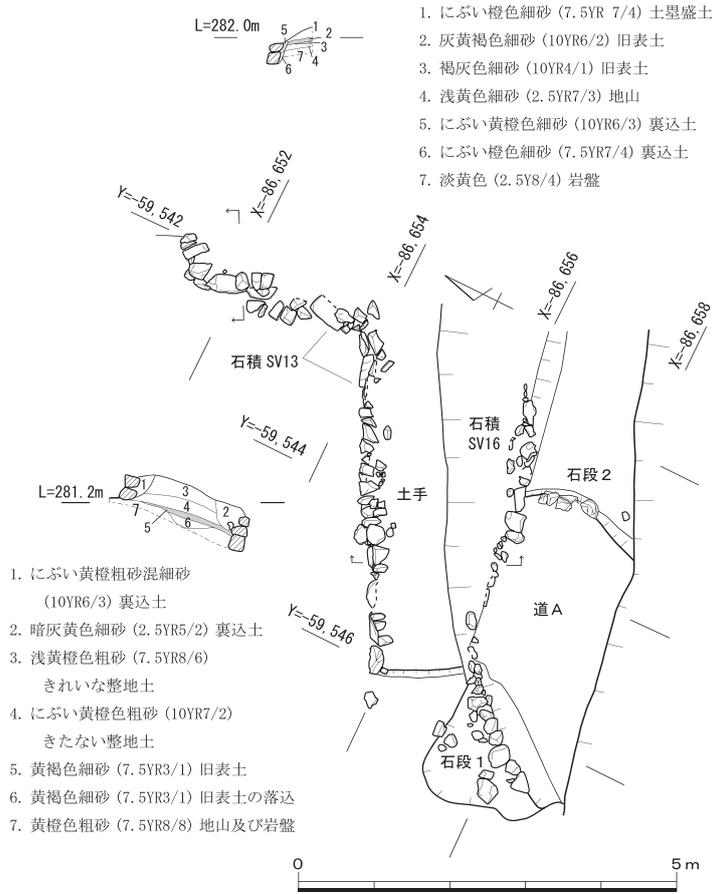
第14図 曲輪1東斜面断面図



第15図 虎口1(石段1・2)実測図

土手 盛り土によって造られており、長さ4.5m、幅1mを測る。曲輪の平坦面からの高さは40cmだが、土塁との接続部はスロープ状に高くなっており、土塁の頂部まで容易に登ることができる。曲輪側には、土塁と土手に対してL字に取り付く石積SV13、道側には石積SV16がある。

石積SV13 SV13のうち土塁の部分は土手の付根から北に2.5mの長さに伸び、短く90°に折れて土塁斜面に取り付く。基底部に40cm角の垂角礫を置き、その上には30cm程度の長方形の石が面を合わせて重ねられ、特に土塁に取り付く部分は、高さ0.8mに石を4段程度に積み、丁寧に造っている。断ち割り断面



1. にぶい黄橙粗砂混細砂 (10YR6/3) 裏込土
2. 暗灰黄色細砂 (2.5YR5/2) 裏込土
3. 浅黄橙色粗砂 (7.5YR8/6) きれいな整地土
4. にぶい黄橙色粗砂 (10YR7/2) きたない整地土
5. 黄褐色細砂 (7.5YR3/1) 旧表土
6. 黄褐色細砂 (7.5YR3/1) 旧表土の落込
7. 黄橙色粗砂 (7.5YR8/8) 地山及び岩盤

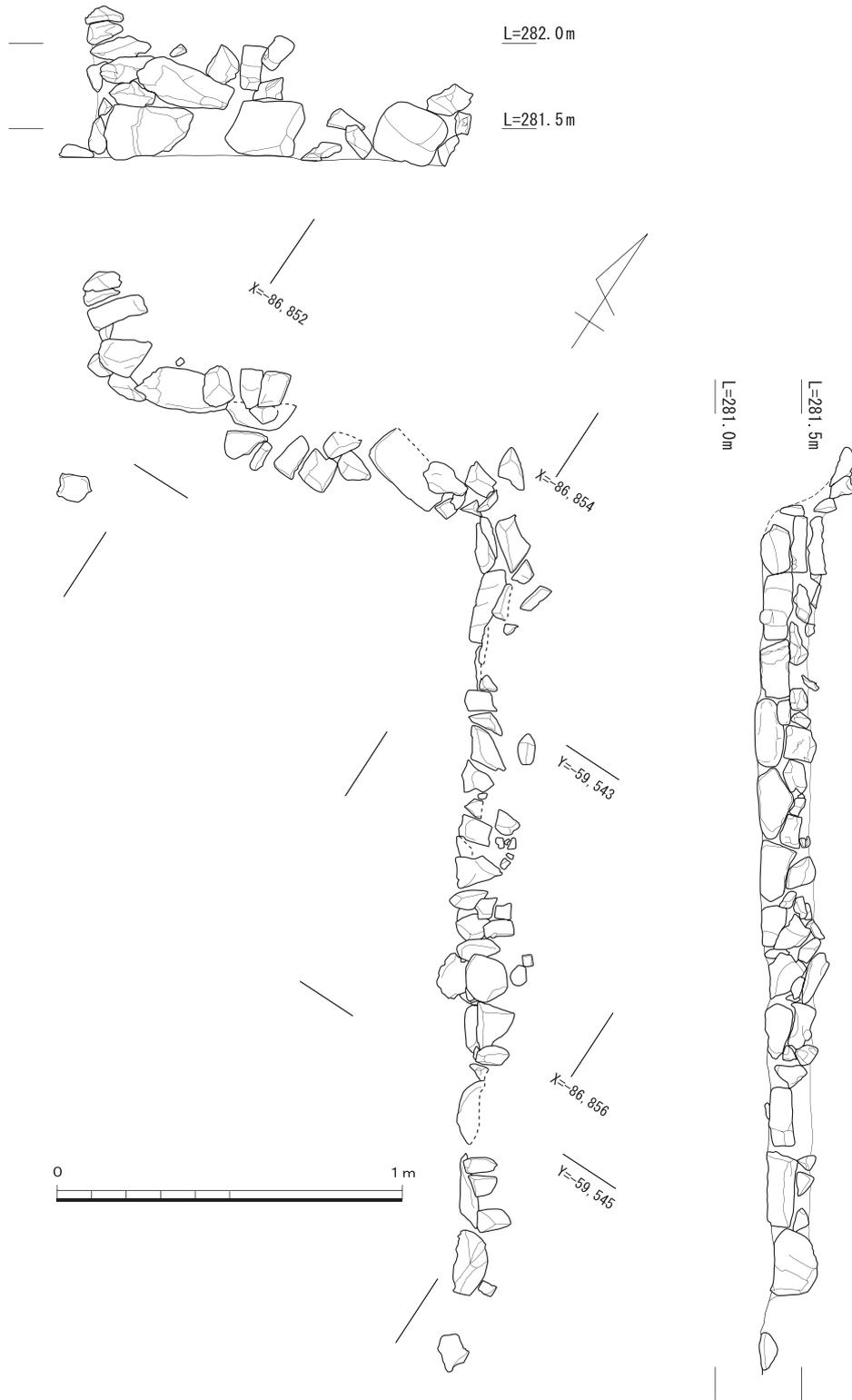
第16図 石積SV13等周辺実測図

によると、土塁の盛り土をカットした後、岩盤の上に基底石を置き、奥の岩盤との隙間に裏込土を入れている。裏込土は土塁中の旧表土を覆っている。一方、土手部の石積は長さ40cm程度の長方形の石を使用している。長手に2段積んでいて、高さは0.2～0.3mを測る。検出時に付近で散乱していた石の量から判断すると、本来はいずれも現状より1・2段の石を上積みしていたと考えられる。

石積SV16 SV16は長さ3.6m、高さは0.4～0.5mである。東に下る道に最大70cm、平均40cmの扁平な石を基底面に置き、その上に20cm程度の石を2・3段積んでいる。

SV13・16間の断ち割り断面によると、土手は傾斜変換点に盛り土してつくられたことがわかる。平坦な部分は岩盤をカットした面で、斜面部には4cm程度の薄い旧表土が確認できる。両積石の背後には裏込めの土を入れている。土塁部のSV13の裏込土は、土塁中の旧表土を覆っており、土塁の改変時に作られたことが分かる。つまりこの旧表土は城機能時のものである。虎口1の土手・道とそれに伴う石積は一体的なものと考えられることから、虎口1は土塁の改変時につくられるか再整備されたとみられる。(加藤雅士)

石積SV14 SV14は南東側縁辺に沿って残存している石積である。直線的に伸び、所々に途切れた箇所が見られる。虎口1から南西に延びる石積は、SB1のそばの石列に対応して約2m途切れる。その南西に長さ約5mの石積列があり、5mの間隙をおいて約2mの石積列がある。

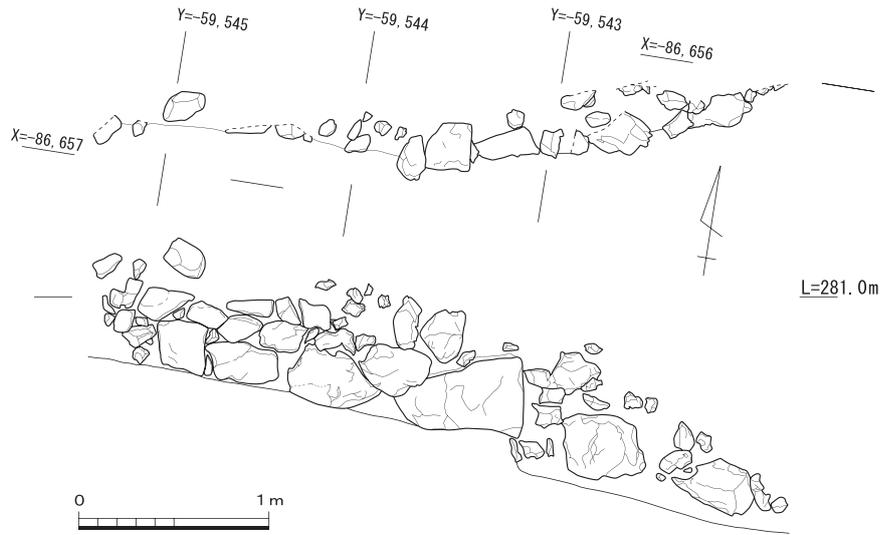


第17図 石積S V13実測図

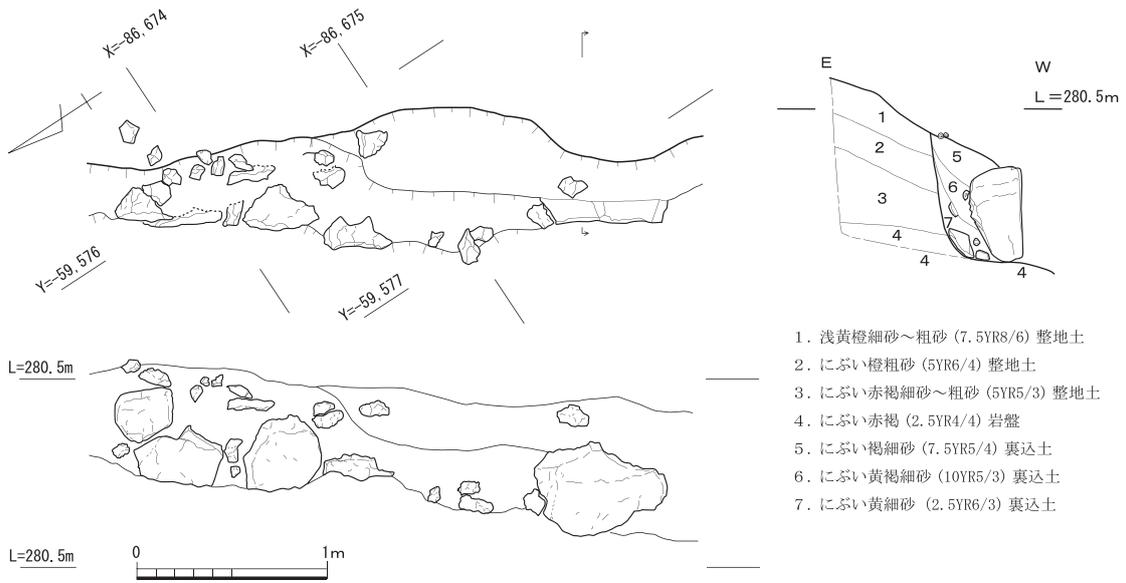
断絶部を含めた長さは約30m、幅は0.5～0.7mを測る。

(黒坪一樹)

石積S V 9 道Bの東端である、曲輪1南側の張り出し部虎口2に面してにつくられた石積である。長さは2.9m、高さ0.4～0.5mである。使用される石材は長さ40～70cm、厚さ30cmの平石で、基底には大きめの石が使われている。石は岩盤上に直接置かれており、曲輪1の整地土

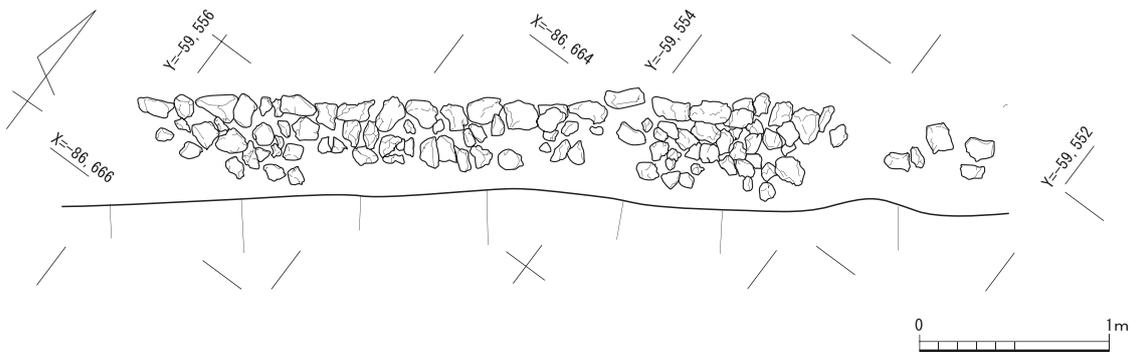


第18図 石積 S V16実測図

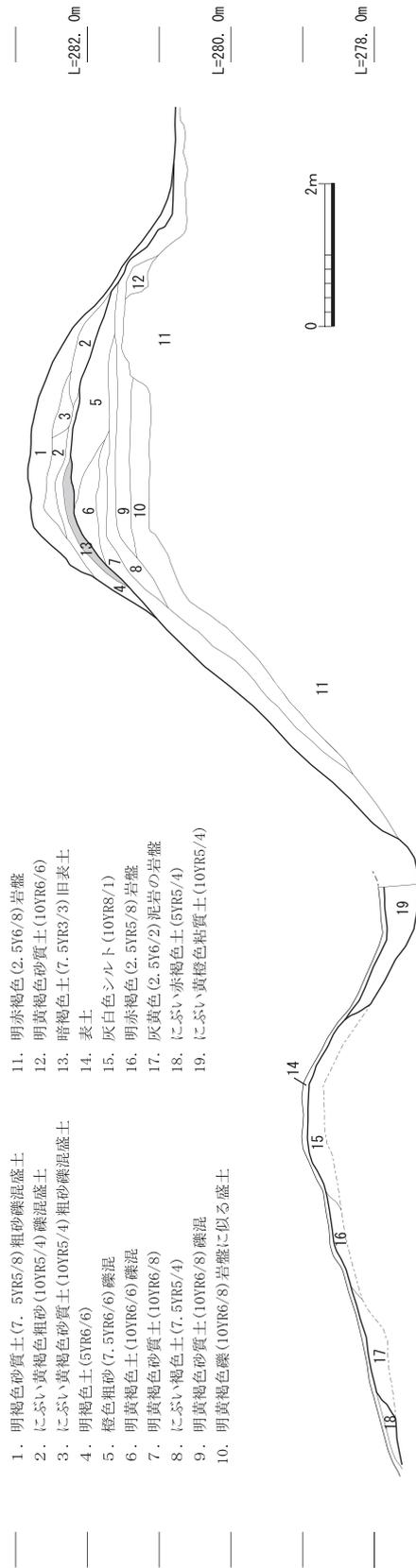


1. 浅黄橙細砂～粗砂 (7.5YR8/6) 整地土
2. にぶい橙粗砂 (5YR6/4) 整地土
3. にぶい赤褐細砂～粗砂 (5YR5/3) 整地土
4. にぶい赤褐 (2.5YR4/4) 岩盤
5. にぶい褐細砂 (7.5YR5/4) 裏込土
6. にぶい黄褐細砂 (10YR5/3) 裏込土
7. にぶい黄細砂 (2.5YR6/3) 裏込土

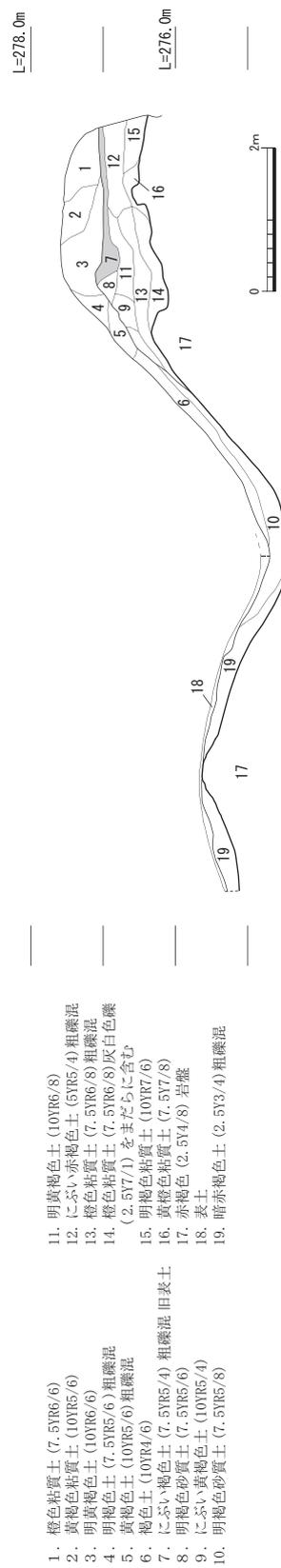
第19図 石積 S V9実測図



第20図 石積 S V14実測図



第21図 土壘・堀切実測図



第22図 土壘・堀切実測図

をカットした背面には裏込土が入れられる。裏込土の最下層は礫が多く混じる土である。

S V 9の下方には人頭大の角礫が多く散乱していることから、本来は2・3段の石積であったとみられる。その役割は曲輪1側面の土留めとともに、道Bに対して視覚的効果を有していたと考えられる一方、石積がつくる面と道の平坦面は直角で交わらない。道Bの斜平面は、S V 9に対しては手前1mのところから比高差0.5mの緩斜面となっており、石積の技術的限界を示していると考えられる。(加藤雅士)

土塁 東側尾根筋から曲輪1への侵入を防御する目的で、曲輪1の北東縁辺に隣接して築かれている。曲輪1の平坦面からの比高は2mを測る。また、この土塁を築いたことにより下の尾根筋を断ち切った堀切底からの比高は最大で約8mに達する。土塁最大幅は中間部で5.5m、北西端で3.5m、南東端で4.2mを測る。南西部は土塁頂部へのぼるスロープとなっている。頂部から丹波焼甕の体部や銭貨などが出土した。

堀切までを含む土塁の堆積状況は、岩盤から大きく数層に分けて説明することができる。岩盤の基底から、芯となる土を積み上げ、次に曲輪1平坦面側へブロック状に積んで拡張させていったとみられる。中間よりやや上層に有機質を含む黒褐色土がみられ、別の時期における土塁頂部とみなされ、少なくとも二時期にわたって造り直されているのがわかる。下層の旧表土下より金銅製の鍬形台〔図版第25(3)〕の破片や土師器皿、陶器片などが出土した。

堀切 堀切は、南東側の端は不明ながら、長さは約30mを測る。なお、調査範囲外となるが、堀切より東側の尾根筋にも土塁状の盛り上がりがあり、小規模な堀切が2条掘られている。この土塁状の部分について、層序および遺物の堆積・包蔵状態を確認するため、幅1.5m、長さ8～10mのトレンチを3か所(拡張区1・2・3)設定した。その結果、いずれのトレンチも表土直下で岩盤面となり、堆積土はほとんどなく、また出土遺物も皆無であった。

竪堀7 曲輪1の東斜面北側に設けられている検出長4.8m、幅2～3.2m、深さ0.2～0.4mを測る。地山層を掘り込んでいるが、断面形は「U」字形を呈する。埋土は黄褐色土で、数cmの大きさの礫を疎らに含んでいる。

竪土塁 竪土塁は土塁の長軸に沿う北西斜面に堤状に築かれた土塁である。堀切同様、曲輪1への侵入を防御するための施設である。長さ11m、幅3.2m、最大高0.8mの規模である。断ち割って堆積状況を観察した結果、土塁と同様、数層の重なりがみられた。

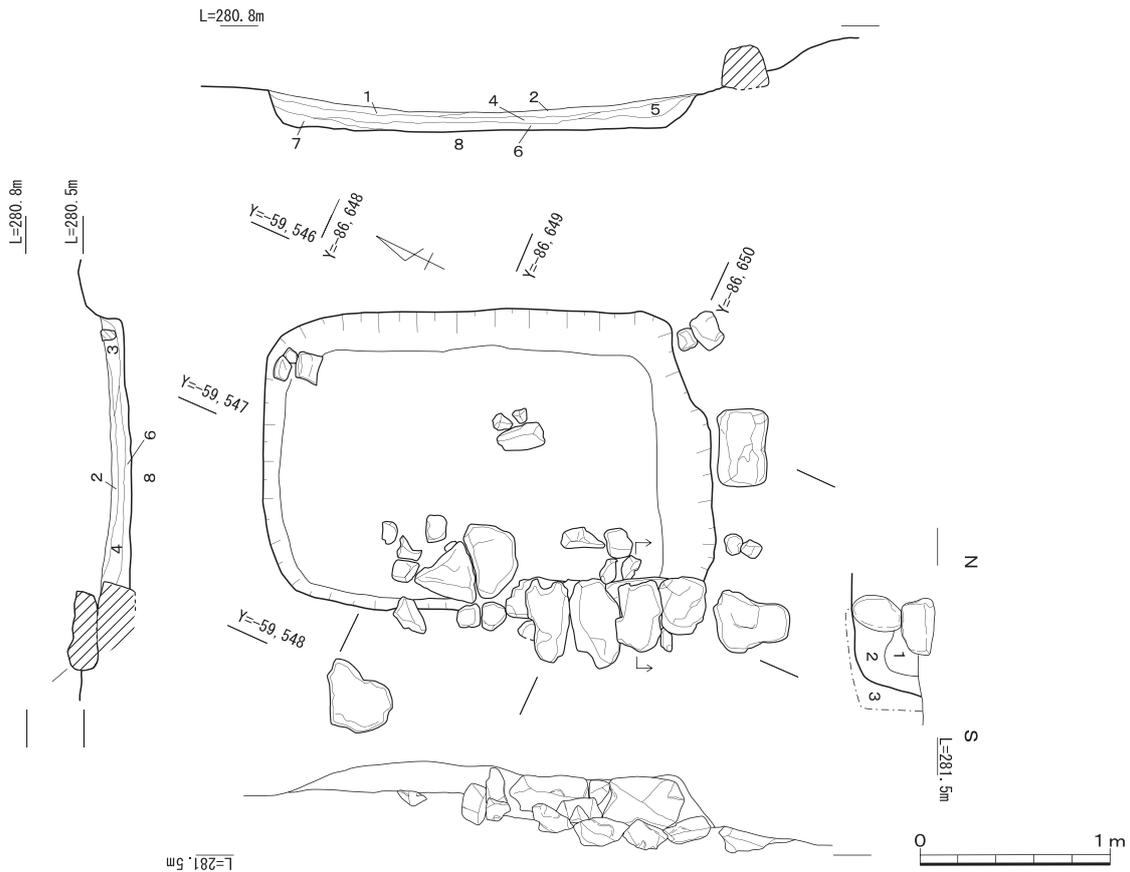
集礫遺構S X 4 千個を超える大小の礫が集積していた。その範囲は東西3.6m、南北3.5mにわたる。直線を意識して石を並べている所もあるが、全体として区画されたものとは考えられない。礫は岩盤から割り取られたような円磨度の低いチャートおよび泥岩の角礫である。いずれも径10～30cmまでのものであるが、中央部に一石だけ長さ70cm、幅50cm、厚さ25cmの大型のものがあつた。礫の間から、丹波焼甕の破片が数点出土した。

石積土坑S K 6 S X 4の礫を除去後に、集礫範囲の北東寄り、長方形の土坑を検出した。長辺2.35m、短辺1.8m、深さ0.2mで、西側長辺にのみ6石で内側に面を揃えた石積が施されていた。貯蔵穴とみられる。(黒坪一樹)



第23図 集礫遺構 S X 4 検出状況

礎石建物跡 S B 1 曲輪 1 の中央部に位置する 4 間四方の礎石建物で、城の中心的建物である。柱間は1.95mの等間である。柱の通りから曲輪の縁辺までの距離は、北東側が 1 m である。これに対し南東側が 3.5m で、南東方面を意識した建物と考えられる。礎石10基と、礎石抜き取り穴 5 基を確認している。礎石には偏平形や方形の垂角礫が使用されており、大きさは30cm程度、厚さ 15 ~ 30cm である。いずれも上面に整った平坦面を有しており、慎重に石材の選択が行われたとみられる。礎石据付掘形は、礎石よりひとまわり大きい程度のもので、深さは0.2m程度である。これらは他の建物の



1. 黒褐色粘性砂質土 (7.5YR3/1) 表土
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)
3. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)
4. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
5. 褐色粘質土 (10YR4/2)

6. にぶい黄褐色礫混じり粘質土 (10YR4/3)
φ 3 ~ 5 cm 大の岩盤由来礫含む
7. 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
8. 明赤褐色礫 (5YR 5/6) 岩盤

〈断剖面土層〉

1. 灰黄褐色細砂 (10YE4/2) 裏込土
2. にぶい黄褐色細砂 (10YR5/3) 裏込土
3. 明赤褐色礫 (5YR5/6) 岩盤

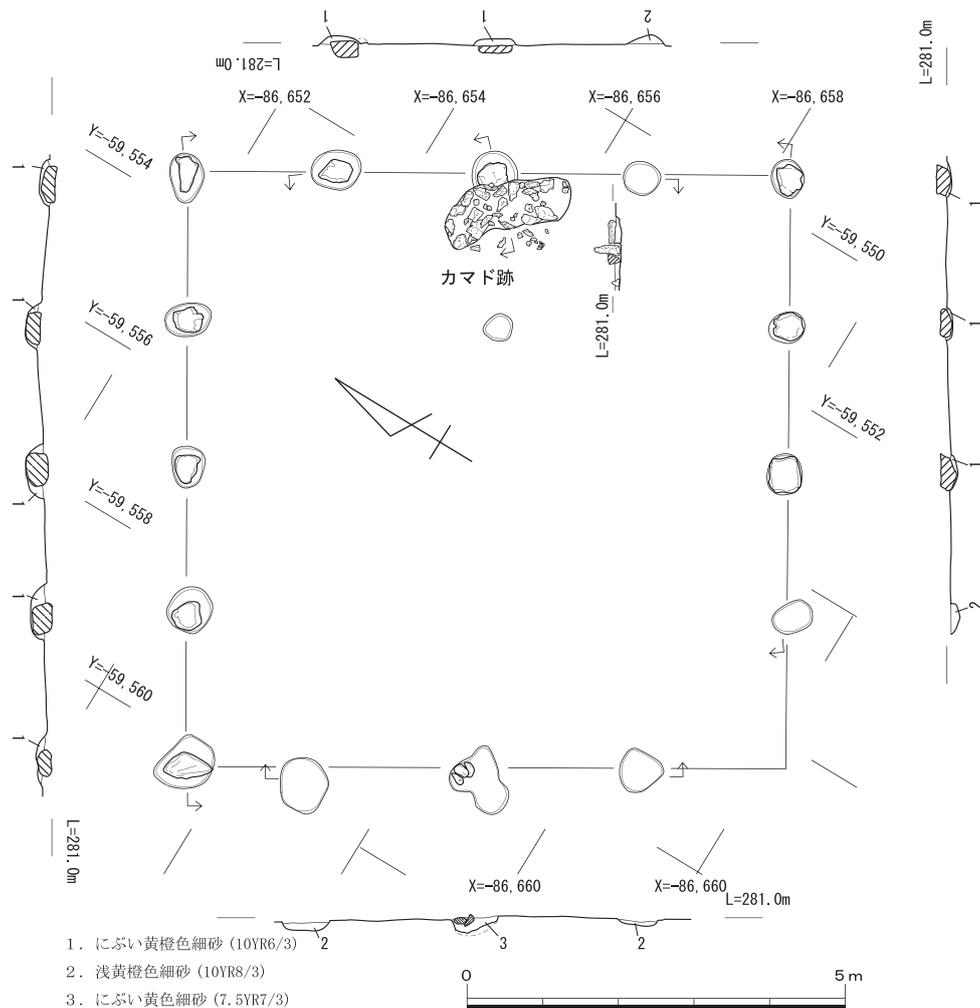
第24図 石積土坑 S K 6 実測図

礎石にも共通する特徴である。

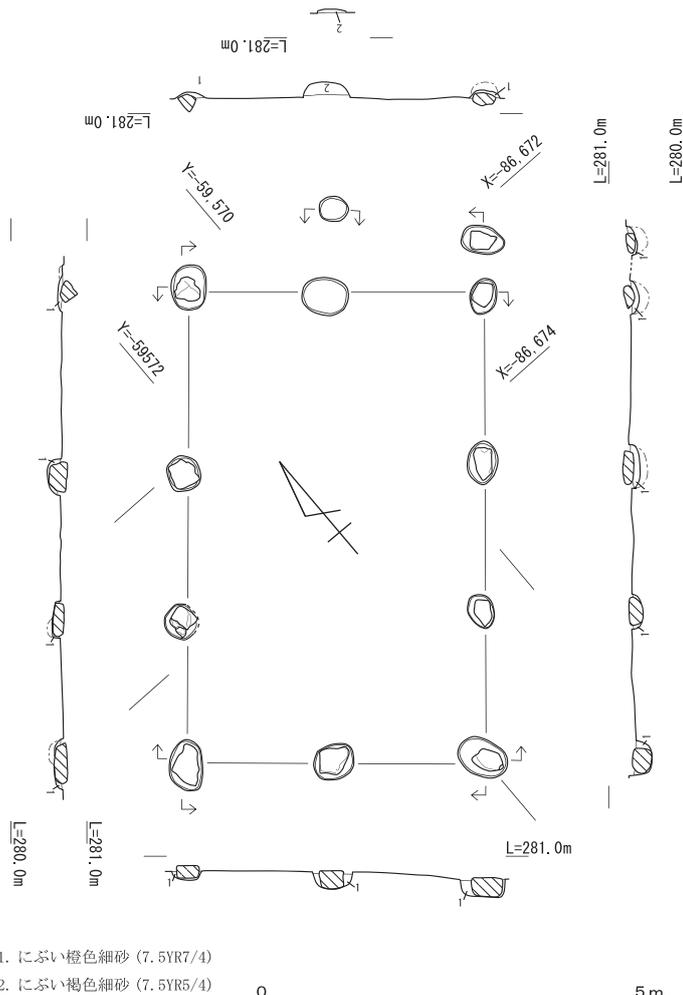
北東柱列の中央部内側には、礎石に接して半円形状に石が配されている。これの堀形は礎石据付堀形を切っている。炭や赤変は認められなかったが、カマド等の厨房施設の可能性がある。また南東の柱筋の外には石列がある。これは、壁立ちなど建物構造に由来するもの、あるいは南東方面を意識した塀の可能性がある。

礎石建物跡 S B 2 曲輪 1 の南東端にある 2 間 × 3 間の建物である。曲輪の突出部にあわせた方位をとっており、礎石建物 1・3 とは建物方位が異なる。柱間は 1.95m で等間であるが、北の 1 間のみ 2.4m である。南妻に近接して礎石らしきものがあり、付属施設がとりついていた可能性がある。また南西柱筋の内側には、拳大の石による石列がある。虎口に隣接することから、隅櫓的な性格が考えられる。

礎石建物跡 S B 3 S B 1 の南西隣にある礎石建物。柱間は 1.8 ~ 2m である。礎石の残りが悪く、建物の復元が確定しない。S B 1 の北西辺と柱通りをあわせている点を評価すると、2 間 × 3 間の建物と考えられる。一方、曲輪に屈曲部にある点と周辺の礎石を全て積極的に評価すると、曲輪 1 に柱通りをあわせた 2 間 × 5 間の建物に 1 間 × 2 間の張出部が付属する凸形に復元するこ



第25図 礎石建物跡 S B 1 実測図



第26図 礎石建物跡SB2実測図

ともできる。ただし、張出し部にあたる3石は上面が平坦ではないという難点がある。

その他の礎石 曲輪1南西部の虎口に近接した場所に、礎石が1石ある。この曲輪の縁辺部には、ソフトボール大の石が不整形ながら列状に散在している。礎石は、石の列やSB3の桁行きに対して直角のラインに置くことができるので、門などを構成していた礎石の一つである可能性がある。(加藤雅士)

2) 曲輪2 (第28～35図)

曲輪の形状・規模 曲輪1から南西方向に南北約14m、東西約9mの半円形の曲輪で、面積は約80㎡である。曲輪1から曲輪3へと降りる中間地点に位置する。曲輪1とは約2.5m、曲輪3とは約3mの標高差がある。

る。南東方向に向いた曲輪である。

検出遺構には2間×4間の礎石建物跡SB5、石積土坑SK7、石積SV15などがある。また、曲輪の南東斜面部に掘られた6条の竖堀群がある。これらは曲輪2の南東側に集中して掘られているので、ここで記述しておきたい。

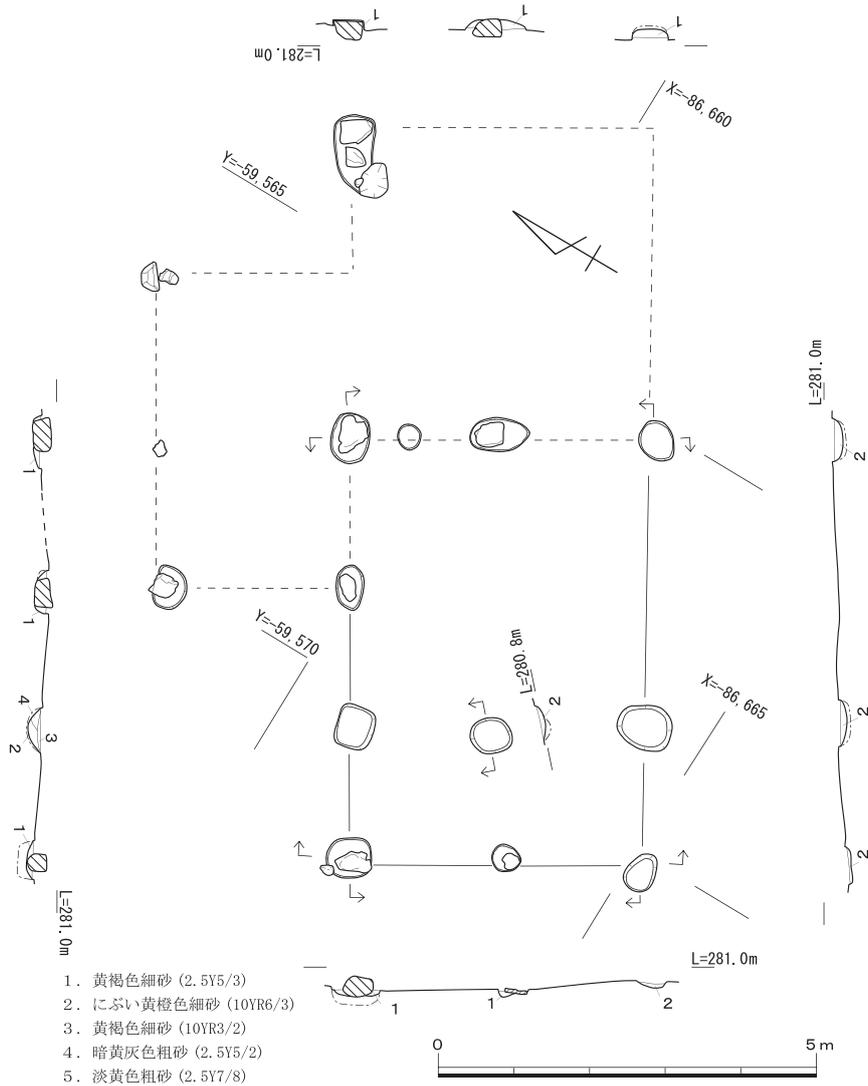
曲輪の東西に断ち割りを入れたところ、岩盤の上に整地したとみられる層が確認できた。本来の地形は西が低く、現状の地形も東に比べると10cmほど低い。東は、整地層の上に石積SV15を固めるように土塁状の高まりがあった。

出土遺物は、礎石建物跡周辺から北宋銭、白磁、青花磁器などが出土している。

石積土坑SK7 曲輪2の北東隅で、曲輪1の斜面裾部に設けられた土坑である。不定形な方形で、長辺2.8m、短辺2.1m、深さ0.45mを測る。南側のみ長辺に沿って径40～55cmの大きさの角礫を積んでいる。長辺に角礫を積む造作は、曲輪1の石積土坑SK6と共通する。北側は曲輪1の裾部にかかり、硬い岩盤面まで掘り込んでいる。中国製青花磁器碗片、丹波産甕片、瓦質播鉢片などが若干出土している。

(牧田梨津子・黒坪一樹)

虎口2 (枅形虎口・道B・道C) 最高所の中心的な曲輪1への正面虎口である。道B・Cが一



第27図 礎石建物跡S B 3実測図

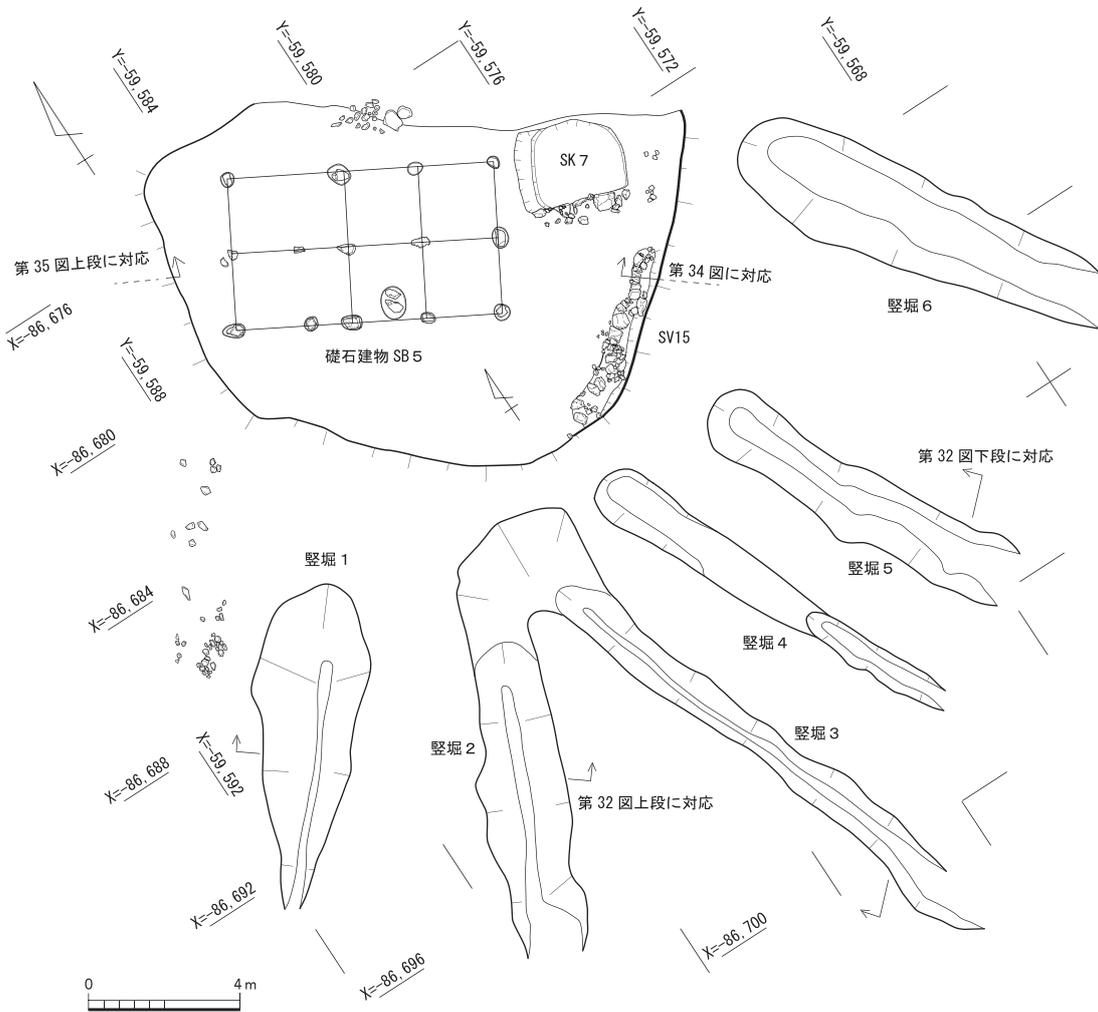
連になって、曲輪1の南西端に内枘形の虎口をつくる。

曲輪1南東部は隅櫓と想定される礎石建物跡S B 2があるため、大きく張り出している。虎口はその張り出し部の北西に隣接して設けられている。道D～Fはいずれの箇所も幅1.2～3.5mほどであるが、この虎口に至り、半間分ほど幅が広がっている。したがって虎口の幅は4.5mを測る。これは通常の山城虎口の規模としては広いといえる。

道B 曲輪1の平坦部の南西端を凹ませた形で造られた長さ6m、幅5mの斜路である。路面は岩盤層を削ってつくられており、道の両端の比高は2m、傾斜度は20°である。

道C 曲輪2の北端と曲輪3の南端をつなぐ道で、道Bとは直角に接続する。路面は岩盤を削ってつくられており、長さ6m、幅3mを測る。道の両端の比高は2.8mで傾斜度は15°である。道の南端には道Dへと続く排水溝が掘られている。また道の南端にはソフトボール大の石が列状に散在していた。

石積S V 10 道Aの北側面につくられた石積である。長さ4.5mで、最高部の高さは0.9mである。石は長さ30cm程度の長方形の垂角礫で、長手積みで1～7段に重ねる。基底部の1石は他より

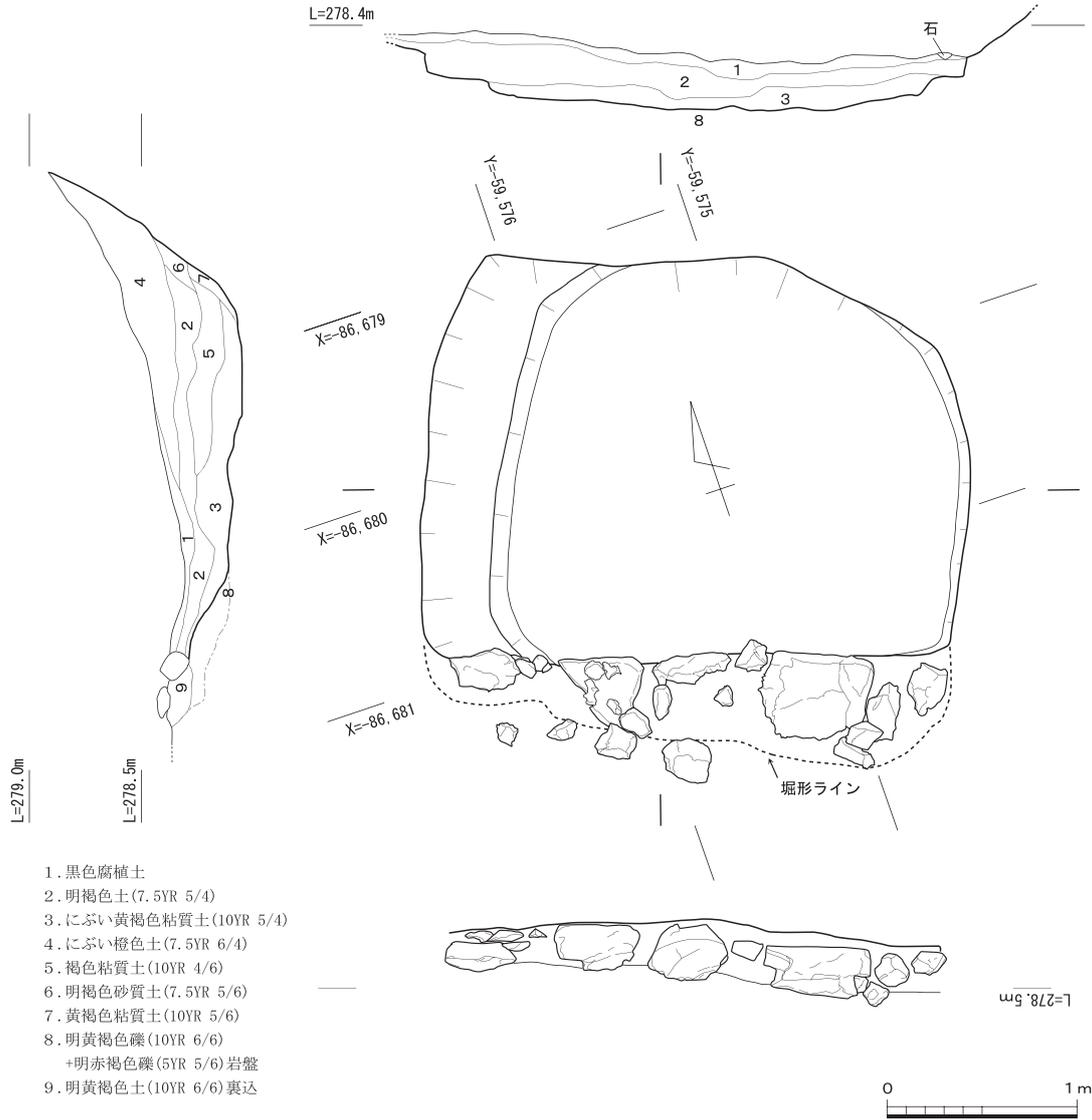


第28図 曲輪2平面図

奥行きのある石が使用されており、これを岩盤を削った平坦面に置いて、背面に裏込土を入れている。積石の石材選択や構築方法という面では、大きな平石を使用するSV16とSV9、長方形の石材を長手積みするSV13とでそれぞれ類似している。(加藤雅士)

礎石建物跡SB5 総柱建物である。梁間2間で南北4m、桁行4間で東西7mの長方形の建物跡である。礎石は10～20cm大のチャートである。扁平な割り石ではなく厚みがあり、立方体に近いものもある。SB5の南西、SV15とSK7との間の面は、踏みしめられて堅くなった形跡がある。出入口として頻繁に利用されたか、土間のような作業空間であったかもしれない。建物跡は、曲輪1の斜面裾部から約1.5m、南側縁辺から約3.5m離れているが、曲輪2全体のおよそ4割近くを占めることから、周辺の動きはかなり制約されよう。曲輪1の隅櫓的な建物SB2とともに眺望は良好である。

石列SV15 南東側の縁辺部にそって築かれた石積あるいは石塁の残欠とみられる。およそ0.2mの高さに盛り上がり、小規模な土塁状である。礫の多く残存している所の長さは5.3m、幅0.7m、高さ0.3mを測る。径40～50cmの大きな礫も含むが、大部分は10～25cmまでの礫が用いられている。本石塁は曲輪2の縁辺全体に巡らない。6基の堅堀とともに、南方向への防御を強



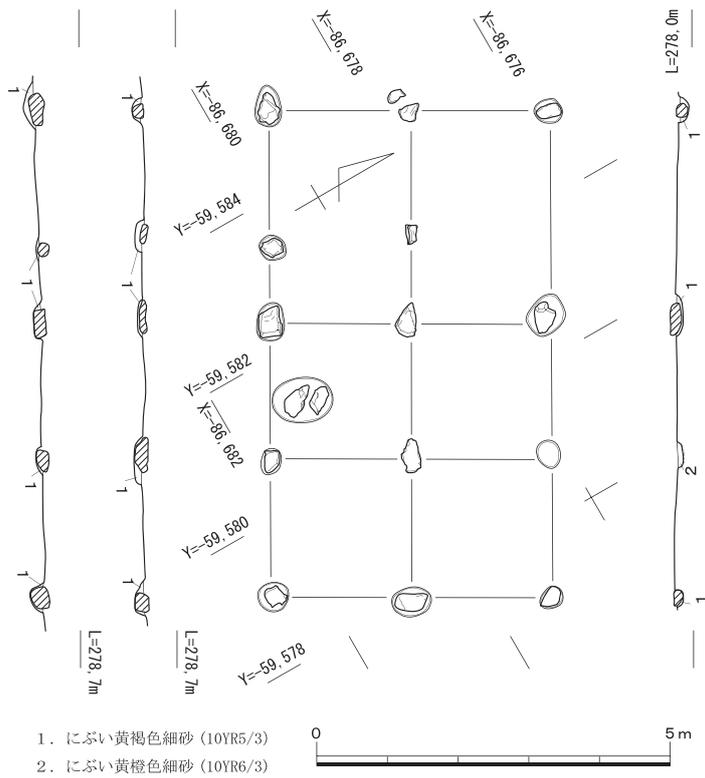
く意識したものといえる。

竪堀群 本山城の防御施設としては、曲輪2の南西側に6条竪堀が並行して集中的に造られている。竪堀1および竪堀2は深く岩盤面を削り、「V」字形の断面形となっている。その他の竪堀は浅く、断面形も「U」字形である。

竪堀1 長さ12m、幅3.2～4m、最大深さ1.5mを測り、「V」字形の断面である。埋土は3層に分かれ、上位から明褐色土、明赤褐色粗礫土、明赤褐色粘質土となる。

竪堀2・竪堀3 2条の竪堀が連続して掘られている。この2条の間は、曲輪1から曲輪2の東斜面と、曲輪2から曲輪6に下る南西切岸との傾斜変換ラインにあたる。竪土塁としての機能を有しているとも考えられ、掘り上げた土砂により隆起させている。竪堀2は長さ11.2m、幅1.6～2m、最大深さ1.2m、断面形状は「V」字形で、底にいくほど幅が極めて狭くなる。竪堀3は長さ18m、幅1.2～2m、最大深さ0.6mを測る。断面形状は「U」字形である。

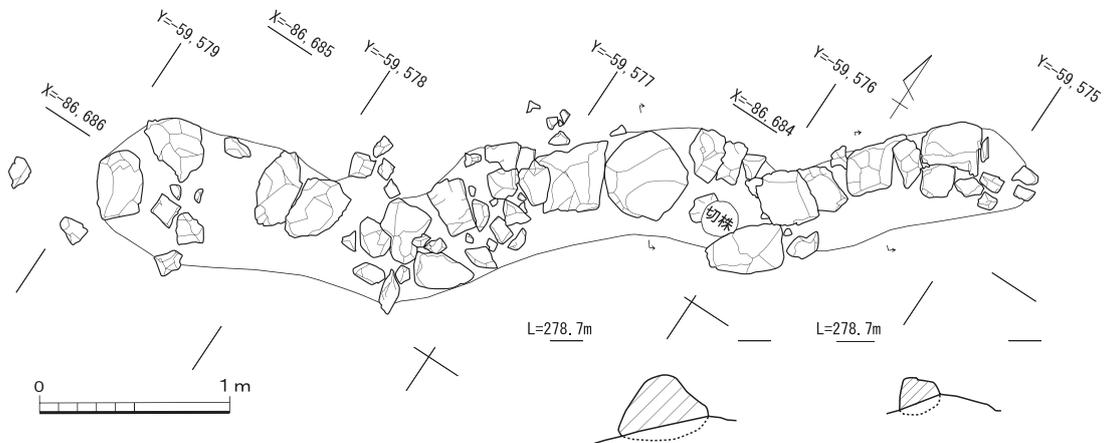
竪堀4～6 竪堀4は、竪堀3より4m東に掘られた小規模な竪堀である。長さ11m、幅0.8



第30図 礎石建物跡S B 5実測図

からの転落とみられる大小の礫が切岸裾ラインに沿って散乱していた。削り取った斜面および平坦面の土砂で西側を面的に大きく拡張させている。縁辺および裾部のラインは直線的で、南北の細長い形である。面積は約222㎡である。南東側に設けられた石積S V10と、曲輪1の切岸ラインは直角で、曲輪1への虎口部への道の幅を決定しかつ補強している。遺構は石積のほか、礎石建物跡と考えられる礎石、切岸にそって浅く掘られた排水溝、短い石列、さらに北西部コーナーから張り出すように設けられた小曲輪1がある。

排水溝 曲輪1の切岸ラインに沿って、長さ12m、幅0.2～0.5m、深さ数cm、そして1.2mほ

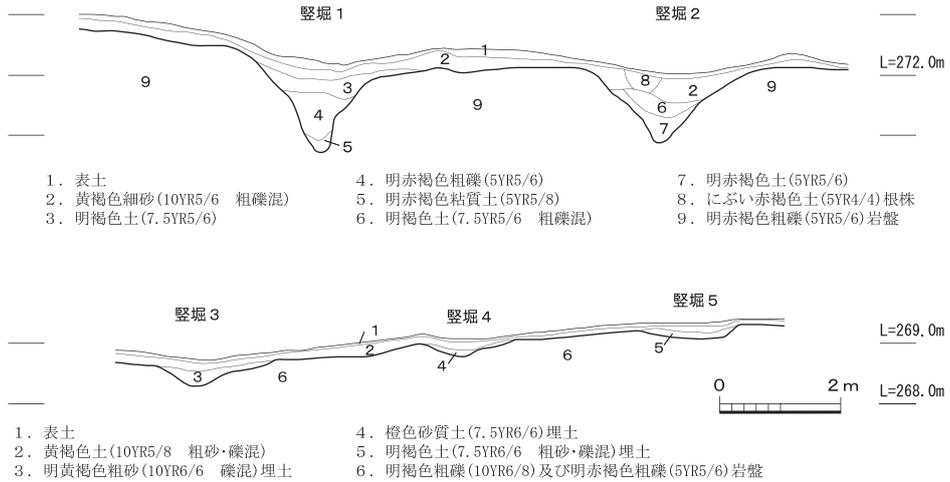


第31図 石列S V15実測図

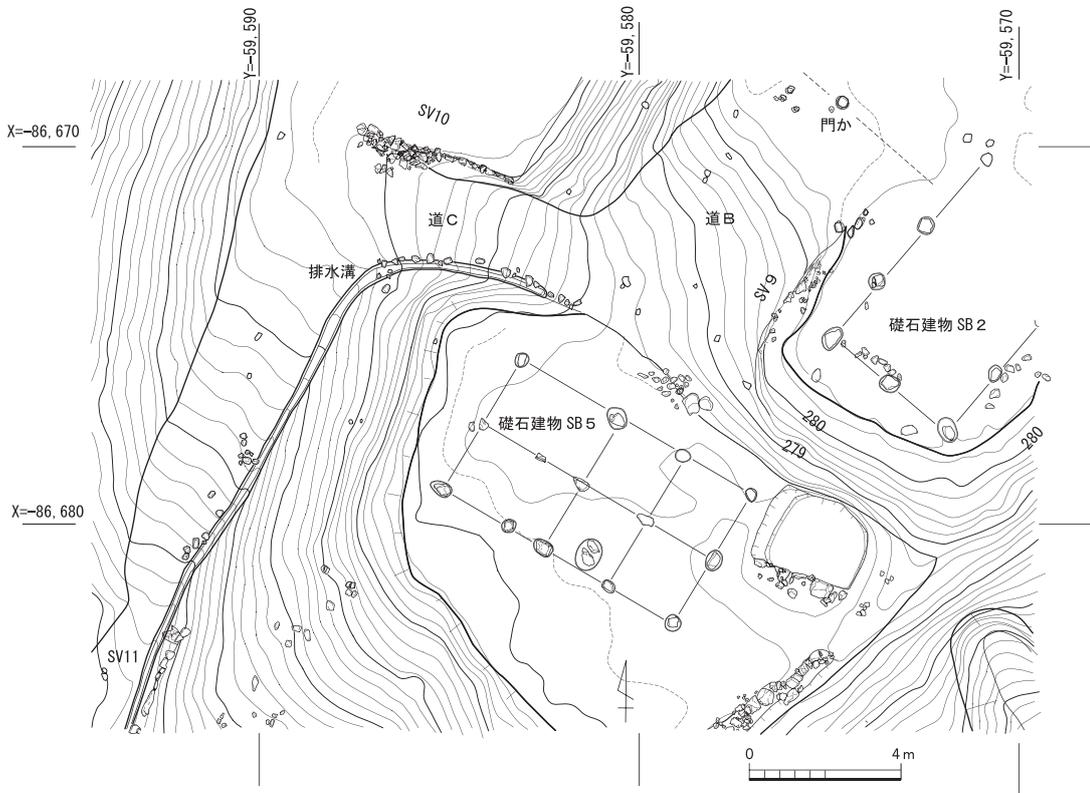
～1.1m、最大深さ0.3mの規模である。断面形状は「U」字形である。竪堀5は竪堀4に並行して掘られたもので、長さ13m、幅1.5～2m、深さ0.4mを測り、断面形状は「U」字形である。明褐色粗砂質土の埋土である。竪堀6は曲輪1と曲輪2の中間部から下方斜面に掘られたものである。長さ11m、幅2～2.4m、最大深さ0.6mの規模で、断面形状はなだらかな「U」字形である。(牧田梨津子・黒坪一樹)

3) 曲輪3 (第36～38図)

曲輪の形状・規模 曲輪3は、曲輪1の西側切岸から約5m下に造成されている。曲輪1から

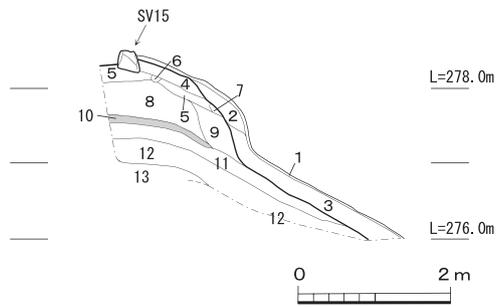


第32図 竪堀断面図

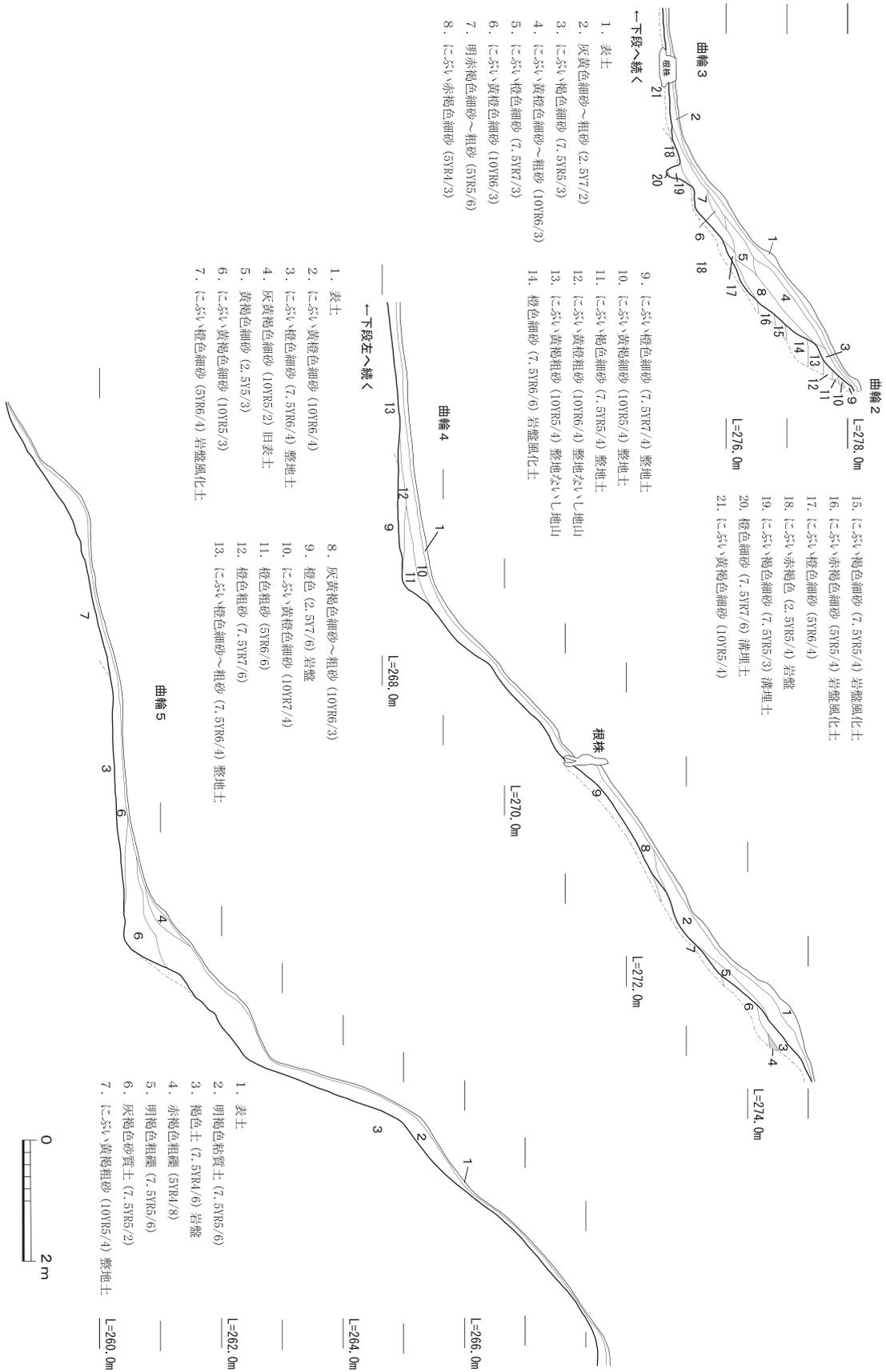


第33図 柵形虎口平面図

1. 表土
2. にぶい黄褐色細砂(10YR5/4)
3. 褐色細砂(10YR4/4)
4. 浅黄色細砂(2.5Y7/4)裏込の役割をする
5. 明赤褐色粗砂(5YR5/6)整地土
6. にぶい黄橙色(10YR6/3)整地土中ブロック
7. にぶい橙色粗砂(5YR6/4)5層風化土
8. にぶい赤褐色粗砂(5YR5/3)整地土
9. にぶい橙色細砂(7.5YR6/4)整地土風化土
10. にぶい黄褐色細砂(10YR5/3)旧表土
11. 橙色細砂～粗砂(5YR6/6)地山
12. 橙色粗砂～礫(2.5YR6/6)岩盤風化土
13. 明赤褐色(2.5YR5/6)岩盤



第34図 曲輪2西・東斜面断面図



第35図 曲輪 2 斜面～曲輪 4・5 断面図

どの断絶をはさみ、さらに長さ7.5m、幅0.2～0.3m、深さ数cmの規模で検出した。

礎石 建物跡を構成していたと見られる礎石が東西を軸に2基確認された。排水溝の南側先端部に近く、石の大きさはともに約20cm四方、厚さ数cmの扁平なものである。掘形の深さは数cmで浅い。

石列 S X 17 排水溝の断絶間で、谷側に約1mひかえて並行する石列である。長さ20cm前後、厚さ数cmを測る礫が長さ約2.2m、幅0.4mで集積している。排水溝とともに何らかの機能を果たしていたものと考えられる。集積内から遺物の出土はみられなかった。

小曲輪 1 北西方向に張り出すように造成され、張り出し4.5m、南北6.5mのほぼ半円形である。本来、南西方向に曲輪4を見渡せる位置にある。斜面を下ると、曲輪4の岩盤削り出しによる切岸となり、連繋する道などの遺構はない。



第36図 曲輪3平面図

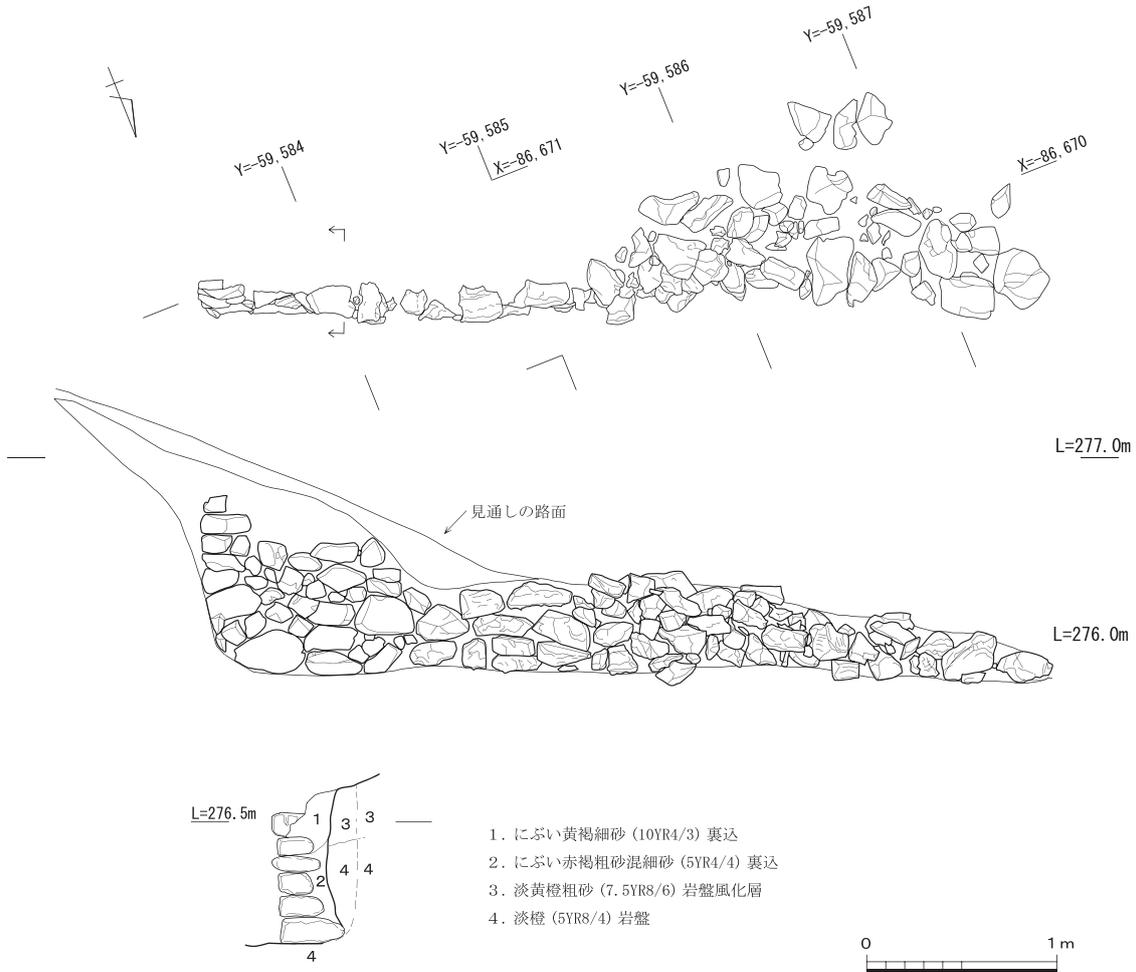
4) 曲輪4 (第39・40図)

曲輪の形状・規模 曲輪3の西側切岸から3.5m下位に設けられた平坦面である。切岸部は岩盤まで完全に削り込まれており、特に小曲輪を含めた張り出しと切岸裾は、直角のクランク状に画されている。形状は南側が細長い長方形、北側は地すべりによる3つの段差とともに細長い翼形の張り出し(小曲輪2)をもつ。面積は約202㎡である。

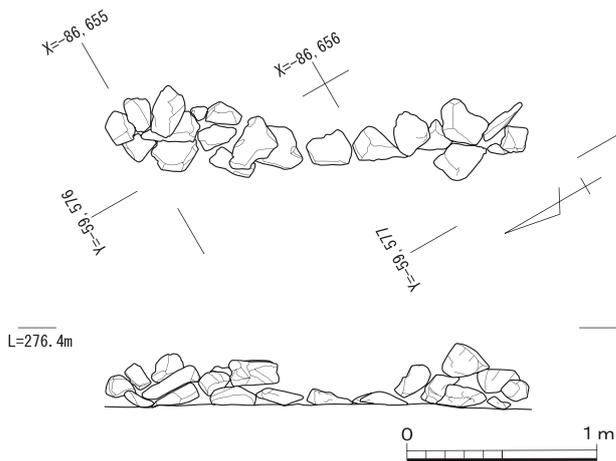
遺構は、礎石建物跡の可能性もある礎石、北側の切岸との裾部に集石列、不整楕円形土坑、切岸に沿って断続的に設けられた排水溝がある。

石列 S X 24 北西側の段上、切岸裾部に沿って並ぶ集石列である。長さ6m、幅0.35mである。集石の大きさは拳大から人頭大のものまでである。集石除去後に下部から幅0.4m、深さ0.05mの溝状遺構を検出した。

礎石 切岸中間よりやや南の裾部で、2基の礎石を検出した。2基の間隔は2mである。とも



第37図 石積S V10実測図



第38図 石列S X17実測図

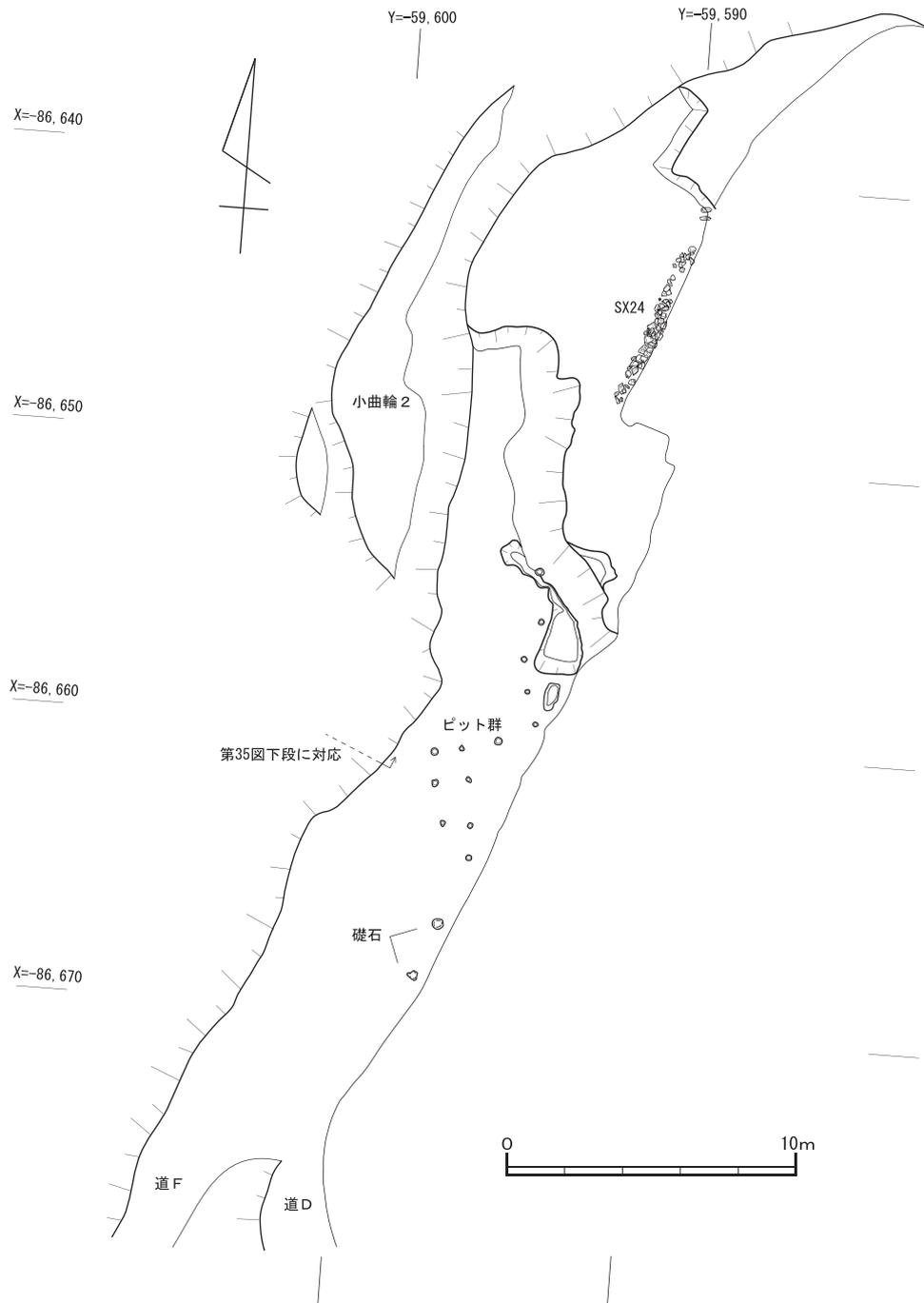
に長さ25～35cm、幅20～25cm、厚さ10cmの石で、据えるために約数cm掘り込んでいる。建物を構成していたと考えられるが、復元はできない。

柱穴 直径15～20cm、深さ10～25cmの比較的小規模なピットを14基検出した。埋土は黄褐色砂質土や粘質土である。遺物の出土はみられなかった。掘立柱建物跡の復元はできなかった。

排水溝 北側の段差に沿って浅く掘られた溝である。長さ3m、幅0.3～

0.7mである。南端は、1.5×2mの土坑状に広がっている。

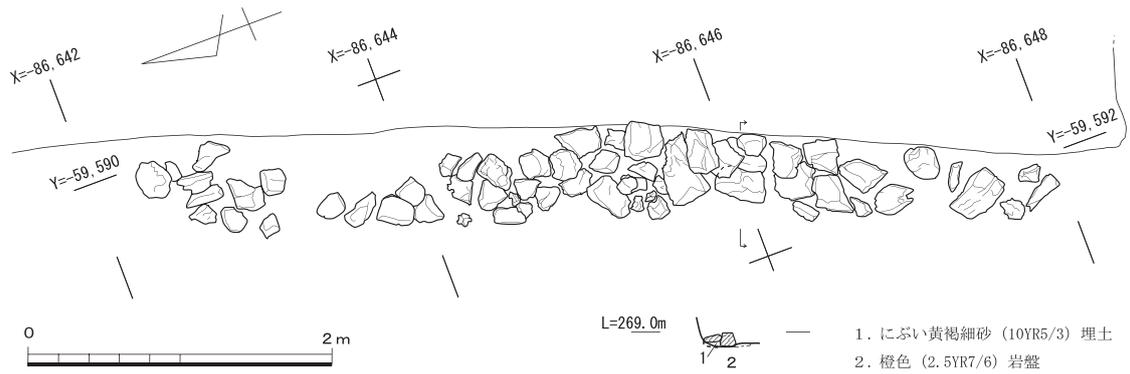
小曲輪2 北西部から曲輪5の北側へ下る斜面に造られた細長い平坦面である。南北18m、東西4m、幅は1～4mで北に向かって狭くなっている。地すべりによる段差により生じた可能性もあるが、西側に大きく張り出しているため、曲輪5を横方向に見下ろすことができる。



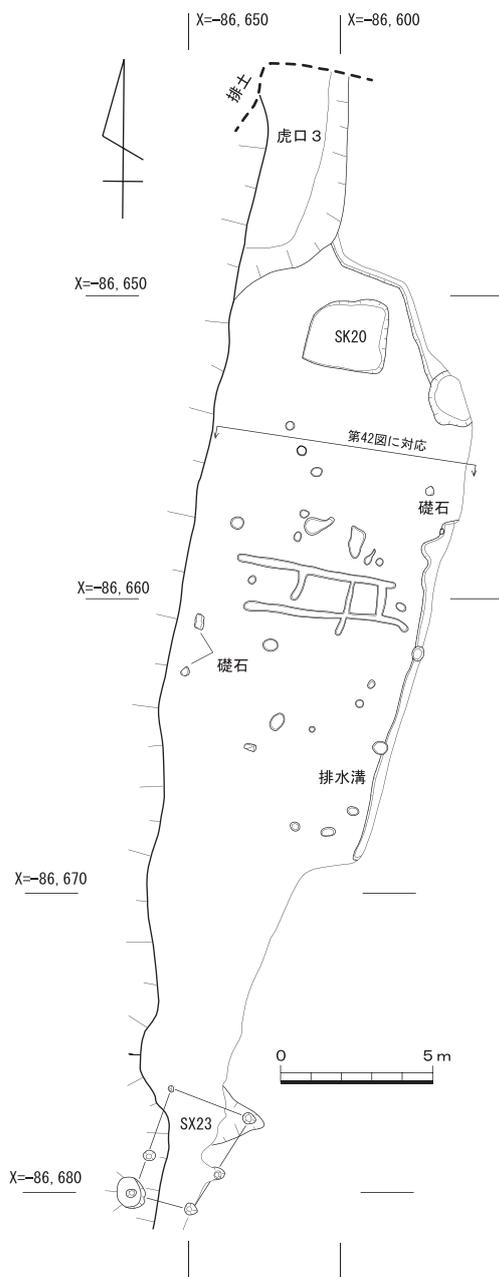
第39図 曲輪 4 平面図

5) 曲輪 5 (第41 ~ 44図)

曲輪の形状・規模 北西側で最下部に位置する南北に細長い曲輪である。面積は約161㎡である。曲輪 4 との間の切岸は地山面まで完全に削りだされ、急峻な斜面となっている。調査前より、曲輪北側に大きく二つのマウンド状の高まりがあった。掘削の結果、上位の曲輪 4 の切岸部の岩盤層が表土および埋没土とともに崩落し、平坦部に積み重なっていた。これらの崩落土を除去し、地山面での精査をした結果、溝、柱穴、礎石などの遺構を検出した。



第40図 石列 S X24実測図



第41図 曲輪5平面図

溝 幅20～30cm、深さ5cmほどの溝が1mの間隔をあけ、2条検出された。それに3本の溝(幅0.15～0.25m、深さ0.02～0.03m)が短く直角に交わり、区画された痕跡をとどめている。遺物の出土はみられない。

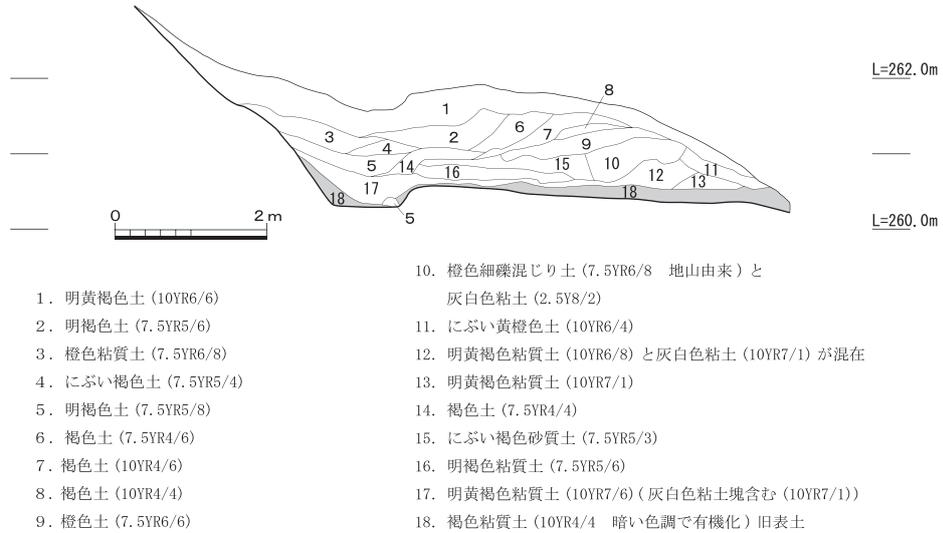
柱穴 直径0.15～0.4m、深さ0.1m前後を測る小規模な柱穴を、曲輪中間部に合計20基検出した。中から遺物の出土はみられなかった。山城の施設に関するものか不明である。

礎石 曲輪中間部の縁辺部に沿って、礎石が並んでいる。対応するものが切岸裾部に沿って、また中間部にも一石、同様の礎石を検出した。断片的ながら、梁間2間、桁行3間の礎石建物跡の存在が想定される。

柱穴列 S X23 曲輪の南端の出入口にあたる箇所、直径約0.25m、深さ約0.25mを測るしっかりと掘形をもつ柱穴を6基検出した。1mの間隔で並んでおり、門の可能性はある。

土坑 S K20 虎口の東側の、角度をつけて掘削・整形された切岸の裾部に寄って、2.3×2.5mの方形に掘られた浅い土坑である。深さは約0.1mを測る。中から遺物は出土しなかった。(黒坪一樹)

虎口3 曲輪5の北端で方形の落ち込みを確認した。曲輪5の平坦面との比高は0.7mで、曲輪5の北端から落ち込みに対して、長さ1m、幅2mの傾斜面を作っている。断ち割りによると、この



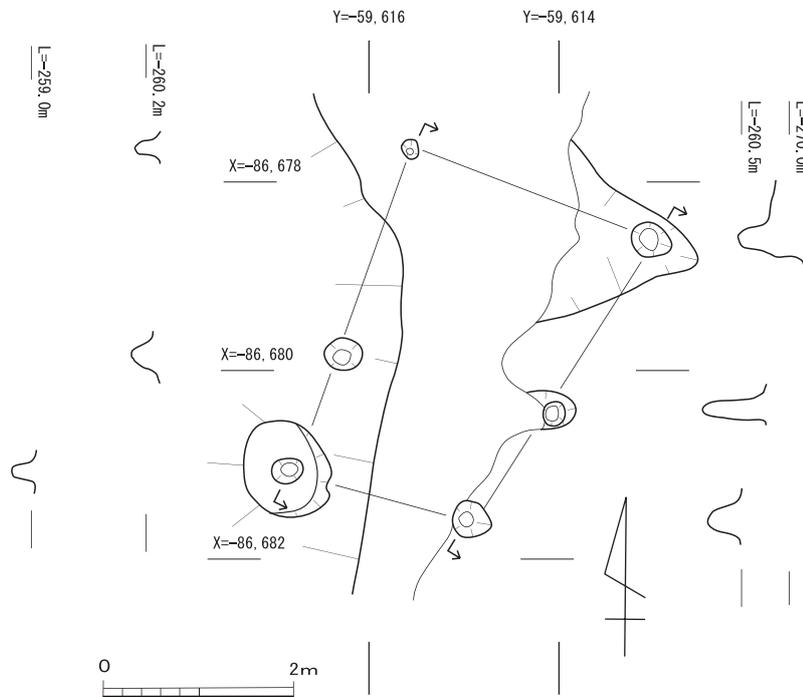
第42図 曲輪5崩落土堆積状況

傾斜面は厚さ20cm程度の土を版築状に土を積んでつくっている。落ち込みの東斜面は、曲輪4から続く岩盤を削った斜面があり、これが西の谷方向まで続いている。落ち込みの北の状況は排土のため不明な点もあるが、①整地によって意図的な斜面を作っていること、②谷部にむけて岩盤を削った斜面が続くこと、③曲輪5の東下方に平坦面が存在していることの上記3点から、この落ち込みは虎口と考えられ、東下方の平坦面へ続く道の存在が想定される。(加藤雅士)

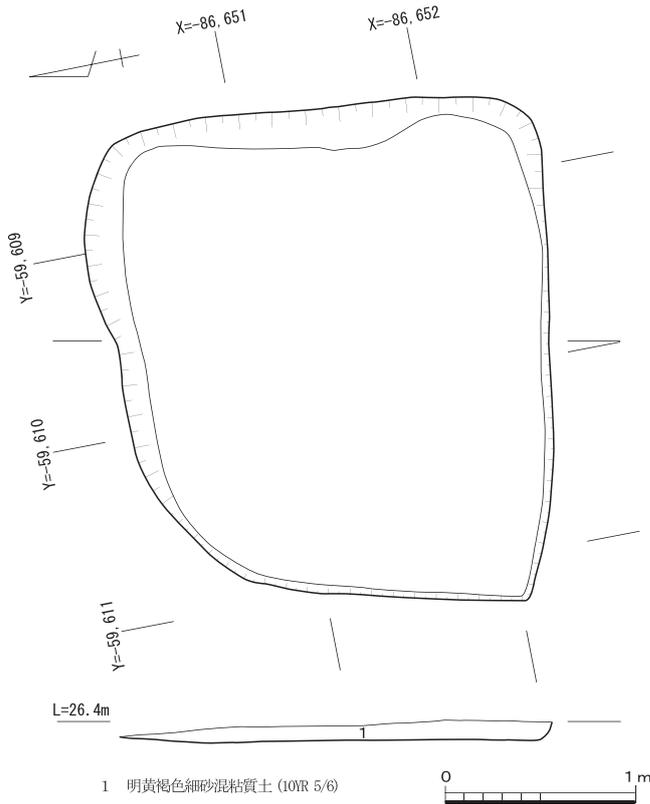
6) 曲輪6 (第45～49図)

曲輪の形状・規模 山城南西部の半円形に造り出された曲輪で、北西部は大量の土砂により斜面を埋め立て、約238㎡の広さの平坦面を形成している。曲輪の中間部に南東から北西方向に走る地滑りにより、約0.1～0.2mの段差が生じている。検出された遺構は、礎石列、柱穴群、楕円形土坑2基である。

土坑 S K 18 幅広楕円形で、長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は2層にわかれ、上から橙褐色粘質土、明褐色粘質土である。上層内から、厚みのある20cmほどの礫数点とともに石製の阿弥陀仏像



第43図 柱穴列 S X 23実測図



第44図 土坑SK19実測図

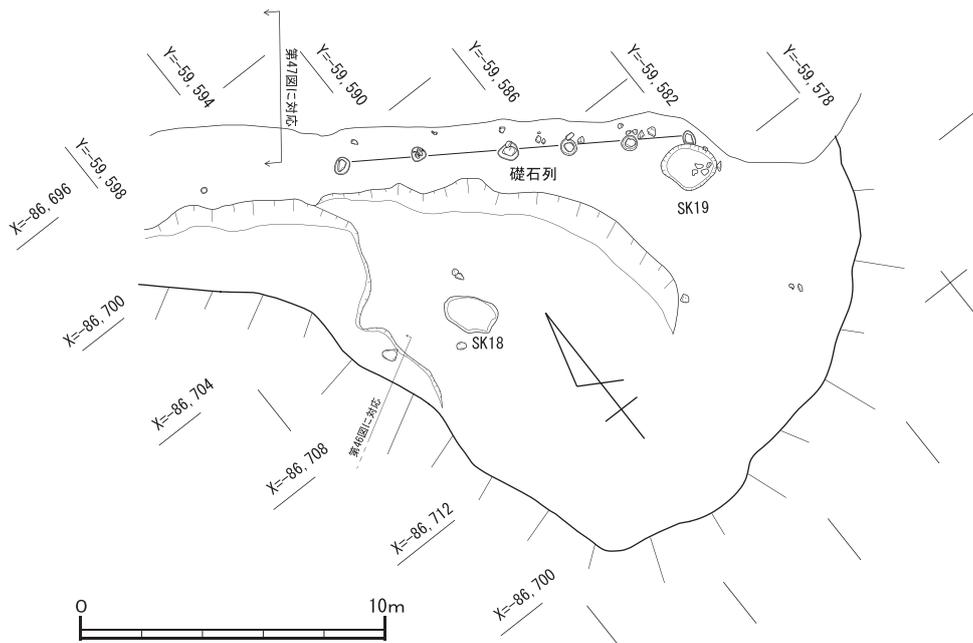
が表面を下にして出土した。石仏は礫とともに投棄されたものか、この場に供えられたものか、不明である。

土坑SK19 やや不整形な楕円形土坑である。直径1.5m×1.8m、深さ約0.15mを測る。出土遺物はなく、性格不明である。

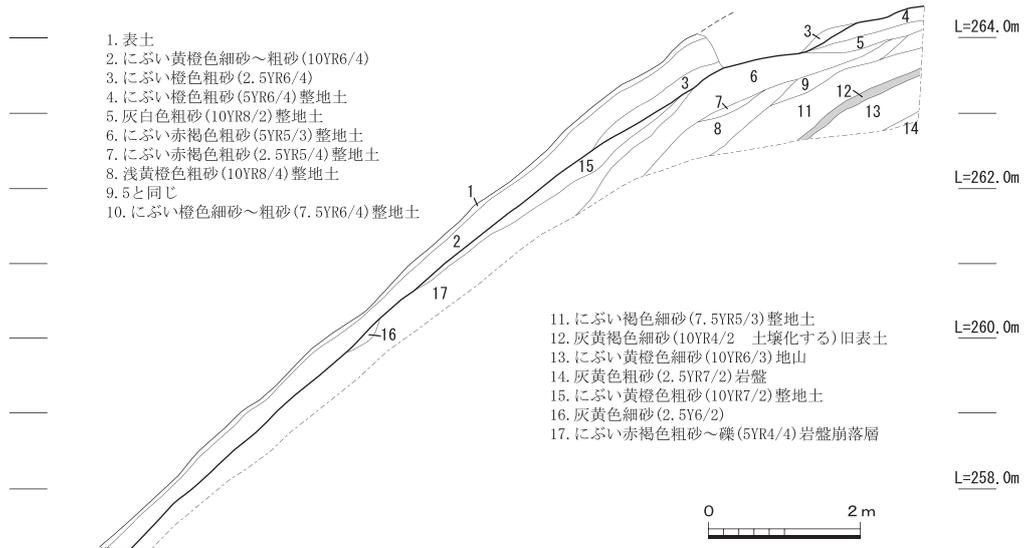
礎石列 切岸の裾部に沿って、長さ30～40cm、幅約25cm、厚さ15～20cmの扁平なチャート礫を用いた礎石5点が一直線に並ぶ。掘形の深さは10～15cmである。掘形間寸法は揃っていない。北から2.6m、3m、2m、2m、2.9mを測る。この礎石列の部分を残し、これらに並行するように、約0.1～0.2mの地すべりによる段差が発生している。そのためもあって、これらに対応して礎石建物を構成していた礎石は消失してしまったと推定される。縁辺部にも1か所、大型の扁平礫をもつピットを検出していることから、建物が存在していた可能性は高い。建物とすれば、梁間または桁行4間の規模でかなり大きなものとなる。

礎石建物を構成していた礎石は消失してしまったと推定される。縁辺部にも1か所、大型の扁平礫をもつピットを検出していることから、建物が存在していた可能性は高い。建物とすれば、梁間または桁行4間の規模でかなり大きなものとなる。

ピット 礎石列と同一レベルで、北西方向に広がった面で検出した。直径0.18m、深さ0.2mの



第45図 曲輪6平面図



第46図 曲輪6 西斜面断面図

ものと、直径0.25m、深さ0.1mのものである。ともに埋土は黄褐色砂質土である。このピットは、曲輪4へ続く道Eのピット列と関連するものと考えられる。

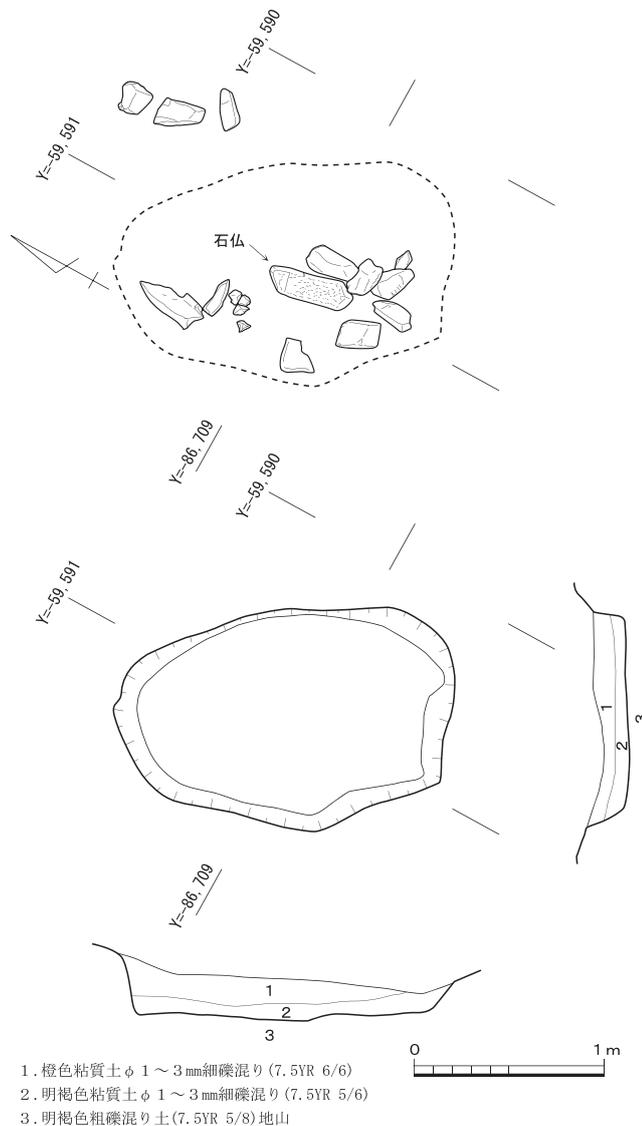
(黒坪一樹)

7)道(第50～55図)

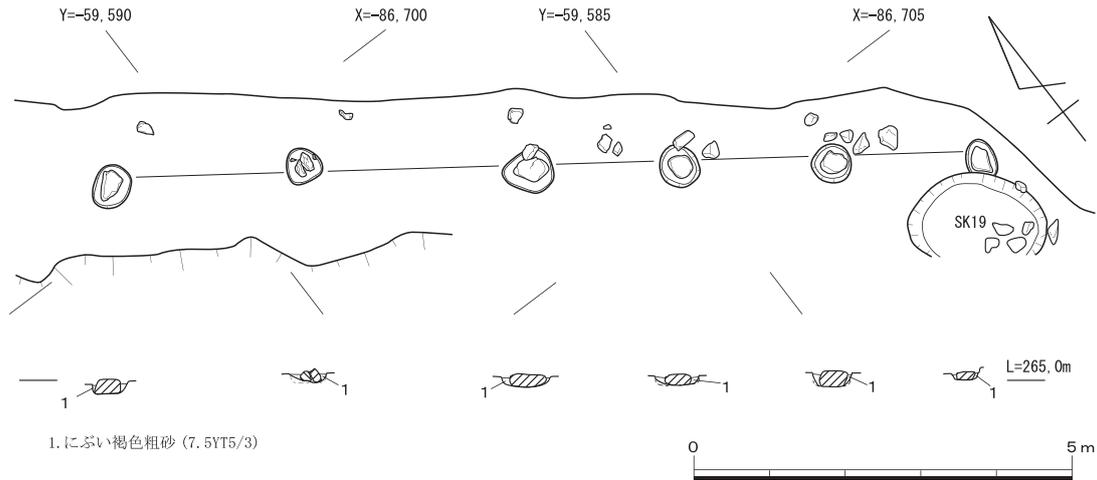
道D(曲輪3～4間) 曲輪3の南から北にのびた後、西に直角に折れて曲輪4の南にいたる道である。道両端の比高は約7mあり、曲輪3と屈曲部の比高は約3mである。屈曲部には石積S V11がつくられる。曲輪3から屈曲にかけての道幅は1.4～2.5mで、虎口部分からの排水溝が南斜面まで続いている。

屈曲部から曲輪4にかけての道幅は2.5～3m。傾斜度はいずれも12～13°である。道の平坦面は、山寄りの岩盤を削り、谷寄りには整地を行って作り出している。

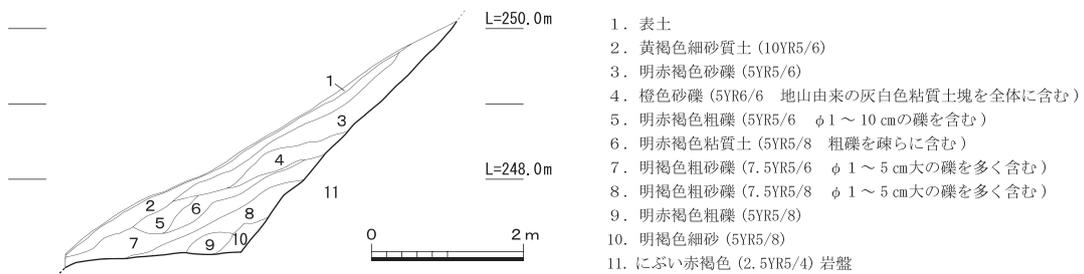
石積S V11 曲輪3～4間の屈曲部において、曲輪2からの斜面裾に築かれる石積である。確認した長さ3.2m、高さ0.3m。使用石材は、長さ80cmのものが1



第47図 土坑S K18実測図



第48図 礎石列実測図



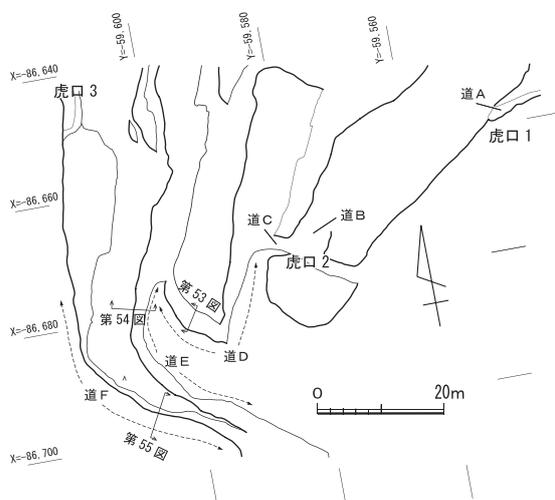
第49図 切岸の堆積状況図

点あるものの、長さ30cm・幅20cm・厚さ10cm程度の角柱状をした垂角礫が主として使われ、面をあわせて石を積んでいる。この石材の選択はS V10と類似している。構造は、曲輪2からの斜面裾をほぼ直角に削り、石を直接岩盤上に置いた後、背面に土を入れている。

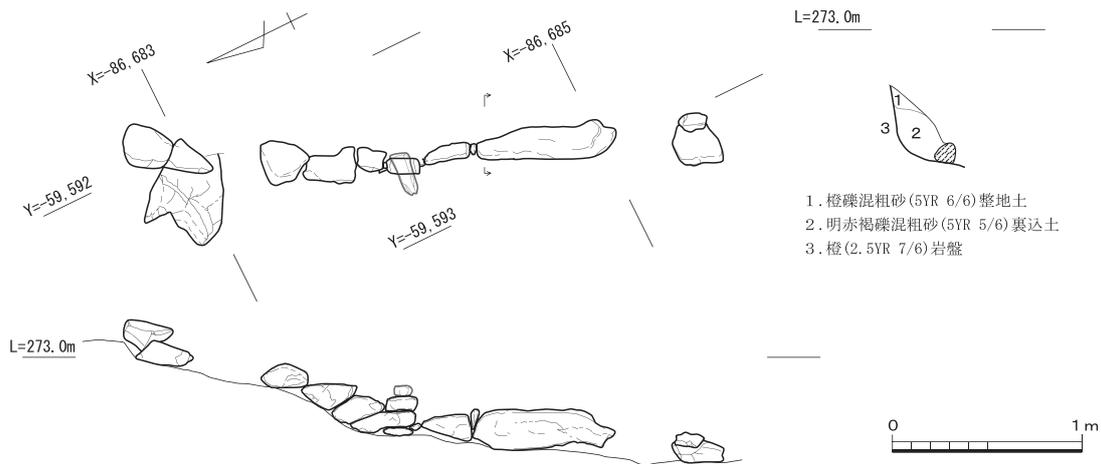
基底部の1・2段を確認したのみであるが、周囲に散乱していた石の状況や、曲輪2の斜面が上方にのびていることから、本来はさらに数段の石をかさねていたとみられる。また、S V11と

豎堀間の尾根状の部分には、人頭大の石が多く認められ、この尾根上に小規模な施設が存在した可能性がある。S V11はその斜面裾を保護する目的でつくられたと考えられる。

道E(曲輪4-6間) 曲輪4の南と曲輪6の北西部を緩やかなカーブでつなぐ道である。道の両端の比高は約4mで、傾斜度は道の北半部で15°程度、南半部では10°程度と緩やかになっている。道幅は2~2.5mで、やはり山寄りの岩盤を削り、谷寄りを整地している。しかし、道の平坦面は、虎口部の斜面や道Dの



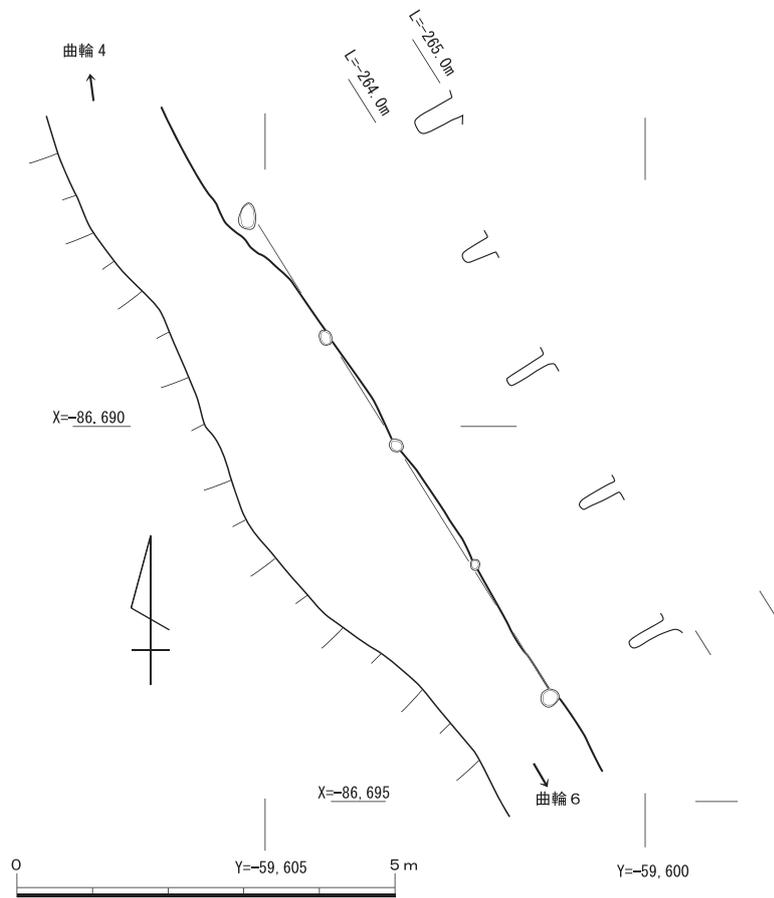
第50図 城内経路図



第51図 石積S V11実測図

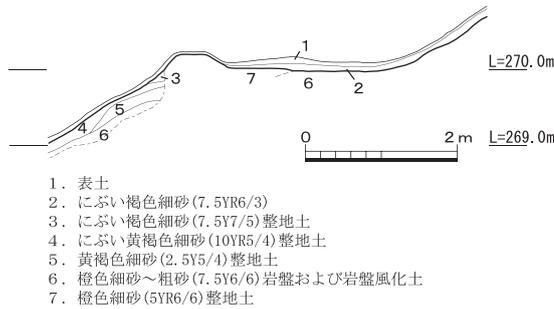
ように水平に近いものをして、
 しっかりつくるのではなく、
 谷側に向かって10°程度傾斜
 している。

柵列S A21 道の南半から曲輪6の北西隅において、
 斜面裾に10基のピットを確認している。このうち5基
 のピットはほぼ直線的に規則正しく並んでいて、柱穴
 列と考えられる。堀形は
 0.2mの円形で、深さは0.6m
 程度のものが多い。柱の通
 りはほぼ直線だが、間隔は
 1.7～2.0mとばらつきがあ
 る。道の谷側にはピットが
 認められないことから、山
 寄りの斜面上の施設や土留
 めのような性格が考えられ
 る。

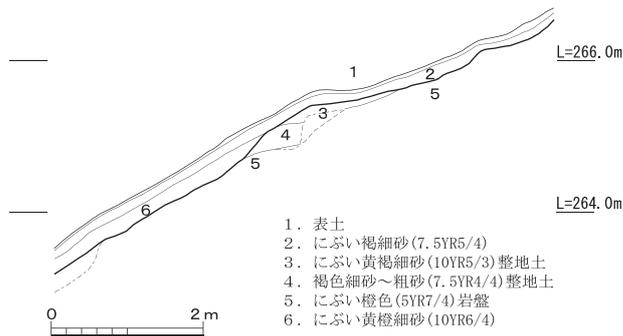


第52図 柵列S A21実測図

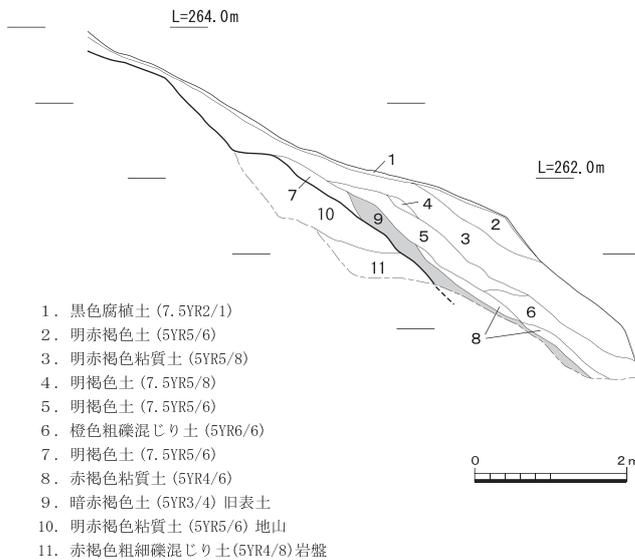
道F(曲輪5-6間) 曲輪5の南から緩やかに屈曲して、曲輪6の北西部へ通じる道である。
 道の両端の比高差は約4mであるが、屈曲部が最も低い位置にある。屈曲部との比高差は曲輪5
 の南とで1m、曲輪6の北西部とでは5mあり、それぞれ15°の傾斜度で上り下りする。道のうち、
 曲輪5から屈曲部までの部分は、山寄りの岩盤を削ってはいるが谷寄りの整地土はわずかである



第53図 道D断面図



第54図 道E断面図



第55図 道F断面図

か所である。

A地区(10㎡) 曲輪状の平坦面(約100㎡)の範囲に、工事用道路建設ライン内の10㎡を掘削した。表土である黒色腐植土より下位は黄褐色土が厚さ約30cmで堆積していた。黄褐色土の中には上位の岩盤がくずれた大小の礫も含まれているとわかった。そして、黄褐色土の堆積が水平になっていることで、本地区は、曲輪5の北西虎口に向かうための前哨となる小曲輪である可能性がでてきた。調査範囲外の部分を含めると、およそ100㎡の広さとなる。山城に関する遺物は出土していないが、このようなまとまった面積(約100㎡)の平坦面がこの地点に設けられている点は

ため、道の平坦面は幅1mであり、0.3m程度ある谷寄りの緩斜面をあわせても狭い。

屈曲部から曲輪6までの部分は、山寄りの岩盤を削っているのみで整地しない。道幅は1mである。この部分の断ち割りで、道の南西斜面には堆積土に覆われた厚さ20cmの旧表土層が存在することを確認した。この旧表土層は道面上にはないことから、城を築く以前の山地に堆積していた旧表土と考えられる。調査時に道としていた、調査区外の平坦面から曲輪6に続く道についても、断ち割りによって断面の確認を行った。道Fから続く斜面に、堆積土が積もっているのみで、岩盤の削り出し等は認められなかった。よって、この道は城の機能時には存在しなかったと考えられる。(加藤雅士)

8) A・B・C地区の調査(第10図)

本調査地区の位置は、山城跡の北西側、主要施設部からは離れた山塊の裾部にあたっている。標高は230から235m前後を測る。設定した調査区は、斜面地のなかに形成されたA地区およびB地区、そして大小の平坦面が階段状になっているC地区の3

重要である。三ノ宮東城跡のひとつの曲輪とみなしたい。

B地区(15㎡) ほとんど丘陵裾に近い斜面部にみられた幅2.5m、長さ20mほどの狭い平坦面である。幅2m、長さ8mの調査区を設けて掘削した。表土の黒褐色腐植土を除去すると、淡褐色土が約15cmの厚さでみられ、これより下位は岩盤面となった。30～40cm大の石の集積を2か所確認したが、表土の黒褐色腐植土中のもので、掘り込みなどはなかった。近現代の植林作業などにともなう礫の集積とみられる。

C-1地区(10㎡) 段差のある平坦部に設定した細長いトレンチである。畑地に利用されていた淡褐色土の堆積があり、地山面まで約20cm掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

C-2地区(12㎡) 表土である黒色腐植土直下の地山面(暗黄褐色砂礫)で、直径80cm、深さ20cmの円形土坑が1基検出された。15～30cmの大きさの礫が20個ほど混入していた。土器などの出土はみられず、近現代の畑地利用で礫を集積・投棄した土坑であろう。

C-3地区(10㎡) C-1地区から一段上の狭小な平坦部に設けたトレンチである。C-1地区と同様、畑地耕土の淡褐色土の堆積より下は地山面となり、遺構・遺物は確認できなかった。淡褐色土より石臼や近世陶磁器の破片が若干出土した。

C-4地区(143㎡) 黒色腐植土の下層は褐色粘質土面となり、この面を精査した結果、円形土坑1基と、直径15～25cmを測る小土坑数基を検出した。円形土坑、小土坑とも明赤褐色の焼土が周囲に見られ、被熱している。円形土坑は直径0.6m、深さ0.15mで、その上面から石臼および近世陶磁器などが出土した。検出面では、江戸時代の陶磁器類の破片が出土しているが、平安時代とみられる須恵器片や中世の中国製磁器の破片も若干みられる。

ここでの調査成果は、A地区が山城に関する部分である可能性が判明したこと、C地区から近世の土坑や陶磁器類の出土を確認したことである。(黒坪一樹)

5. 出土遺物(第56～60図)

三ノ宮東城跡の調査では、中世後半期の陶磁器や金属製品、石製品などが出土したが、多数を占めるのは中国製磁器である。中国製磁器では、青花磁器が多い。さらに、中国産の白磁や青磁が含まれる。国産のものとしては、丹波産の甕や播鉢が含まれる。ほかに、瀬戸美濃や信楽などの製品が含まれる。特に、信楽産の緒桶とみられる鉢が含まれるのが注目される。土器では、土師器皿や瓦質播鉢などが含まれる。金属製品では、銅製品と鉄製品がある。銅製品には、甲冑金具や刀装具、銭貨などが含まれる。鉄製品では、建築の飾金具や釘などのほか、用途不明なものもある。石製品では、硯や砥石、石仏がある。今回の調査では、以上のような遺物が、整理用コンテナ15箱出土した。なお、斜面から出土した遺物は、その上部の曲輪に属するものと見做した。また、中国製磁器の分類は、貿易陶磁研究会発行の『貿易陶磁研究』第2号(1982)に準じた。

1)陶磁器(第56～58図)

曲輪1 1～5は中国製白磁碗で、口縁部が外反する。2～5は小碗である。5は復元口径6.5cmを測る。30は中国製白磁皿で、口縁部が外反する。復元口径17cmを測る。白磁皿C群で、

15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。6・7は中国製青磁碗で、外面に線描きの蓮弁文を施す。16世紀前半頃の製品とみられる。7は復元口径12.8cmを測る。

8～27は中国製青花磁器碗である。口縁部が外反しない「蓮子碗」系の碗で、青花磁器碗C群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。9・10は体部に芭蕉葉文、口縁部に波濤文を描く。10は復元口径14.8cmを測る。12・13・25～27は略した細かい唐草文を描く。13は復元口径13.8cmを測る。14・15は唐草文を描く。14は復元口径11.7cmを測る。11・20～23は口縁部に呉須で線引きし体部に線描きの花文を施す。11は復元口径11.8cmを測る。17は底部が高台内に窪み、見込みに略した梅月文を描く。高台径5.8cmを測る。18・19は小碗である。18は復元口径5.9cmを測る。28・29は中国製青花磁器皿である。

31は瀬戸美濃産の天目碗の底部である。高台は浅い輪状で、径4.6cmを測る。32は信楽産の鉢で、小振りであるが緒桶とみられる。筒状の器形で、口縁端部が外反する。このような器形のもの、水指として使用されることがあり、「鬼桶」とも称される。この鉢も茶道具として使用された可能性がある。復元口径15.9cm、器高12.7cmを測る。65は丹波産の大形の甕である。口縁端部には沈線が巡り玉縁状になる。肩部にはヘラ描きがあるが、何が描かれているのかは不明である。復元口径59.4cm、復元胴部最大径84cm、復元底部径21cm、器高93cmを測る。

33は京都系の土師器皿である。平坦気味の底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる。復元口径12cm、器高1.9cmを測る。16世紀中葉頃のものともみられる。34～46は在地系の土師器皿である。口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。内面がハケ目調整されるものがある。34は口径11.8cm、器高2.3cmを測る。47は瓦質の小壺である。復元口径8.4cmを測る。

90は肥前磁器(伊万里)染付碗で、内外面にいわゆる「コンニャク印判」で梶葉文を施す。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか手」である。18世紀頃の製品である。口径10.1cm、器高5.2cmを測る。土塁の表土から出土した。廃城後に持ち込まれたものであろう。

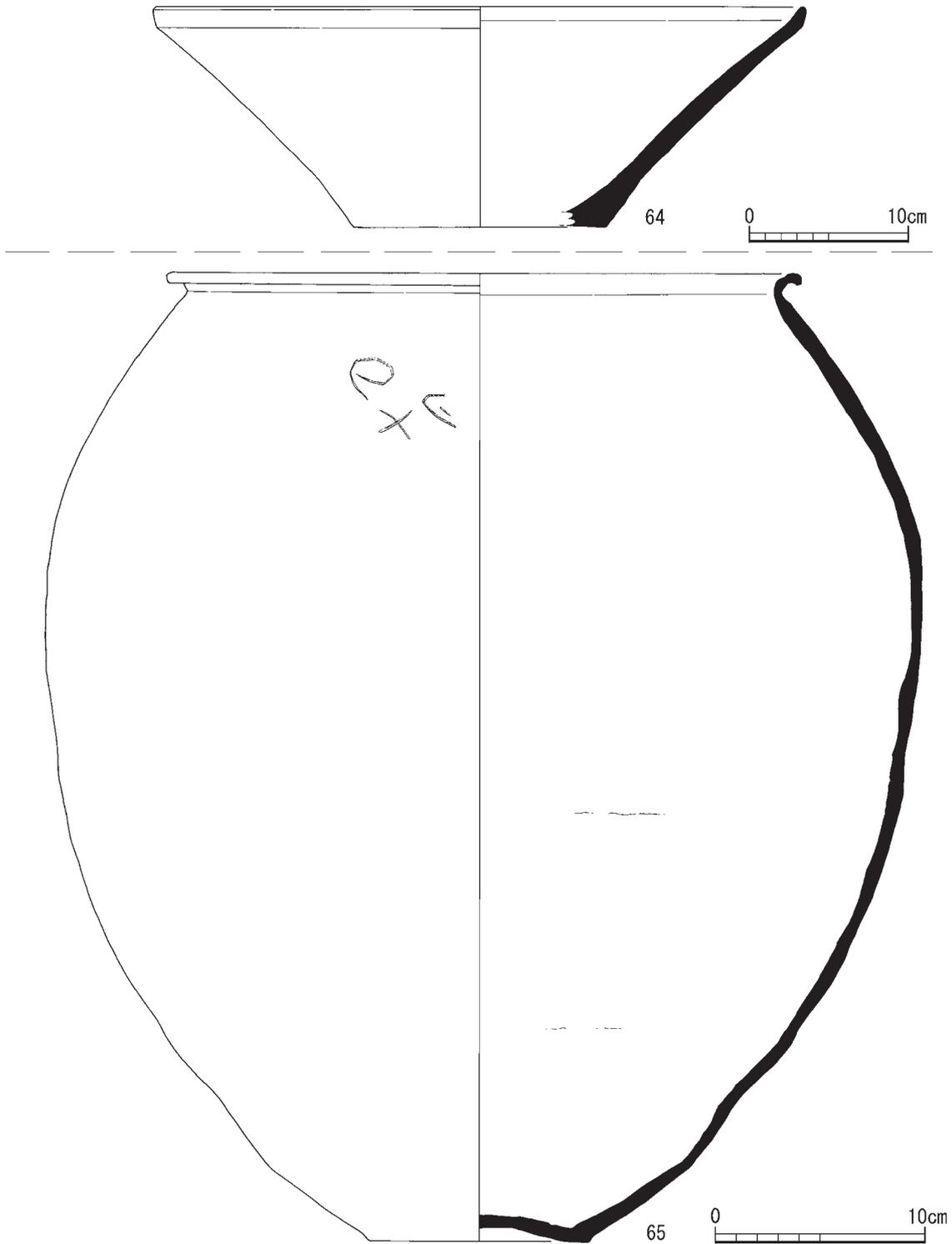
曲輪2 48は中国製白磁皿で、いわゆる「口禿げの白磁」である。13～14世紀前半頃の製品とみられる。復元底部径7.4cmを測る。49は中国製白磁皿で、白磁皿C群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。復元口径11.8cm、器高3cm、復元高台径6.3cmを測る。

50～53は中国製青花磁器皿である。口縁端部が外反する器形で、青花磁器皿B群である。外面に唐草文を描き、見込みに花文を描く。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。50は復元口径12.6cmを測る。54～60は中国製青花磁器碗である。青花磁器碗C群である。54・56は略した細かい唐草文を描く。55・57は口縁部に呉須で線引きし体部に線描きの花文を施す。55では内面口縁端部に四方襷文を描き、復元口径13.8cmを測る。58は唐草文を描く。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。

61は丹波産の播鉢である。播目は一本引である。16世紀頃の製品である。64は丹波産の鉢である。体部は外開きに立ち上がり、口縁端部を上方につまみあげて外面に面をもたせる。復元口径40.5cm、復元底部径15.8cm、器高14cmを測る。62・63は瓦質の播鉢である。櫛引の播目をもつ。63は口縁端部付近を横ナデしてやや窪ませており、復元口径29.8cmを測る。



第56図 出土遺物実測図1(土器・陶磁器)



第57図 出土遺物実測図2(陶器)

曲輪3 66は中国製青花磁器皿である。口縁部が外反する器形で、青花磁器皿B群である。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。67・68は中国製青花磁器碗の一部である。

69は丹波産の甕の口縁部である。65と類似しており、同一個体の可能性もある。70は瓦質播鉢である。口縁部付近を窪ませており、櫛引の播目をもつ。

曲輪4 71は中国製青磁碗で、外面に線描きの蓮弁文を施す。16世紀前半頃の製品とみられる。



第58図 出土遺物実測図3(土器・陶磁器)

復元口径12.8cmを測る。72・73は中国製青花磁器碗の一部である。

74・75は瀬戸美濃産の天目碗である。75は復元口径11.8cmを測る。76は丹波産の鉢で、64と類似する。注口部がわずかに残る。

曲輪5 77は中国製白磁小碗で、口縁部が外反する。復元口径は7.4cmを測る。78は中国製青花磁器碗の一部である。79は丹波産の甕の肩部である。80～82は土師器皿で、内面がハケ目調

整される。在地系のものである。80は口径10.9cm、器高2.9cmを測る。81は口径11.7cm、器高2.5cmを測る。83は瓦質播鉢である。櫛引の播目をもつ。

曲輪6 84は中国製白磁皿で、白磁皿C群である。15世紀末から16世紀前半頃の製品とみられる。復元口径11.8cmを測る。85・86は中国製青花磁器碗である。86は線描きで施文する。87は中国製青花磁器皿である。口縁部が外反する器形で、青花磁器皿B群である。15世紀後半から16世紀前半頃の製品とみられる。

道D 88は丹波産の甕である。口縁部が受口状になる。16世紀頃の製品とみられる。復元口径37cmを測る。89は土師器皿で、口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。在地系のものである。

C-4地区 91は肥前磁器染付碗である。高台が大きめで高く、体部は直線的に外開きする。いわゆる「広東碗」である。花唐草文を描く。18世紀末頃の製品とみられる。口径11.4cm、高台径5cm、器高6cmを測る。92～94は肥前磁器染付碗である。丸文、団花文、松文を描く。18世紀頃以降の製品とみられる。95は肥前磁器青磁染付碗蓋である。外面に青磁釉を施し、内面に染付を施す。18世紀後半以降の製品とみられる。

96は京焼陶器皿である。緑色釉で葉文を上絵付する。97は瀬戸産の陶器碗である。内面と外面口縁部には透明釉、外面体部以下には褐釉を施す。18世紀後半頃以降の製品とみられる。口径9.1cm、高台径4.4cm、器高5.4cmを測る。98は丹波産の甕もしくは鉢の口縁部とみられる。17世紀以降の製品とみられる。99は土師器皿で、口縁部と底部の境が明瞭でなく、丸く立ち上がる。在地系のものである。口径11.8cm、器高2.3cmを測る。

2)銅製品(第59図) 100は兜の鍬形台である。鍍金が残る。端部は2弧の「V」字状になり、猪ノ目を穿つ。兜本体に取り付けるための鋳穴がある。表面の周囲には杵を巡らし、菊花状の花文を線刻する。幅2.9cm、厚さ0.1cmを測る。曲輪1から出土した。101も鍬形台である。鋳穴が2か所残存する。表面の周囲には杵を巡らし、菊花状の花文を線刻する。地には魚々子を撒く。幅3.4cm、厚さ0.07cmを測る。曲輪1の土塁盛り土から出土した。102は鎧金具の鞋である。肩当と胴などの鎧の各部の連結に使用する。形状はレンズ状で、やや反りをもつ。紐通しの穴が2か所ある。長さ3.1cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。曲輪1から出土した。103は八双金物である。鎧の胴上端部などの装飾金具である。両端部は「V」字状になり、猪ノ目を穿つ。鍍金が残る。残存長5.3cm、幅1.9cm、厚さ0.13cmを測る。曲輪1出土である。

104は刀装具の筭である。刀の佩表に装着する。柄部に浮き彫りがあるが、形状は不明である。長さ19.1cm、最大幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。曲輪4から出土した。105は刀装具の小柄の柄部である。無文の簡素なものである。長さ9.2cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。曲輪1から出土した。106・107も小柄の柄部の残片である。曲輪1出土である。

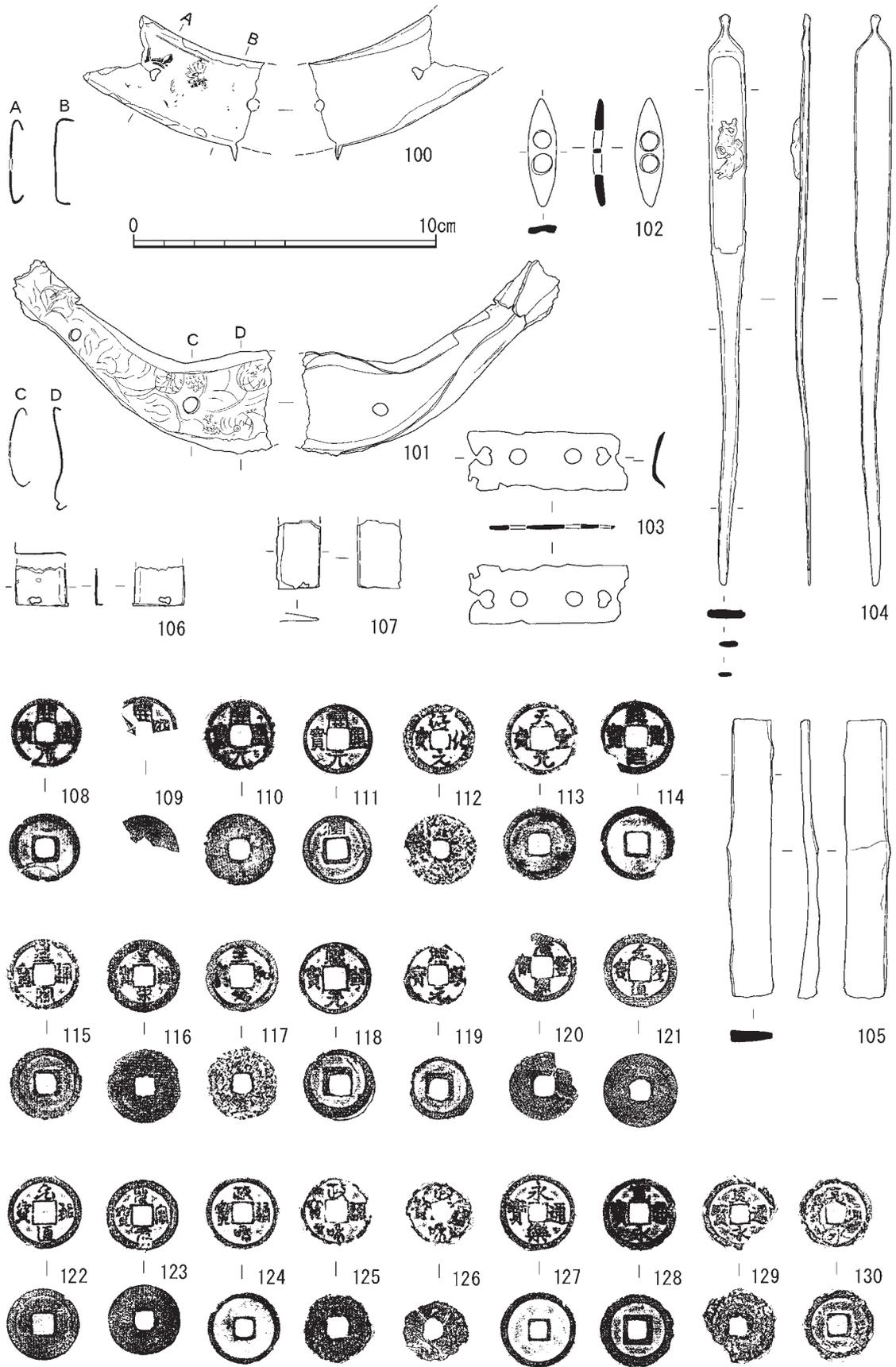
108～130は銭貨である。108～110は唐銭の開元通寶で、621年初鑄である。曲輪1から出土した。111も開元通寶であるが、これは紀地銭で、裏面に「潤」の字が鑄出されている。江蘇省鎮江で鑄造されたことを示しており、845年初鑄である。道Fから出土した。

112～126は北宋銭である。112は淳化元寶で、990年初鑄である。曲輪6から出土した。113・114は天聖元寶で、1023年初鑄である。113・114は曲輪1から出土した。115・116は皇宋通寶で、1038年初鑄である。曲輪1から出土した。117は至和元寶で、1054年初鑄である。曲輪6から出土した。118・119は熙寧元寶で、1068年初鑄である。118は曲輪1から、119は曲輪2から出土した。120・121は元豐通寶で、1078年初鑄である。曲輪2から出土した。122は元祐通寶で、1086年初鑄である。曲輪1から出土した。123は聖宋元寶で、1101年初鑄である。曲輪1から出土した。124～126は政和通寶で、1111年初鑄である。124は曲輪2から、125・126は曲輪6から出土した。127は明銭の永樂通寶で、1408年初鑄である。曲輪2から出土した。128～130は日本製の寛永通寶である。128・129はいわゆる「古寛永」で、寛永13(1636)年～万治2(1659)年に鑄造された。128は曲輪1から、129はC-4地区から出土した。130はいわゆる「新寛永」で、元禄10(1697)年以降に鑄造された。C-4地区から出土した。

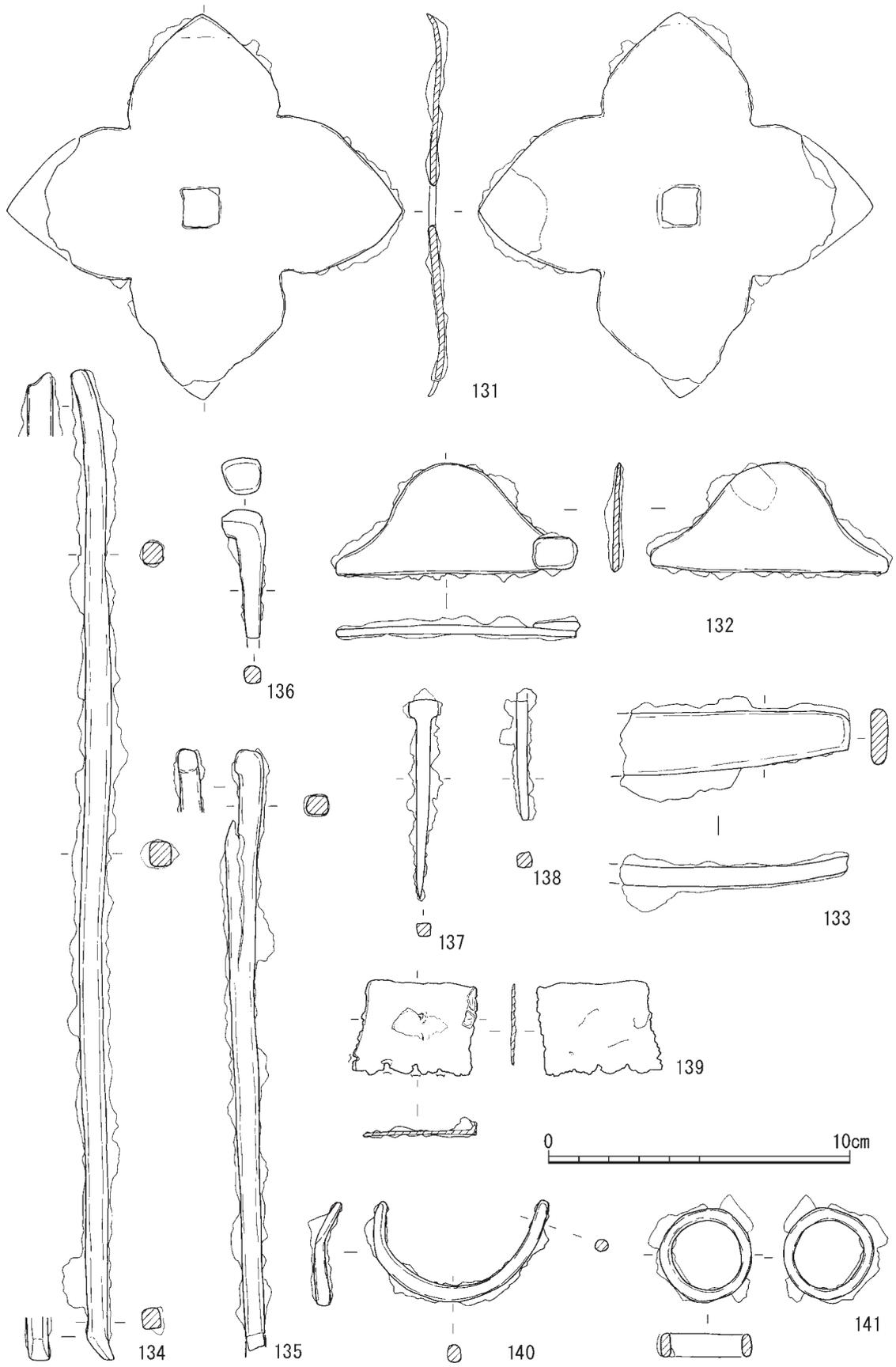
3)鉄製品(第60図) 131は十字形の花形金具である。扉の釘隠などの飾金具とみられる。中央に四角形の釘穴がある。残存している限りで12.2×11.7cm、厚さ0.25cmを測る。曲輪1から出土した。132は山形の平面形の金具である。用途不明である。建築の装飾金具ともみられる。幅7.8cm、高さ3.6cm、厚さ0.25cmを測る。曲輪4出土である。133は長台形状を呈し、やや反り気味であるが、刀の茎とも考えられる。残存長7.6cm、幅2cm、厚さ0.6cmを測る。曲輪4から出土した。134は棒状の金具で、両端がやや反り気味になる。長さ33.2cm、断面0.7cm角である。用途は不明である。曲輪3から出土した。135は棒状の金具で、端部がわずかに「L」字状になる。残存長15.1cmを測る。用途不明である。曲輪1から出土した。136も135と同様の形態である。残存長4.2cmを測る。137・138は角釘である。137は長さ6.7cmを測る。曲輪1から出土した。139は板状の金具で、端を折り返す。厚さ0.1cmを測る。曲輪1から出土した。140は半環状の金具である。曲輪1から出土した。141は環状の金具で、外径3.1cmを測る。締め金具か。曲輪1から出土した。

4)石製品(第61図) 142は小形の硯である。両面を使用したものとみられる。残存長8.9cm、幅4.9cm、縁の厚さ0.9cmを測る。曲輪2から出土した。143～148は砥石である。角柱状のものや平板状のもの、大きさも大小様々である。148は残存長20.7cm、幅8.8cm、厚さ6.6cmを測る。146は残存長3.4cm、幅2.6cm、厚さ2.6cmを測る。143・144は曲輪1、147・148は曲輪3、145は曲輪4出土である。

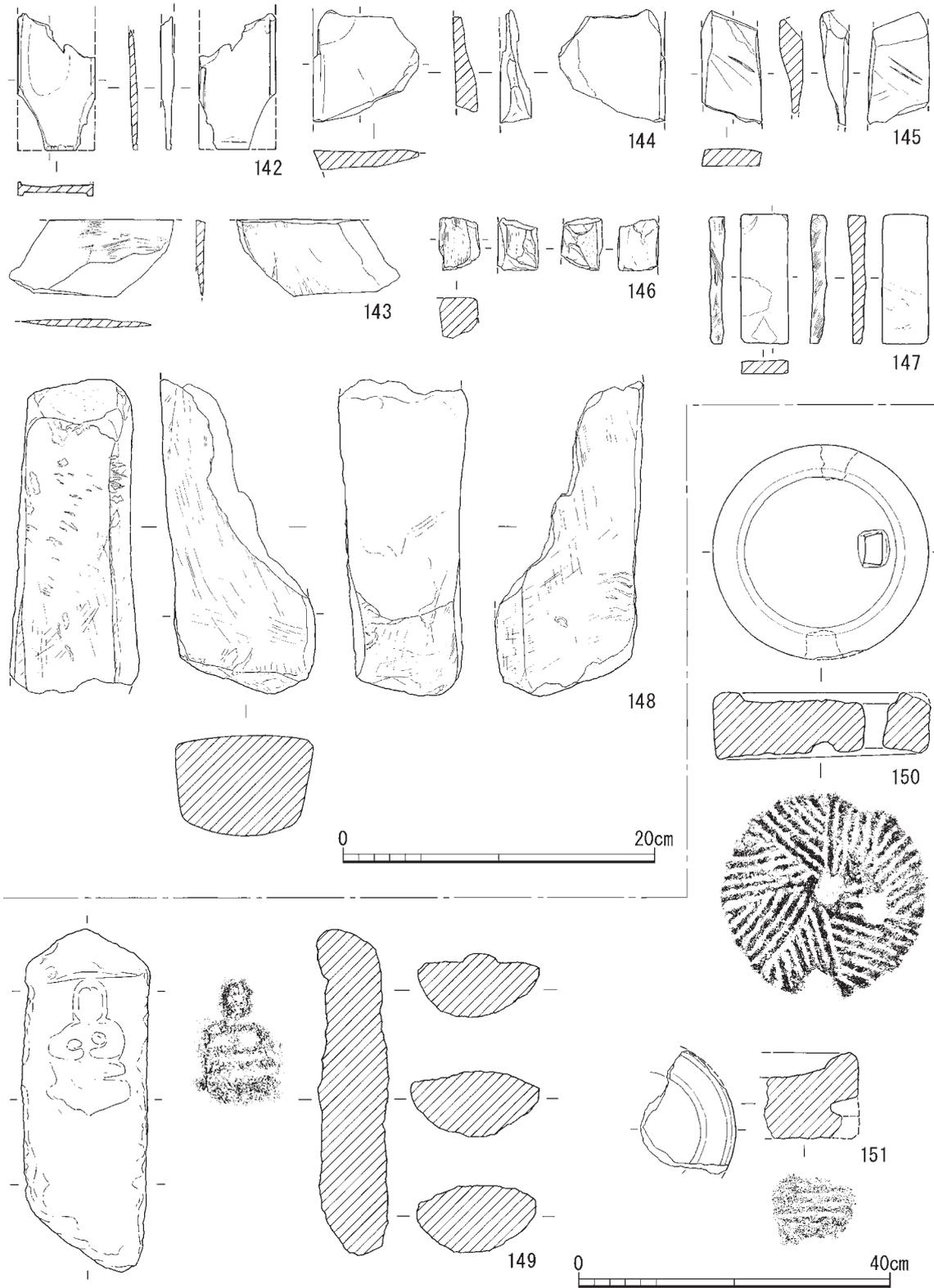
149は石仏である。尖頭板碑形で、上部に庇をつくり、その下に阿弥陀如来を浮き彫りする。花崗岩製で、背面は蒲鉾状の荒タタキ仕上げである。長さ44cm、幅16cm、厚さ8.8cmを測る。曲輪6から出土した。150・151は石臼である。凝灰岩製である。150は径28cm、厚さ8.8cmを測る。下面に綾杉状の播目をもつ。C-4地区出土である。(引原茂治)



第59図 出土遺物実測図4(銅製品)



第60図 出土遺物実測図5(鉄製品)



第61図 出土遺物実測図6(石製品)

6, まとめ

城の構造(第62図) 今回の調査では、城の構築構造を解明することを目的に、各所で断ち割りを行い断面観察をおこなった。まず、曲輪1の土塁と豎土塁で厚さ約10cmの旧表土を確認することができた。この旧表土は土塁を造る盛り土には含まれていることから、城構築後の機能時に旧表土が形成され、城の整備時に旧表土上にさらに盛り土されたことが分かる。またS V13の裏込土がこの旧表土を覆っており、S V13-S V16間の断ち割りでも旧表土を確認することができたので、S V13・16をとまなう虎口1の整備は、土塁の再整備時とほぼ同時であると考えられることができる。ここで確認した旧表土を、旧表土Aとしておこう。

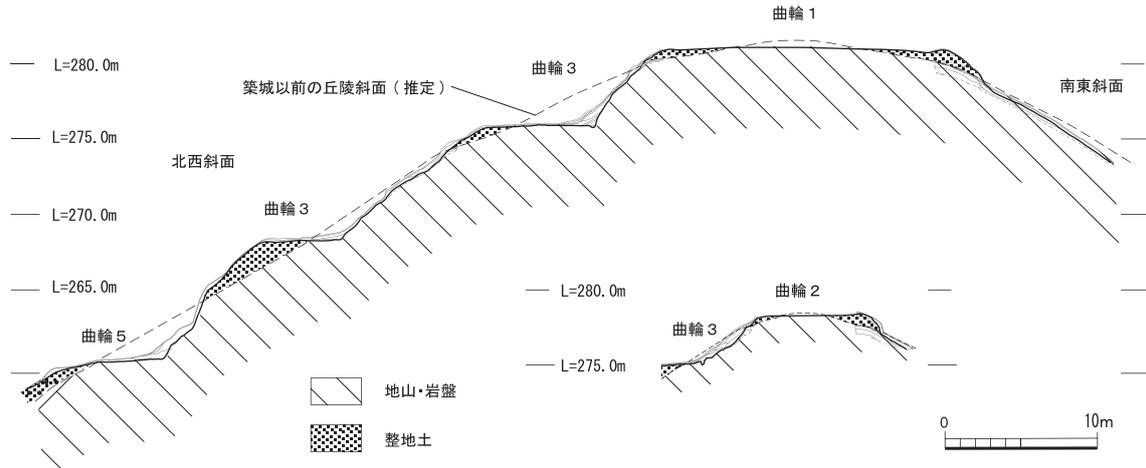
断ち割りでの断面観察は各曲輪の縁辺部においてもおこなった。深さ1～1.5mの断ち割りを入れた結果、岩盤・地山と、その上に積まれた整地土を確認することができた。曲輪1・2の中央や曲輪3～6の山寄りには地山を削って平坦面をつくり、縁辺部の谷側には整地土を入れることにより平坦面の拡張をおこなっている。曲輪1・2・6の谷側1/4～1/3程度、階段状の構成をとる曲輪3～5では谷側1/3～1/2が整地土による平坦面とみられる。曲輪1・2において、北西斜面と南東斜面に積まれた整地土の厚さを比較してみると、北西部では厚さが50cm程度であるのに対し、南東部では厚さ80～90cmであり、いずれも南東側の方が厚い。これは本来の地形の問題と、南東側の防御をはかるS V14やS V15を構築したことが原因と考えられる。

城の構築手順は、まず山地の尾根に対して頂部のカットと、その排土を利用しての平坦面の拡大をおこなって曲輪1をつくり、順次、下にむけて曲輪斜面の岩盤を削っての切岸の形成、および排土を利用しての平坦面の拡大・確保を行っていったと考えられる。

さて、縁辺部での断ち割り断面の多くでは、岩盤・地山と整地土の間に厚さ10cm程度の旧表土とみられる黒色土層が確認できた。これを旧表土Bとしておく。旧表土Aが城の機能時に形成されたものとみられるのに対して、旧表土Bは整地土と岩盤に挟まれているので、三ノ宮東城築城以前の旧表土であるという可能性もある。旧表土Bの特徴として、斜面部に対しての末端を整地土とそろえているという点がある。つまり平坦面を含め、斜面部には堆積していない。

仮に旧表土Bが城の機能時のもので、整地土が再整備時のものとする、斜面のカットをやり直したということになる。また整地土の量が膨大であることを考えると、建物を全て壊して更地にしてしまうような曲輪平坦面のカットが必要である。これらは、まったく成り立たないわけではないが可能性としては低い。よって、旧表土Bは城構築以前の、もとの尾根にともなうものと考えられる。この考えに立つと、旧表土Bの観察から、もとの尾根の復元が可能となり、およそ傾斜度30°程度の斜面をもった尾根であったとみられる。この傾斜を曲輪1の上で結び、頂部のなだらかさも考慮すると元の尾根のピークは281m程度と復元できる。この高さは土塁よりも2m程度低い。(加藤雅士)

検出遺構 城の中心となる曲輪1では、礎石建物跡S B1～3や石積土坑、堀跡とみられる石積などを検出した。礎石建物跡S B1は、4間×4間の建物で、柱の間隔は約2mを測り、全体として一辺約8mの正方形の建物になる。この城の中心的な建物とみられる。建物の北東辺中央



第62図 三ノ宮東城跡断面構造図

部には弧状の石列があり、カマドの基礎とも考えられる。南東辺の外側にも1間分の直線的な石列があり、目隠し塀のような施設があったことも想定される。礎石建物S B 2は、2間×3間の建物で、曲輪南端にあり、隅櫓的な建物と考えられる。建物の西側基礎部分に貼石状の石積がある。また、この建物の西が曲輪1への虎口となるが、その部分にも礎石とみられる石があり、あるいは門があった可能性も考えられる。礎石建物跡S B 3は、礎石の残存状態が悪く、規模や形状は不明である。曲輪北東側では、堀切側にのびる道を検出した。斜面側を石積で護岸し、途中に石段を設ける。堀切を通じて谷部から水を汲み上げるための道、あるいは、非常時の脱出用道とみられる。その南側に隣接して豎堀が1条ある。この道から礎石建物跡S B 2までの曲輪1南東辺に、断続的に延びる石列を検出した。塀などの基礎部分と考えられる。石積土坑は、地山の岩盤を掘り込み、その縁辺に石積を設ける。貯蔵穴とみられる。周辺に礎石状の石が散在しており、覆屋があったことも想定できる。

曲輪2では、2間×4間の礎石建物跡S B 5や石積土坑などを検出した。石積土坑は、曲輪1のものと同様である。また、この曲輪は周囲の斜面部に6条の豎堀が設けられている。豎堀の中には、底部が非常に狭くなった断面「V」字形を呈するものもある。なお、この曲輪では、曲輪1と同様に、南東辺に石列があり、塀などの基礎と考えられる。あまり広い曲輪ではないが、曲輪1同様に、城内でも重要な地点であったと考えられる。

曲輪3～5は山腹に造られた細長い曲輪である。曲輪の斜面裾部は地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。各曲輪に礎石状の石が残っており、礎石を伴う構築物があった可能性も考えられる。また各曲輪の斜面裾には、岩盤を掘り込んだ排水溝がある。曲輪3では、南端の道際に石積を築いて護岸している。曲輪4では、北端部を低い段状に成形している。曲輪5では、南側の斜面裾に、岩盤を掘り込んだ柱穴がある。対になる柱穴は検出できていないが、掘立柱建物があったとも考えられる。また、この曲輪には調査前に土塁状の盛り上がりが見られたが、調査の結果、曲輪4の縁辺中央部が崩落して堆積したものであることを確認した。崩落土の除去後に梯子形の浅い溝状遺構を検出したが、その性格は不明である。根太の痕跡とも考えられる。また、

この曲輪の北端部が、麓から城内への入り口になると考えられる。麓までの道については、調査地外となるため、不明である。曲輪3及び曲輪4の北側部分では、下部の曲輪の北端部に張り出すような小曲輪を設けている。下部の曲輪に侵入した敵に横矢を掛けるための施設とも考えられる。

曲輪6は、曲輪2から続く豎堀を設けた斜面の裾部が、地山の岩盤を削り出した急傾斜の切岸となる。礎石列が残っており、礎石建物があつた可能性がある。また、この曲輪は、西半部が後世の地滑り等によって陥没している。

各曲輪はジグザグ状の道でつながっている様子である。この道では斜面裾に地山の岩盤を掘り込んだ排水溝を持つ部分がある。曲輪3から曲輪4に到る道の屈曲部では、斜面裾に石積の一部が残存する。また、曲輪4から曲輪6方向への道には柵列状のピットが並ぶ。

以上のように、この城跡では、堀を設け、斜面部に豎堀を掘り、地山の岩盤を削り込んで急斜面の切岸を造り出すなど、様々に防御のための工夫がされていることを確認した。また、建物基礎や道の要所に石積を築き、岩盤を削り出して各曲輪を整形するなど、丁寧な城造りの様子がうかがえる。それとともに、城内に礎石建物があつたことを確認した。簡素な掘立柱建物がわずかにあるのみで、非常時だけに使用されたとみられる一般的な戦国時代の山城と較べると、恒久的な造作である。このような状況から、この城は、非常時だけに使用されたのではなく、ある程度日常的な生活が行われていた可能性も考えられる。平地からの比高も50m前後であり、あまり高いとはいえない。

出土遺物(付表1・第63図) 三ノ宮東城跡は、陶磁器や土器が多数出土している。出土点数の多い中国製青花磁器では青花磁器碗C群や青花磁器皿B群、白磁皿C群が目立つ。これらの中国製磁器は、15世紀後半から16世紀前半頃にかけて生産され輸入されたものとみられる。また、土師器皿から見ると、16世紀中葉頃のものがあり、その頃までは城として存続していたものと考えられる。以上のことから、この城跡は、16世紀前半を中心とする時期の城跡とみられる。

曲輪1では、出土点数が多い中国製青花磁器碗から見ると、斜面部からの出土も含めて50%が出土している。それに次ぐのが曲輪2・6である。尾根線上に位置する曲輪である。曲輪3・4・5では、出土数はわずかである。丘陵腹部に位置する曲輪である。曲輪1では、碗皿などの供膳具だけでなく、播鉢などの調理具や甕などの貯蔵具など、ほぼ万遍なく出土している。土師器皿の出土量も総数の80%以上を占める。また、甲冑金具や建物の飾金具と考えられる金属製品も出土している。出土遺物からみても、曲輪1が城中の主要地点であり、かなり日常的な色彩の濃い場所であることがわかる。また、茶道具の水指の可能性のある信楽産の鉢の出土も、非常時のみに機能した曲輪ではないことを示唆する。曲輪2・6も、出土遺物数では曲輪1にかなり劣るものの、中国製青花磁器や白磁の出土傾向などから、曲輪1と同様の性格が想定される。また、曲輪1・2・6からは、銭貨の出土も目立つ。曲輪2は、曲輪1に隣接しており、周囲を6条の豎堀で防御される重要な曲輪と考えられる。曲輪1の一部ともいえる。曲輪6は低い位置にあり、非常時や緊急時にいち早く対応できる曲輪である。少人数であっても、常駐する必要がある曲輪

付表1 出土陶磁器一覧表

	青花		白磁		青磁椀	土師器 皿	瓦質 播鉢	瓦質小 壺	瀬戸美濃		丹波甕	丹波 播鉢	丹波鉢	信楽鉢	計
	椀	皿	椀	皿					天目椀	灰釉皿					
曲輪1	12		6	1	1	47	1				10	2	2	1	83
(斜面)	27	3	7	1				1	1		9	4			53
曲輪2	9	3	2	2		1	3					1			21
(斜面)	1	1					2				1				5
曲輪3	2	1	1			1	1				1				7
(斜面)	2										1				3
曲輪4	2				2				2		8				14
(斜面)	1				1	2	1				1				6
曲輪5	4		1		1	5	1			1	2	1			16
(斜面)															
曲輪6	12	1	2		2				1		1				19
(斜面)	3														3
道	3					1					1				5
計	78	9	19	4	7	57	9	1	4	1	35	8	2	1	235

ともいえる。

一方、曲輪3・4・5では、中国製青花磁器や白磁の出土数は、曲輪2・6の半数以下である。曲輪6よりも日常色は薄い傾向にある。段状に設けられた細長い曲輪の形態や横矢掛とも考えられる小曲輪が見られることから、非常時に使用することを主目的とした曲輪と考えられる。日常は、無人状態とは言わないまでも、道等として機能した曲輪とも考えられる。

このほか、注目される遺物としては、曲輪6から石仏が1体出土している。中世後期頃のものとみられる。尖頭板碑形で阿弥陀如来を浮き彫りする。戦国時代以降の城では石仏や石塔を石材として使用することがあるが、この石仏が石材として持ち込まれたものかどうかは不明である。

概観 三ノ宮東城跡はあまり規模の大きい城跡とはいえないが、ほぼ全域にわたって、戦国時代の城の状況を知ることができた。これが、今回の調査の大きな成果といえる。

この城跡に隣接して三ノ宮西城跡がある。三ノ宮西城跡は、調査が行われておらず詳しいことは不明であるが、同時期の城と仮定すると、その近さから敵対する城とは考えられない。三ノ宮東城からは南側の谷筋を眺望できないが、三ノ宮西城からはできる。このように考えると、この2つの城は一組で機能していた可能性も考えられる。また、時期差があれば、移転したとも考えられる。その場合、三ノ宮東城から、山内氏の城という伝承が残り館跡と考えられる部分が付属する三ノ宮西城へ移転した可能性が高いと思われる。これにより、三ノ宮西城跡は長く地元の人々の記憶に残り、三ノ宮東城跡は忘れ去られたともいえよう。

京丹波町の瑞穂地域には今も山内姓を名乗る人が多く、土佐山内氏との係りは別として、三ノ宮西城跡が伝承のように山内氏関係の城跡である可能性は充分考えられる。隣接する三ノ宮東城跡も、並存でも移転であっても、山内氏関連の城跡と考えることもできる。(引原茂治)



第63図 出土遺物分布図

付表2 三ノ宮東城関連年表

西暦		おもな出来事	記事
813年	弘仁4年		酒治志(しゅじし)神社 正月21日付の宣旨(角川辞典)
平安末期			「抑知足院御領直米内山内莊廿石」京都大学所蔵兵範記仁平2年2月巻裏文書
1213年	建暦3年		常寿院領の一所として見える 慈鎮所領讓状案2月日付
1234年	天福2年		「丹波国 山内庄 所当三十石 在雜事」『華頂要略』(角川辞典)
1253年	建長5年		「丹波国山内庄〈信輔 京極殿領内〉」『近衛家所領目録』10月21日付(角川辞典・HP)
1333年	元弘3年	足利尊氏挙兵	山内氏馳せ参じる『太平記』(振興会)
1353年	文和2年		山名氏が「丹波山内辺」にいた『中國太相国曆記』(振興会)
1467年	応仁1年	応仁の乱~1477年	
1477年	文明9年		塩田村に山内莊の莊号がみえる『親元日記別録』。飯河中務丞忠資の知行。須知源三の押領を訴える(角川地名辞典)
1482年	文明14年		丹波守護細川政元が押領。「御料所船井郡山内庄上三ヶ村主御百姓等」が言上状を出す『蜷川家古文書』10巻(振興会)
1568年	永禄11年	信長上洛	
1578年	天正6年	光秀の丹波攻略	
1579年	天正7年	光秀の丹波攻略	
1582年	天正10年	本能寺の変	丹波船井郡の知行について光秀から指示をうける。「須知九大夫、山内一族中」宛の三宅弥平次(明智光春)書状『思文閣墨跡資料目録』60巻(振興会)
1583年	天正11年		豊臣秀吉が「丹州船井郡山内庄内式百五拾石」を上部大夫にあてがう『可睡斎文章』(振興会)
1600年	慶長5年	関ヶ原の戦	
16世紀後半			「山内衆」宛の明智光秀書状で大堰川の舟運に関わる指示『反町弘莊主宰古書逸品展示即売会目録』1976(振興会)
17世紀末			貝原益軒『西北紀行』(紀行は17世紀末。出版は益軒の死後の1713年)「山内村あり、是土佐守山内氏祖先の住めりし所なりと云う」(振興会)

※表は下記文献を基に作成した

三之宮城跡専門委員会編『三之宮城跡-三之宮城跡整備事業完成記念冊子-』三ノ宮地域振興会 2007
竹内理三編『角川日本地名大辞典 26 京都府 下巻』角川書店 1983

- 注1 伊野近富「2. 塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注2 田辺昭三『陶邑古窯址群』1 平安学園考古学クラブ 1966
- 注3 片山博道「二 園部窯跡群」(『園部町史通史編 図説 園部の歴史』園部町・園部町教育委員会) 2005
- 注4 古墳をはさんだ上下の尾根の地山面と、古墳のベース(地山)面とに段差はない。古墳築造以前、この地点は滑らかなラインで北西方向に下降していく幅広の尾根緩斜面であることがわかる(第3図)。
- 注5 潮崎誠・高島信之「第8章 西山6号墳の調査」(『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書1』兵庫県三田市教育委員会) 1983
- 注6 亀割均「Ⅲ 遺構と遺物 3.古墳時代の遺構・遺物」、「Ⅴ 調査のまとめ 3.一時坂古墳出土土器について」(『一時坂 一長野県諏訪市一時坂遺跡第一次発掘調査報告書一』諏訪市教育委員会) 1988

参考文献

- 園部町・園部町教育委員会『園部町史通史編 図説 園部の歴史』2005
京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第3版 第2分冊 2002
清水芳裕「第5章 京都府美月遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1983

2.園部城跡第8次発掘調査報告

1.はじめに

今回の発掘調査は、京都府立園部高等学校校舎新築工事に先立ち、京都府教育庁管理部の依頼を受けて実施した。

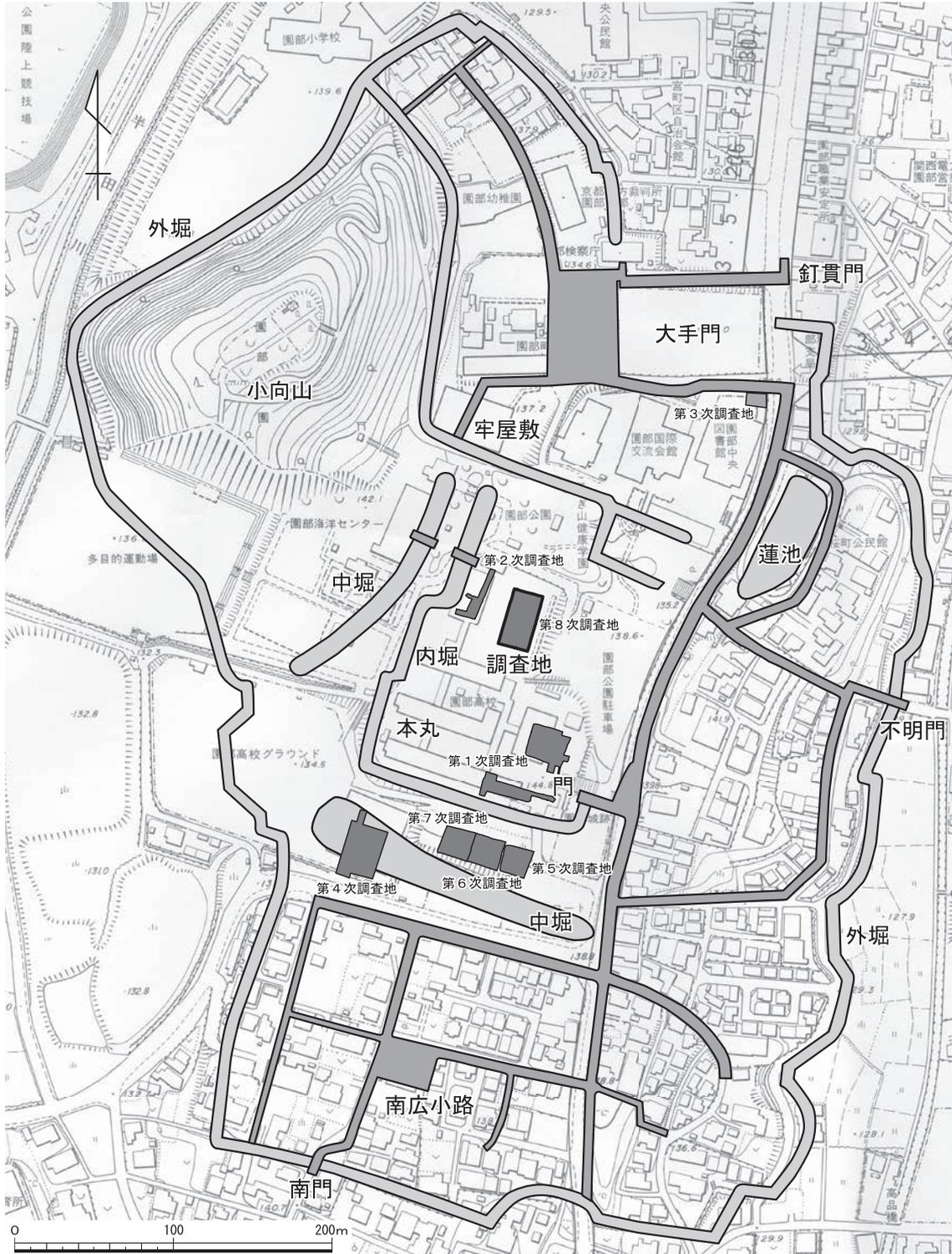
現在の園部高校一帯は、園部城跡として知られている。園部城は、小出吉親によって元和5～7(1619～1621)年に陣屋として築造され、幕末維新期には京都を守る目的で、慶応4(1868)年から明治2(1869)年に大規模な改築が行われ、園部城として整備された。現存する櫓門や巽櫓などはこの時に造られたと言われている。なお、明治4(1871)年には廃藩置県により城としての役割を終えた。園部城跡では過去7回の発掘調査が行われ、石組の溝、塀、井戸、空堀跡などが確認されている。また、埴輪をもつ方墳2基(小桜古墳群)も確認されている。

今回の調査地は、園部城本丸の北半部に相当する。

本報告は、当調査研究センター主任調査員戸原和人と同引原茂治が執筆した。文責については文末に記した。調査にあたっては、南丹市教育委員会、南丹市文化博物館、京都府立丹後郷土資料館、京都府立園部高等学校等関係機関の協力を得、また、地元の方々には作業員、調査補助員としてご協力を得た。記して感謝します。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 園部)



第2図 園部陣屋と発掘調査地
〔園部町全図(2)南丹市立文化博物館復原図より〕

なお、調査に係る経費については、京都府教育委員会が全額負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 戸原和人

調査場所 南丹市園部町小桜町 97

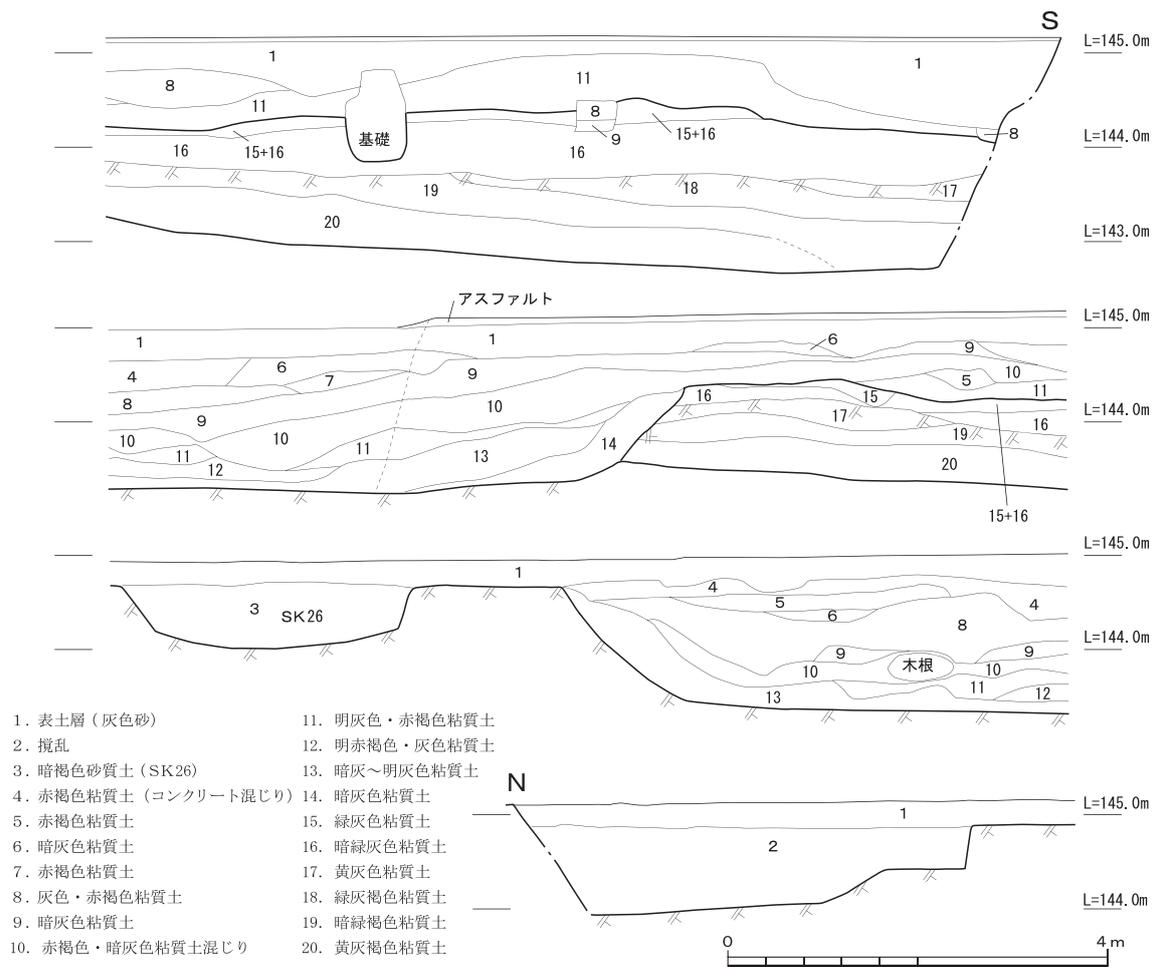
現地調査期間 平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年 3 月 3 日

調査面積 600㎡

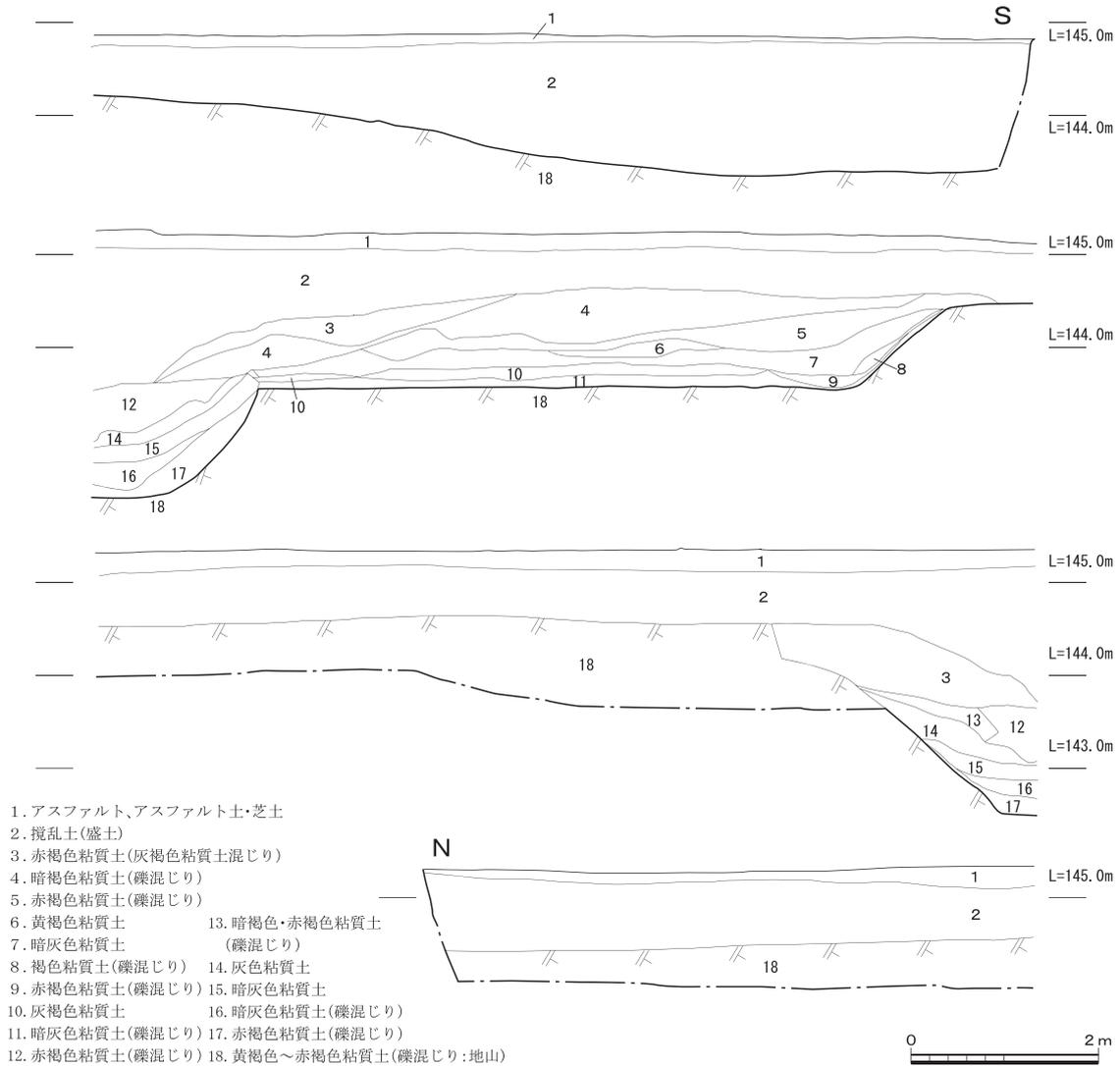
2. 層序 (第3・4図)

調査地の標高は概ね145mを測る。今回の調査地は旧体育館の跡地で、解体後はアスファルトと芝生に覆われていた。調査地の北辺部は、解体時の基礎除去作業によって大きく削平を受けていた。トレンチ西壁断面(第4図)でみると、重機により第2層までの盛り土層を取り除き、順次手掘りに切り替えて調査を実施した。北半部では地山上面で柱穴や土坑を検出した。中央部分では、第3層から第11層までの土によって埋め戻された空堀 S D05を検出し、さらに空堀の底面で第12層から第17層の土によって埋められた溝 S D100を検出した。

トレンチ東側断ち割り土層断面(第3図)でみると、空堀(第8～14層)以南では、遺構を検出したのは第15・16層上面で、地山(第17層以下)直上の第15・16層は園部城造営時の人工的な整地土と考える。地山直上では遺構を検出できなかった。空堀 S D05は、西側においては北側から埋



第3図 トレンチ東側断ち割り土層図



第4図 トレンチ西側断ち割り土層図

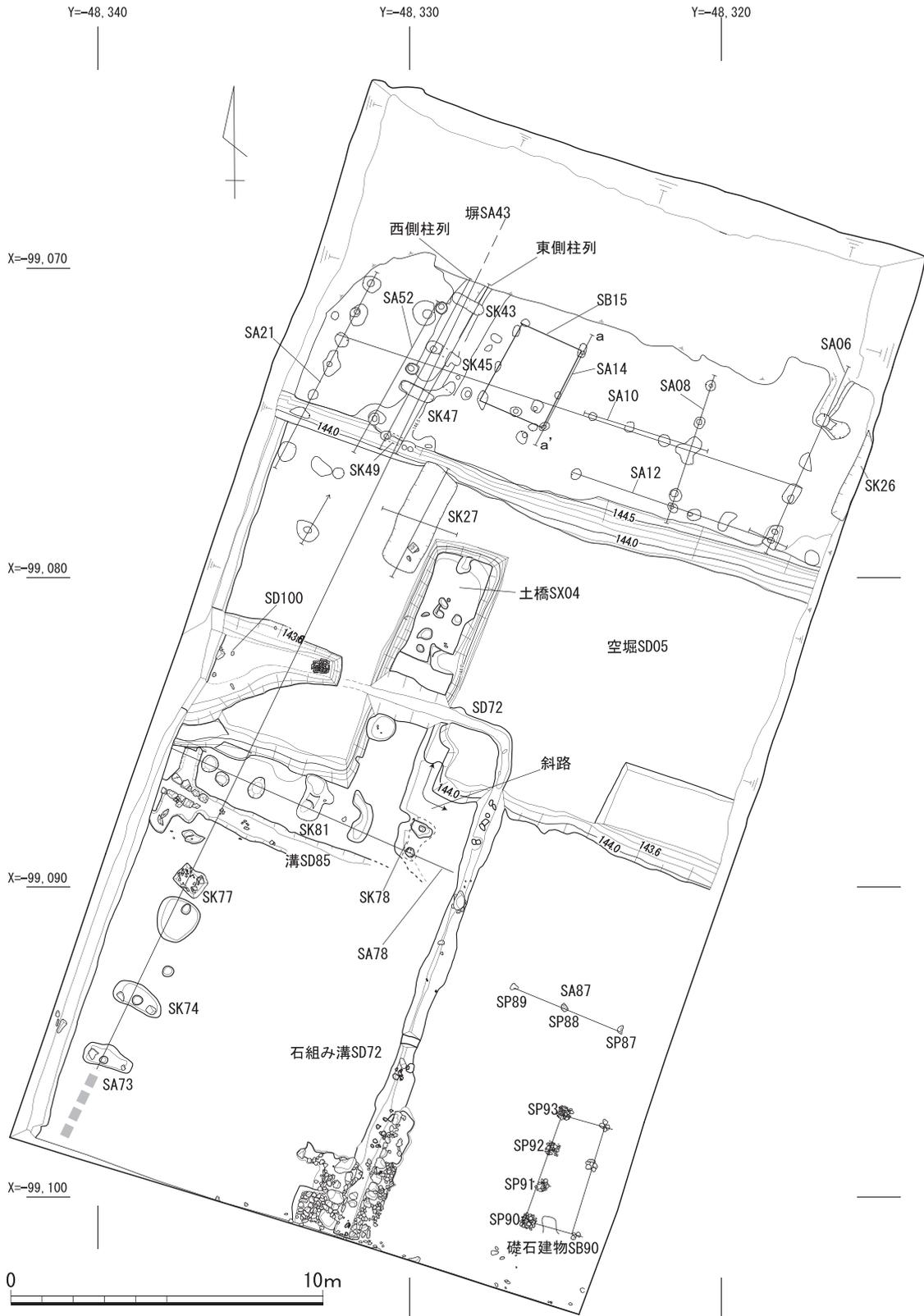
められており、東側では南と北の両方から埋められている。

3. 検出遺構(第5図)

調査は、校舎新築予定地内で土置き場を確保しながら実施したため、北半部と南半部の2回に分けて調査を行った。

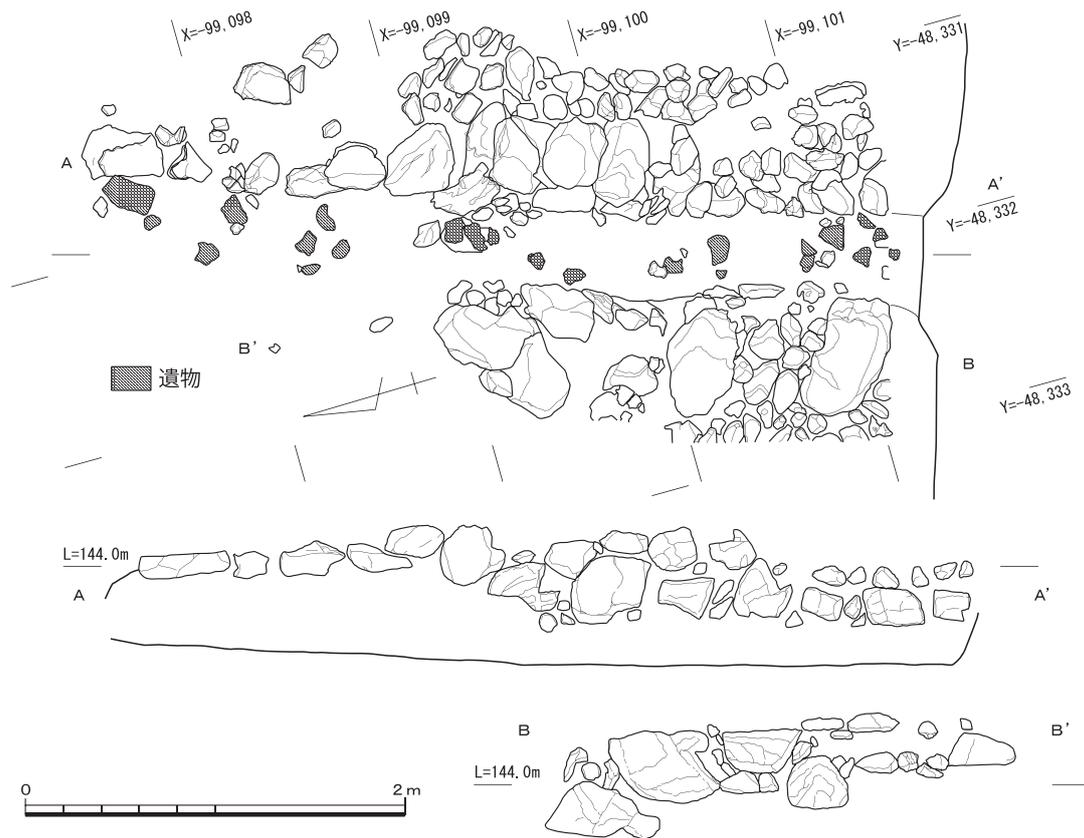
調査の結果、調査地の中央部で東西方向の空堀 S D 05 と土橋 S X 04 を検出した。空堀の北側では土坑、柵、塀、掘立柱建物跡、溝を確認し、空堀の南側では、石組溝 S D 72・85、柵、塀、根石をもつ建物跡 S B 90 や土坑などを確認した。

空堀 S D 05 調査地の中央部で東西方向の堀を検出した。幅 12 m、深さ 1.3～1.8 m を測る。断面は逆台形で、総延長 18 m 分を検出した。堀底は平坦に仕上げられているが、調査地内の南東隅は南北 1.9～2.3 × 東西 4.1 m 以上にわたって約 0.3 m の深さで二段に掘削されていた。堀の内部には溜水を示す土壌堆積は認められないことから、空堀であったと考えられる。この空堀によって、本丸は南北2つの曲輪に分けられていたと考えられる。埋め土の底面近くから幕末維新期頃の陶器などが出土したことより、この頃にこの空堀 S D 05 は埋められたと考えられる。



第5図 遺構配置図

土橋SX04 空堀の南辺から北辺に向けて地山を削り残して造られた幅2.8m、高さ0.95～1.2m、長さ7.8mの土橋である。土橋の南東側には、幅70cmの「L」字状の斜路が設けられており、堀底に降りる構造となっている。北側3mは切断されており、木橋が架けられていたと考えられ



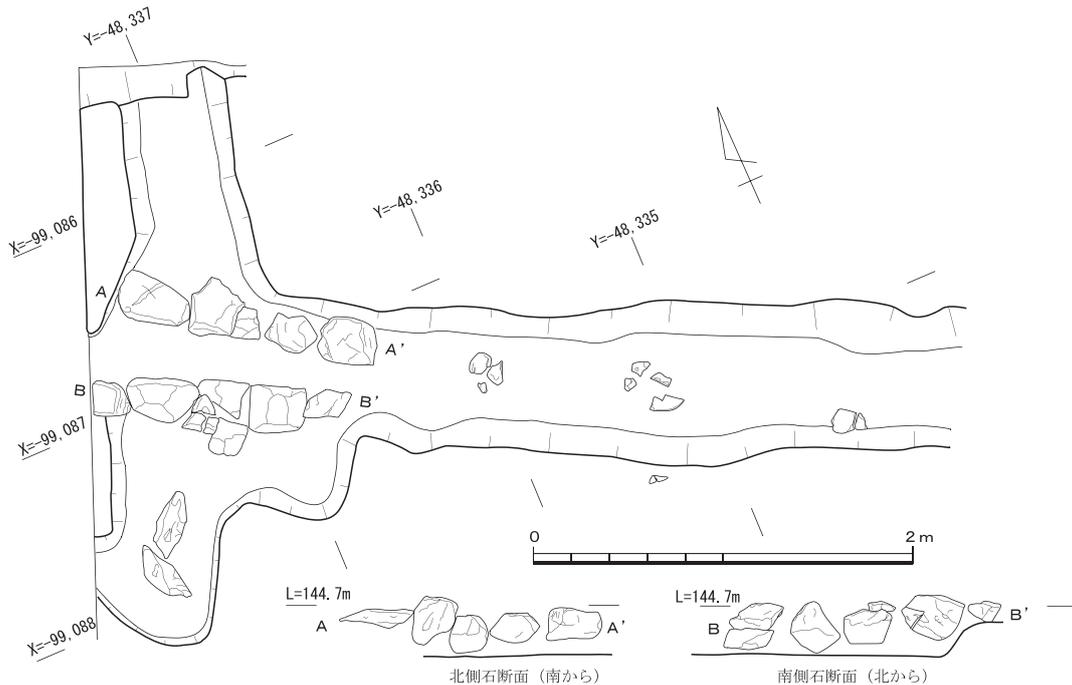
第6図 石組み溝 S D72実測図

る。土橋の主軸は座標北に対して $N7^{\circ}E$ を測り、空堀とほぼ同じ傾きを有している。

石組溝 S D72(第6図) 調査地の中央南半部で検出した南北方向の溝で、幅0.6m、検出面からの深さ0.45mを測り、掘形の断面は北半部で「U」字形、南半部の西側断面が「片葉研堀」の形を呈する。総延長15.4m分を確認した。調査地の南端部では、長さ5.6mにわたって2段分の石組みが残っていたが、この北側では石組みは認められなかった。石組みの遺存状況から、おそらく、素掘りの溝であったと考える。この溝は、空堀の手前3.5mの地点で $60 \times 35\text{cm}$ の石が溝中にあり、この地点で掘形が片葉研堀から「U」字形へと変わっており、しかも溝底は北側で約20cm上がっている。溝の北側は空堀の中に延びており、堀の底で溝底を確認した。北側では西に折れ、土橋を切断して下層溝 S D100まで溝底が達している。空堀埋土内では、上部の掘形は確認できなかった。南北溝の主軸は座標北に対して $N19.5^{\circ}E$ を測る。

溝 S D85(第7図) 調査地の中央部西側に位置し、空堀の南側で検出した。溝は空堀と方向をやや異にし、西側で緩やかに溝に近づいていく。幅0.6m、深さ0.3mを測り、総延長5.5m分を確認した。東端は攪乱のため検出できなかったが、東の延長部は、石組み溝 S D72が掘形を変える位置にあたる。西端には石組みが5石分残っており、この部分の掘形は北と南に溝状に掘削されていた。

土坑 S K77(第8図) 調査地の中央部西端で検出した。平面は長方形の土坑で長辺1.0m、短辺0.7mを測り、深さ0.1mを測る。土坑内からは瓦、土師器皿、陶磁器などが出土した。



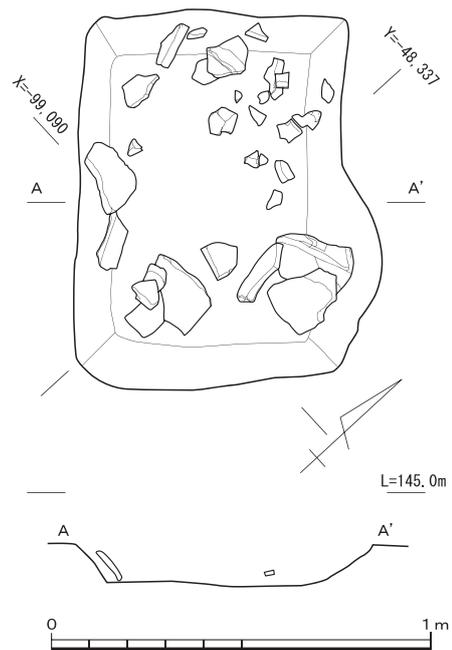
第7図 溝 S D85実測図

溝 S D100(第9図) S D05底面の西南側で検出した。この溝は調査地外に延びており、東端の幅1.1m、西は調査トレンチの西壁で幅3.7m、深さは東端で約1mを測り、西に向けて徐々に深くなり、空堀の底面から最大で深さ1.2mを測る。北辺は直線的であるが、南辺は湾曲しつつ広がっている。溝の東端では、東西55cm、南北45cmの範囲に川原石が敷かれ、その南・北と東の3辺に平瓦を立て並べた敷石状の遺構を検出した。三面の瓦の上には厚さ3cm程の有機質が高さ約1mにわたって認められたことから、何らかの施設がこの上に付属していたものと考えられる。瓦が立てられていた状況から、板箱状のものが瓦の真上に縦方向に立てられていたものと考えられる。溝の底から16世紀末～17世紀初頭の土師器皿などが出土している。

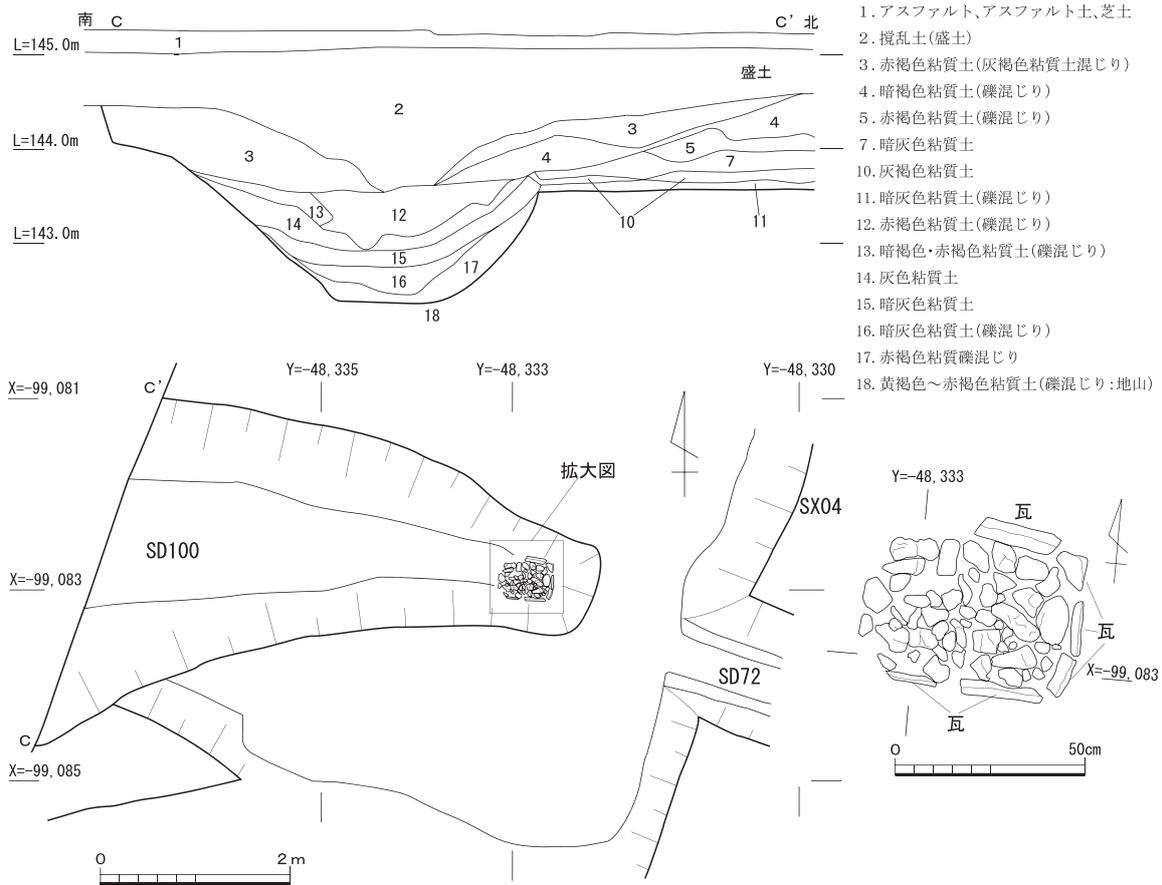
土坑 S K26 調査地の北側東端部で検出した南北3.0m以上、東西0.4m以上、深さ0.4mを測る土坑である。調査地の東に広がるため土坑全体の規模は不明である。土坑の西辺は S A06に並行する。

土坑 S K27(第11図) S D05の底面で検出した。土橋 S X04の西辺に接するように掘られた平面長方形の土坑である。南北3.4m、東西1.2m、深さ0.28mを測る。土坑内からは「そのべ」と刻印された平瓦が出土した。

掘立柱建物跡 S B15(第10図) 調査地の北半部、土橋の北側で検出した東西1間、南北2間の建物跡である。



第8図 土坑 S K77実測図

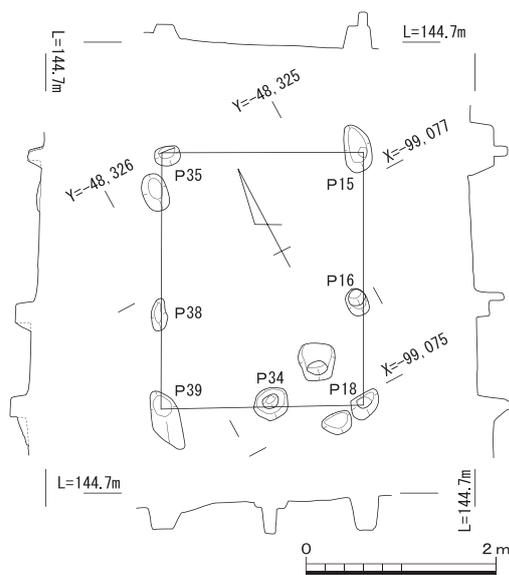


第9図 溝 S D100実測図

柱掘形は直径0.2～0.3mの不定形で、深さは0.2～0.4mを測る。東西の柱間は2.1m、南北は北で1.5～1.7m、南で1.1～1.2mを測る。建物跡の主軸は座標北に対してN28°Eを測る小規模な建物跡である。

礎石建物跡 S B 90 調査地南東部で検出した。南北に1.2m間隔で3間分、東西に1.5mの間

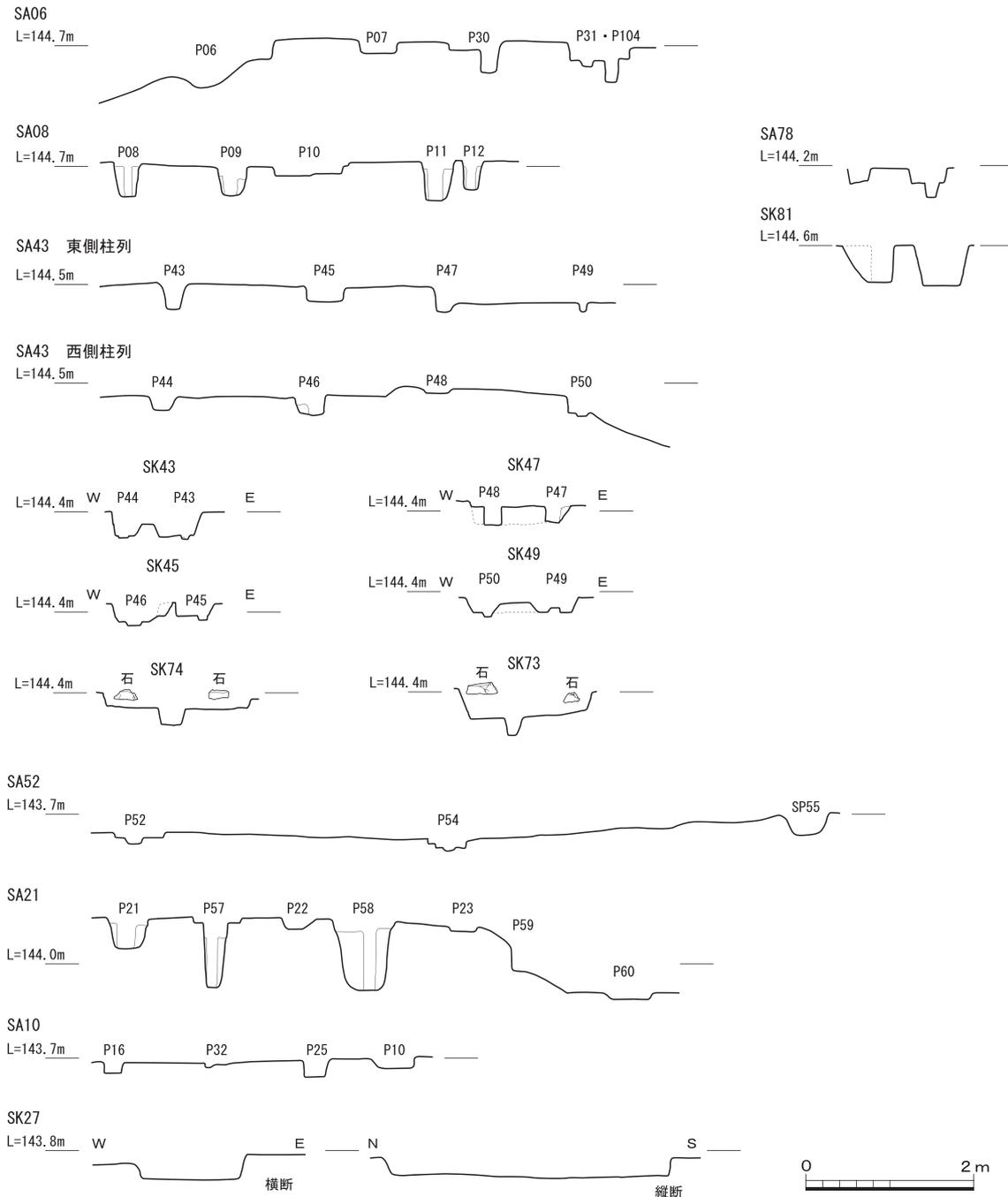
隔で2列を検出した。掘形は一辺40～50cmの方形で底面に拳大の川原石を敷き詰めている。根石の主軸は座標北に対してN18.5°Eを測る。



第10図 掘立柱建物跡 S B15実測図

柵列 S A 12 調査地の北側東半部で検出した。空堀に並行する東西方向の柱列で、3間分を検出した。柱掘形の直径は0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。東端のものは幅0.4m、長さ0.7～0.9mの楕円形の坑の両端に2本の柱を立てており、南側の柱で柱筋を揃えている。柱筋の主軸は空堀とほぼ平行している。

柵列 S A 06(第11図) 調査地の北側東端部で検出した南北方向のP06、P07、P30、P31、P104で構成される柱列で、3間分を検出した。南端部の柱は、南北0.8m、東西0.5mの楕円形の土坑内に2本柱を立



第11図 柵列・土坑断面図

てる構造である(P 31・104)。空堀北側の敷地を区画する柵の可能性はある。柱掘形は直径0.45～0.6m、深さは0.15～0.4mを測り、柱間は1.35～1.5mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN23.5° Eを測る。

柵列 S A 21(第11図) 調査地の北側西端部で検出した南北方向の P 21、P 57、P 58、P 59、P 60で構成される柱列で、空堀北側の敷地を区画する柵の可能性はある。柱掘形は直径0.5～0.7 m、深さは0.4～0.8m、柱間は1.35～1.5mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN27.5° Eを測る。

柵列 S A 08(第11図) 調査地の北側東寄りで検出した空堀に直交する柱列で、P 08、P 09、

P101、P11、P12で構成される。南端部の柱は、南北0.9m、東西0.4mの楕円形の土坑内にP11とP12の2本の柱を立てている。敷地内を区画する柵の可能性はある。柱掘形の直径及び深さも0.3mを測り、柱間は1.25mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN17°Eを測り、空堀とほぼ同じ振り角を有する。

堀S A43(第11図) 調査地の北半部西側で検出した南北の柱列である。空堀の北側では、1.6～1.7mの間隔で幅0.4～0.7m、長さ1.2～1.7mの楕円形の土坑を掘り、土坑の両端に2本の柱を立てている。空堀の埋土上面では検出していないが、空堀を挟む両平坦面で軸を揃えて検出したこと、堀の主軸が城の主軸に対して大きく傾くことから、空堀を埋めた後に造られたと考えられる。敷地を区画するための堀と考えられる。柱筋の主軸はS B15と同じく座標北に対してN28°Eを測る。空堀の南側で検出したS K73・74は中央部に1本の柱を立て両端に石を据える構造で、両側に支え柱をもつ上部構造が想定できる。

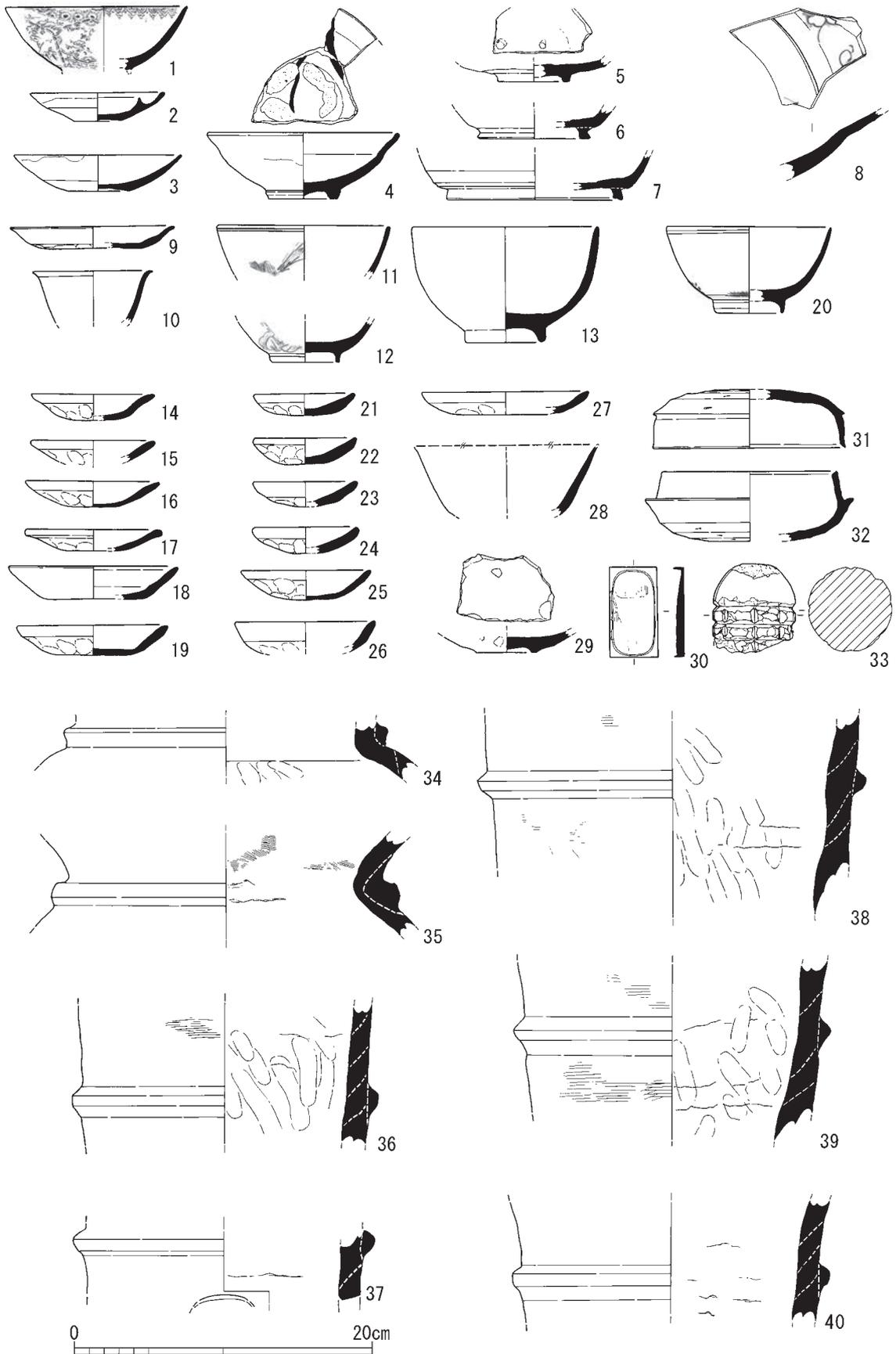
柵列S A78 調査地の中央部西半で検出した東西方向の柱列である。P78、P80、P105、P107で構成される。空堀の南辺に並行しており、南側の敷地を区画する柵の可能性はある。柱掘形は直径0.5m、深さは0.2～0.4mを測る。幅0.7m、長さ1.4mの楕円形の土坑の両端に2本の柱を立てている。東側は後世の攪乱によるためか、消失し不明である。柱間は1.8mを測り、2本柱のP105とP107の間は3.6mを測る。検出地点は土橋の南側の付け根部分にあたることから、門等の施設である可能性が考えられる。柱筋の主軸は座標北に対してN-24°-Wを測る。

柵列S A87 S B90の北側で検出した東西方向に並ぶ石列で、石は一辺が20cm程の大きさで平滑な面を上にして据えられていた。東から2.0m、1.7mの間隔を測る。石列の主軸は座標北に対してN22°Eを測る。
(戸原和人)

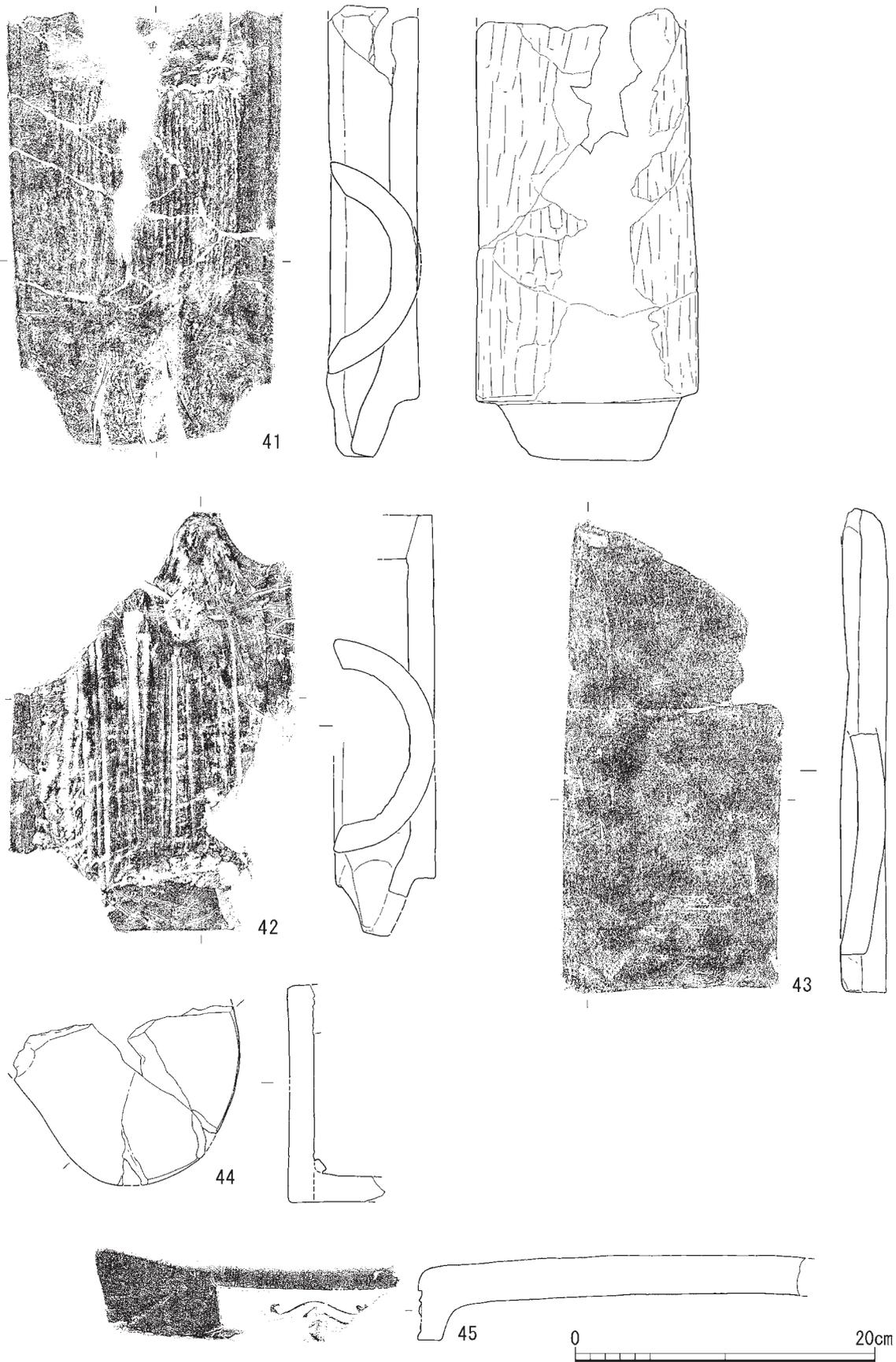
4.出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ18箱分である。空堀S D05内から出土したものが最も多く、石組み溝S D82がこれに続く。瓦類が最も多く次に埴輪、陶磁器類、土師器、鉄器、石製品がある。以下に主な出土遺物について報告する。

空堀S D05(第12図1～7・34～40・第13図41～44) 明治期の磁器椀、陶器、瓦類、奈良時代の須恵器杯、古墳時代の埴輪などが出土している。1は磁器の椀で復元口径12cm、残存高4.4cmを測る。型紙刷りの印判手で明治期のものである。2・3は陶器の灯明皿である。2は口径8.8cm、器高1.9cmを測る。19世紀の所産である。3は口径11.0cm、器高2.5cmを測る。18世紀末～19世紀の所産である。4は肥前陶器(唐津)皿である。いわゆる「絵唐津」砂目の目跡が残る製品で、口縁部がS D100の肩部、底部がS D05から出土し、接合したものである。口径12.5cm、器高4.5cmを測る。17世紀初頭頃の所産である。5は底径4.6cm、残存高1.55cmを測り、内底面に胎土目をもつ。17世紀初頭頃の所産である。6・7は須恵器杯の底部である。周辺に律令期の遺構が存在することを示す資料である。34～40は堀の底から出土した埴輪片で、朝顔形埴輪の頸部(34・35)、円筒埴輪(36～40)がある。いずれの製品も摩耗が著しく詳細はわからな



第12図 出土遺物実測図(1)



第13図 出土遺物実測図(2)

いが、朝顔形埴輪の頸部内面のハケ目、円筒埴輪の外面横ハケが観察できる。周辺に造営されていた古墳が城の造営に伴い破壊され混入したと考えられる。

41・42は丸瓦である。接合部段仕様で、外面を縦方向のヘラで仕上げ、内面に布目を残す。

41は残存長30.5cm、幅14.8cm、高さ5.7cmを測る。43は平瓦である。44は鬼瓦右下部分の破片である。

土橋S X04(第15図56) S D72が延長して掘削され、S X04が切断されたと考えられる部分から出土した。56は瓦当の幅42.3cm、厚さ4.0cmを測る大型品で、残存長20.3cmを測る。中央に三葉の唐草文がある。

土坑S K27(第12図8、第15図57) 8は肥前磁器(伊万里)皿で、「初期伊万里」とよばれるものである。破片のため口径、器高とも不明である。17世紀前半の所産である。57は道具瓦で、小口部分にひらがなで「そのべ」と刻印が施されている。幅26.35cm、長さ33.85cm、厚さ2.7cmを測り、凸面を上にして、中央部に上面幅5.0cm、下面幅2.0cm、上面長11.3cm、下面長9.2cm、の逆台形の穴を穿っている。

石組溝S D72(第12図9～13・30、第14図46～51) 土師器皿、中国製磁器、肥前陶磁器、軒丸瓦・丸瓦、石製硯などが出土している。9は土師器皿で、口径10.8cm、器高1.5cmを測る。17世紀中葉から後葉にかけての所産である。10は中国製の磁器で、復元径7.8cm、残存高3.6cmを測る。17世紀前半の所産である。11・12は肥前磁器椀である。17世紀後半から18世紀にかけての所産である。13は肥前陶器椀である。口径12.3cm、器高7.9cmを測る。17世紀後半の所産である。30は小型の硯で、幅3.2cm、長さ6.15cm、厚さ0.8cmを測る。軒丸瓦はいずれも左三ツ巴文で連珠文をもつ。三ツ巴文が細く、連珠文が小振りの46～48と、三ツ巴文が太く、連珠文が大振りの49・50に分類される。48は連珠文が大小交互に表現されている。丸瓦(51)は玉縁部分で目釘穴をもつ。外面はヘラ削りで、内面には布目を残す。

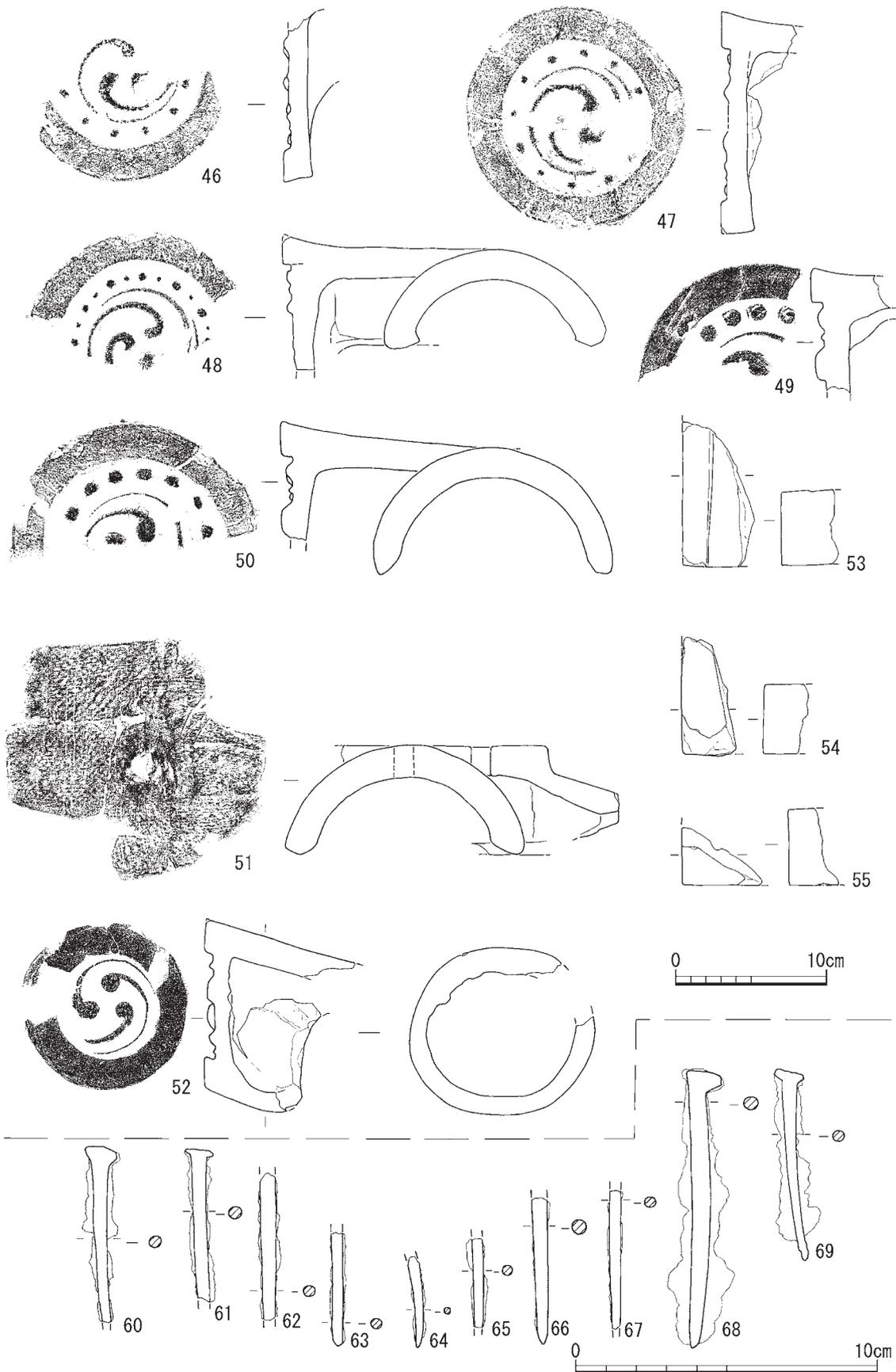
土坑S K77(第12図14～18・20、第13図45) 土師器皿(14～18)、軒平瓦(45)などが出土した。14は口径8.0cm、器高1.8cm、15は口径8.1cm、器高1.45cm、16は口径8.8cm・器高1.75cm、17は口径8.9cm、器高1.45cm、18は口径11.2cm、器高2.25cmをそれぞれ測る。20は肥前磁器椀である。口径10.9cm、器高5.85cmを測る。17世紀後半の所産である。45は唐草文軒平瓦で、文様の詳細は不明である。

塀S A43(第14図60～69) 塀の柱掘形を構成する南端部のS K73から8点(60～67)、S K74から2点(68・69)の鉄釘が出土した。いずれの釘にも木質が付着しており、塀に使用された柱材の結合に用いられたと考えられる。

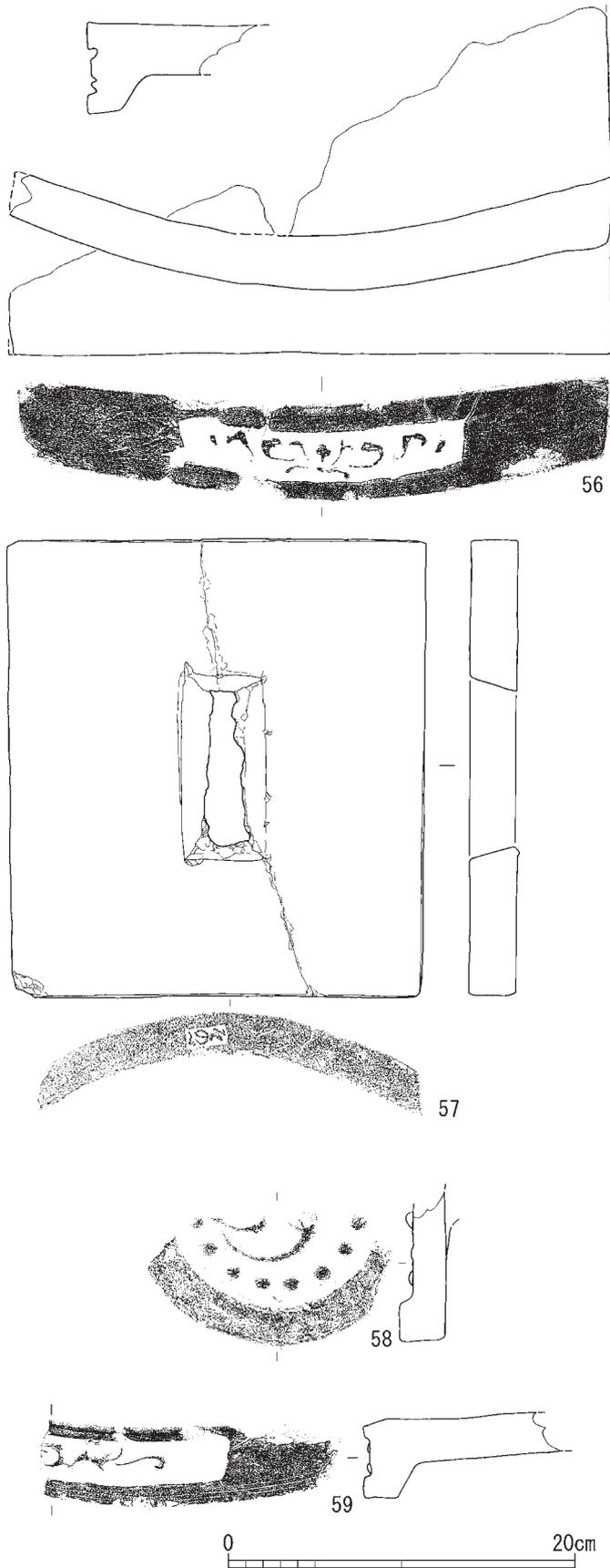
溝S D85(第14図52) 52は瓦当の直径11.2cmを測る小型品である。右三ツ巴で連珠文を持たない。瓦当裏面を袋状に造る鳥衾である。

礎石建物S B90(第12図19) P91から土師器皿(19)が1点出土した。口径10.0cm、器高2.0cmを測り、口縁部に灯明芯の痕跡が認められる。17世紀中葉～後期にかけての製品である。

溝S D100(第12図4・21～29) 陶器3点(4・28・29)が埋め土の最上部から、土師器皿7点



第14図 出土遺物実測図(3)



第15図 出土遺物実測図(4)

(21～27)が溝の底から出土した。21は復元口径6.5cm、器高1.5cm、22は口径6.7cm、器高1.85cm、23は復元口径6.8cm、器高1.75cm、24は口径6.8cm、器高1.85cm、25は口径8.6cm、器高2.05cm、26は復元口径9.2cm、器高2.1cm、27は復元口径10cm、器高1.55cmをそれぞれ測る。これらの土師器は16世紀末から17世紀初めにかけてのものである。28は肥前陶器碗で、「絵唐津」と呼ばれるもので、口径12.5cm、器高4.5cmを測る。29は肥前陶器皿である。底部径4.0cmを測る。これらの陶器は17世紀初めの製品である。

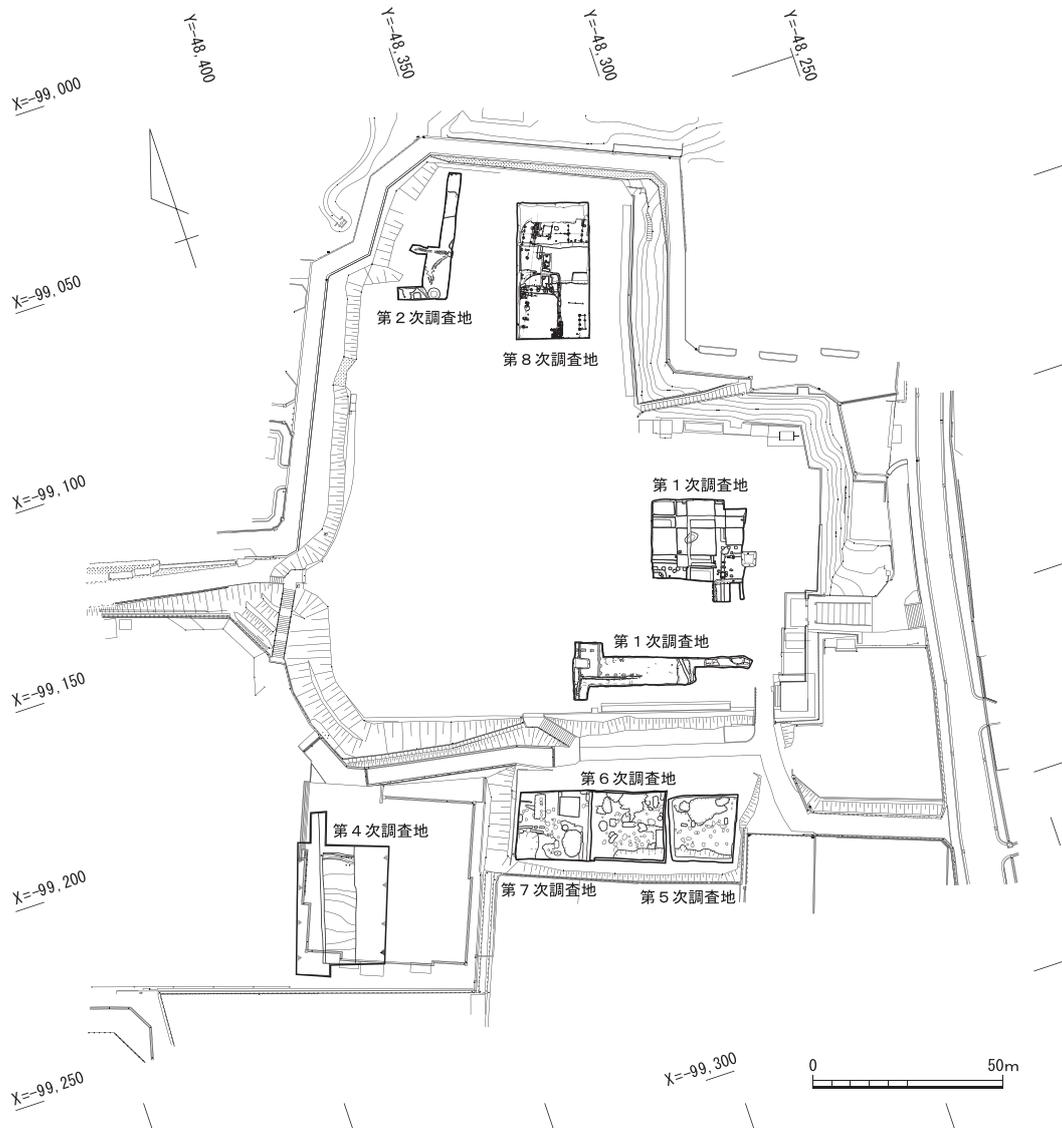
包含層(第12図10・31・33、第15図53～55・58・59) 古墳時代の須恵器杯蓋(31)・杯身(32)、石塔の相輪と考えられるもの(33)、厚さ5.0cmを測る瓦製の磚(53～55)、軒丸瓦(58)、軒平瓦(59)などが出土した。31は口径10.8cm、器高4.05cmを測り、32は口径11.6cm、器高4.75cmを測る。周辺の調査でも古墳時代の遺物が出土していることから周辺に造営されていた古墳が城の造営に伴い破壊され混入したと考えられる。33は直径5.5cm、残存高5.95cmを測る。横方向に3段の溝が切られ、さらに縦方向に8条の溝を切っている。かつて、小向山麓に天満宮があったとの記録があり、周辺には近年まで関係する石塔などが残っていた。これらに関係する遺物である可能性がある。

(戸原和人・引原茂治)

5. まとめ

園部城は、但馬国出石から丹波国園部に移封された小出吉親によって、元和5(1619)年から元和7(1621)年にかけて築城された。以後、幕末まで約250年にわたって、園部藩主小出氏10代の居城となった。園部藩最後の藩主である小出英尚は、慶応3(1867)年に京中見廻役につき、慶応4(1868)年1月に西園寺公望を総督とする山陰鎮撫軍が丹波に入ると直ちに勤皇方に従った。それ以後、翌明治2(1869)年にかけて、城の増改築を行った。天皇の仮行在所にするためとも京都守衛のためとも言われる。

小出氏は無城主格の大名であり、その居城である園部城も本来的には園部陣屋と呼ぶべきものである。承応2(1653)年以後の園部を描いている「丹波国園部絵図」の園部城主郭部分では、門の位置は変わらないものの、櫓門ではなく、薬医門か棟門と考えられる簡素な門が描かれている。櫓もない。園部藩は、元治元(1864)年に修築願を幕府に出したが、認められなかった。その後も幕府と交渉し、慶応3(1867)年に内諾を得たが、直後の大政奉還で正式な許可は得られなかった。



第16図 園部城調査地配置図

堀は描かれていない。城絵図では詳細な建物配置などは描かれていない例が多いが、堀や石垣などの、いわゆる縄張りについては描かれている。小出吉親の築城時には、幕府に絵図を提出し、相談を重ねて造作を行ったとされる。その際、櫓の普請も願ったが、二重の堀や狭間付の塀などがあるので櫓は必要なしということで、認められなかった。上記「丹波国園部絵図」には、幕末に大手門として修築された「北ノ門」の横に「櫓台」が描かれている。同図には主郭部分に建物の描写はないが、安政6(1859)年製作と考えられる「園部城略図」には主郭北東隅部に「ヤクラ」が記入されている。位置的に、北の曲輪の北東隅にあたり、天守に擬した櫓もしくはその櫓台と考えられる。しかし、両絵図ともに、今回検出した空堀は描かれていない。あたかも一面の平坦地のように描かれる。未完成状態の造作であっても、空堀を描けば、幕府が認めなかった城郭的印象を与えるため、描写が控えられたものか。ならば、城郭として修築することを認められた幕末の時点で、なぜ埋め立てられてしまったのか。1つの理由として、幕末の修築時には北西側の小麦山に天守に擬した三重櫓が建てられ、そこが本丸に擬せられたためとも考えられる。したがって、それまで本丸、二の丸に分かれていた主郭部分が、全体的に二の丸的な空間に変えられた可能性もある。疑問は残るが、いずれにしても、今回検出した空堀は今まで知られていなかった遺構であり、不明な点が多い江戸時代の園部城を考えるうえで、重要な手掛かりとなる遺構と言える。

(戸原和人・引原茂治)

参考文献

- 引原茂治ほか「園部城跡」(『京都府遺跡調査概報』第4冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1982
- 鶴島三壽ほか「園部城跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第28冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988
- 辻健二郎「園部城第3次発掘調査報告書」(『南丹市文化財調査報告書』第3集 園部町教育委員会)2006
- 黒坪一樹「園部城跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第70冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996
- 田代 弘「園部城跡第5次」(『京都府埋蔵文化財情報』第92号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004
- 田代 弘「園部城跡第6次」(『京都府埋蔵文化財情報』第95号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 中川和哉「園部城跡第5・6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第119冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 高谷茂男「中世園部城と荒木山城守の居城について」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1998
- 『平成11年度秋季特別展 園部藩と城-維新の築城にいたるまで-』(園部文化博物館)1999
- 『平成14年度秋季特別展 生身天満宮宝物展』(園部文化博物館)2002
- 『平成16年度秋季特別展 園部の町風景-城下町いまむかし-』(園部文化博物館会館10周年記念)2004
- 『平成20年度秋季特別展 園部藩のあゆみ』(南丹市立文化博物館)2008

圖 版

塩谷南古墳群



(1)古墳・調査地近景(掘削前、南から)



(2)古墳・調査地全景(掘削後、空中写真、西から)

塩谷南古墳群

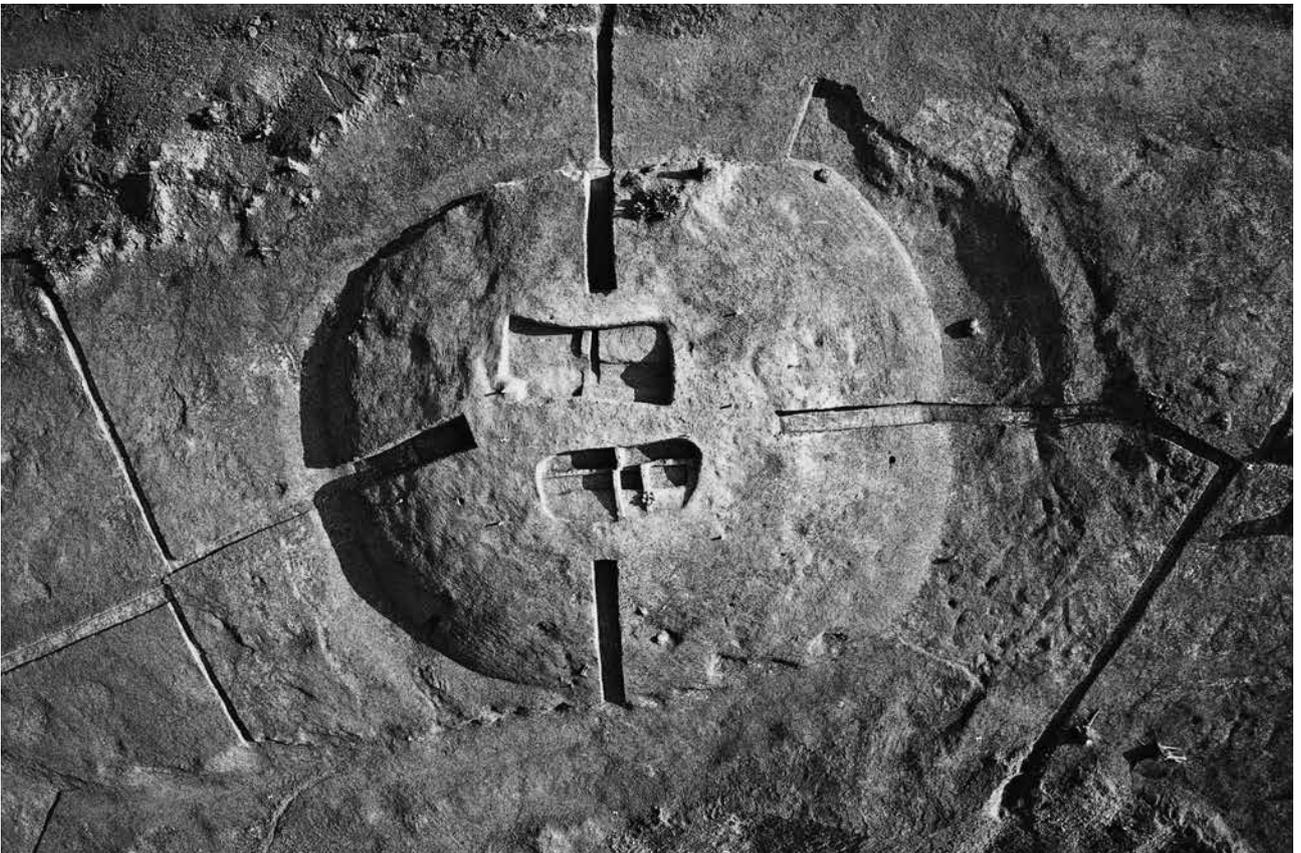


古墳全景(空中写真、南から)

塩谷南古墳群



(1)古墳・調査地全景(掘削後、空中写真、上が東)



(2)古墳近景(掘削後、空中写真、上が東)

塩谷南古墳群



(1)古墳近景(空中写真、西から)



(2)埋葬施設1(南から)

塩谷南古墳群

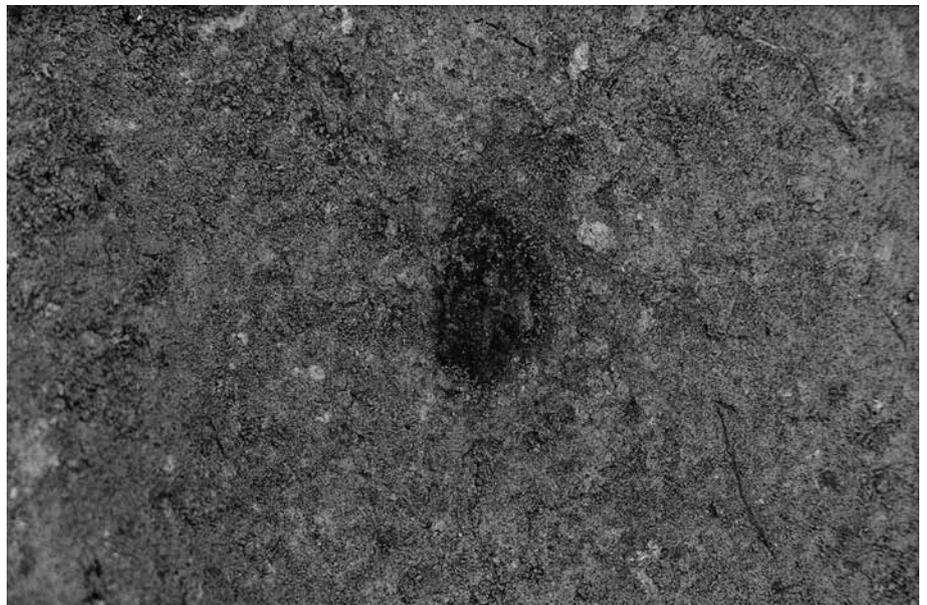
(1) 埋葬施設 1 棺痕跡南端～中間
(南から)



(2) 埋葬施設 1 棺痕跡断面
(南から)



(3) 埋葬施設 1 棺痕跡内出土鉄鏃
(北東から)



塩谷南古墳群



(1) 古墳近景(南から)



(2) 埋葬施設 2 (南から)

塩谷南古墳群



(1) 埋葬施設2出土遺物
および横断面(南から)



(2) 埋葬施設2内出土遺物
(有蓋高杯・鉄剣・刀子、東から)



(3) 埋葬施設2須恵器類出土状況
(上が東)

塩谷南古墳群



(2) 同 (北から)



(4) 同 (東から)



(1) 埋葬施設 2 壺・有蓋高杯出土状況 (南から)



(3) 同 (西から)

塩谷南古墳群



(1) 南側周壕断面(西から)



(2) 北側周壕断面(東から)



(3) 北側周壕内須恵器杯出土状況
(東から)

塩谷南古墳群



(1) 墳頂部断ち割り状況(南から)



(2) 墳丘南斜面断ち割り断面
(南西から)



(3) 墳丘西斜面断ち割り状況
(西から)

塩谷南古墳群



出土遺物 1

塩谷南古墳群



出土遺物 2

三ノ宮東城跡

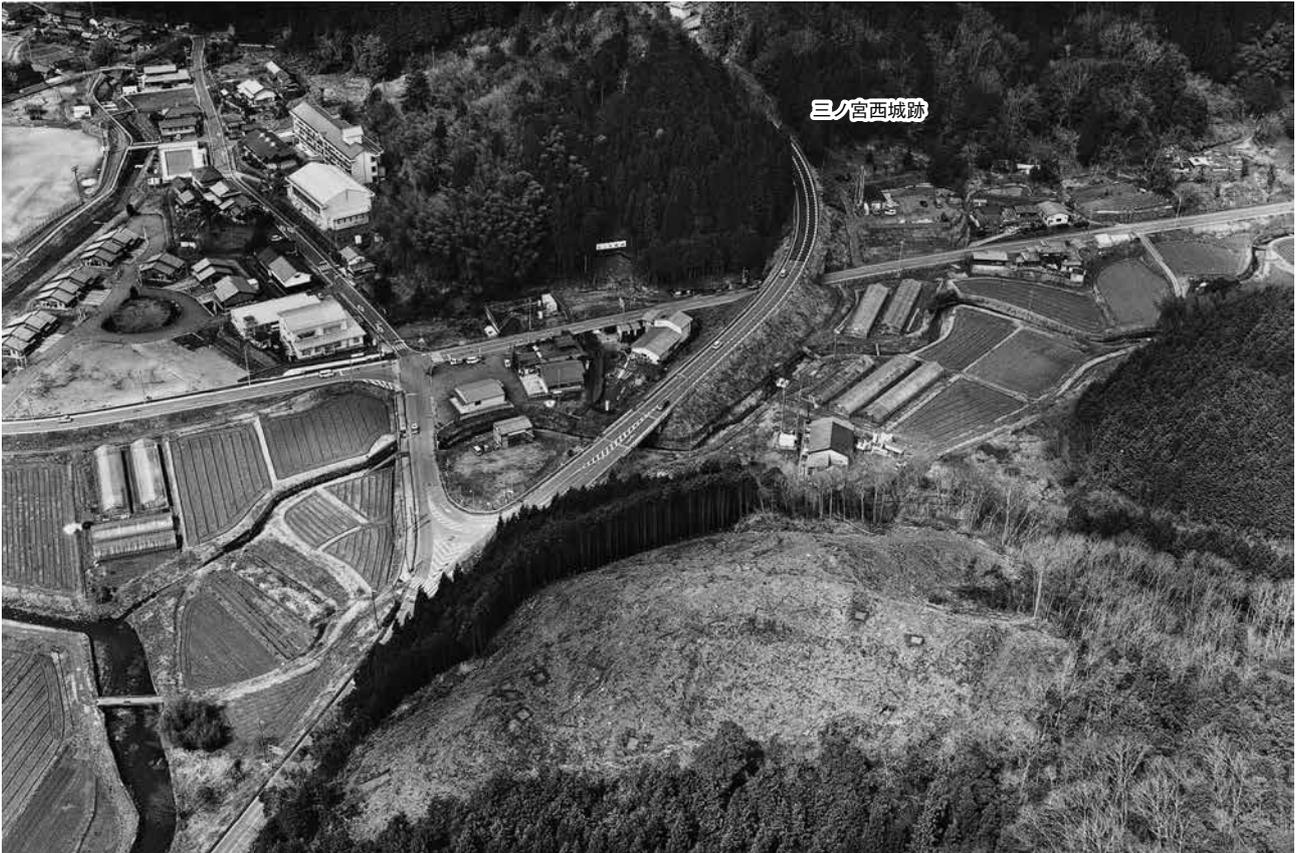


(1)三ノ宮東城跡調査前遠景(空中写真、北西から)



(2)同(空中写真、西から)

三ノ宮東城跡



(1)三ノ宮東城跡調査前遠景(空中写真、南東から)



(2)同(空中写真、北東から)

三ノ宮東城跡



(1)三ノ宮東城跡調査後遠景(空中写真、南から)



(2)同(空中写真、南東から)

三ノ宮東城跡



(1)三ノ宮東城跡調査後遠景(空中写真、北西から)



(2)同(空中写真、北から)

三ノ宮東城跡



(1)三ノ宮東城跡調査後全景(南西から)



(2)同(西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 全景 (北東から)



(2) 曲輪 1 集礫遺構 S X 4 (北東から)

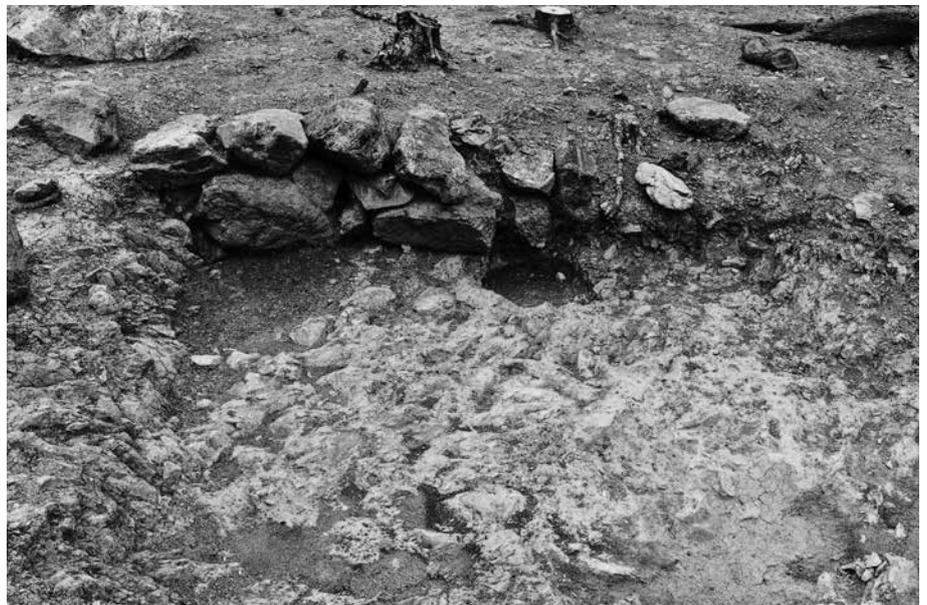
三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 集礫遺構 S X 4・土塁
(西から)



(2) 曲輪 1 石積土坑 S K 6 (北から)



(3) 同 (北東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 石列 S V14 (西から)



(2) 同 (北から)



(3) 曲輪 1 かまど基台部 (東から)

三ノ宮東城跡



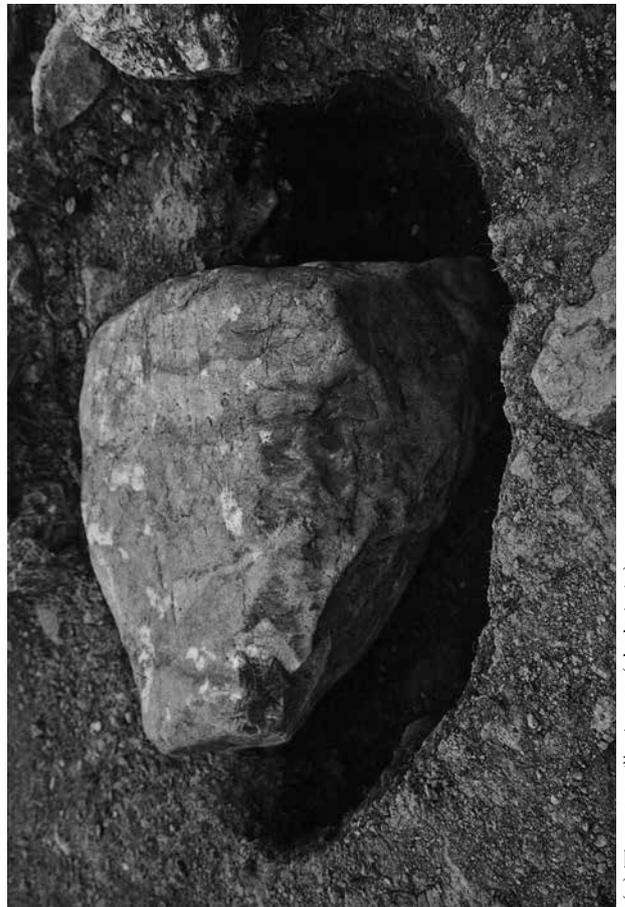
(2)同SB1 礎石P2 (南から)



(4)同SB1 礎石P5 (南東から)



(1)曲輪1 SB1 礎石P1 (南から)

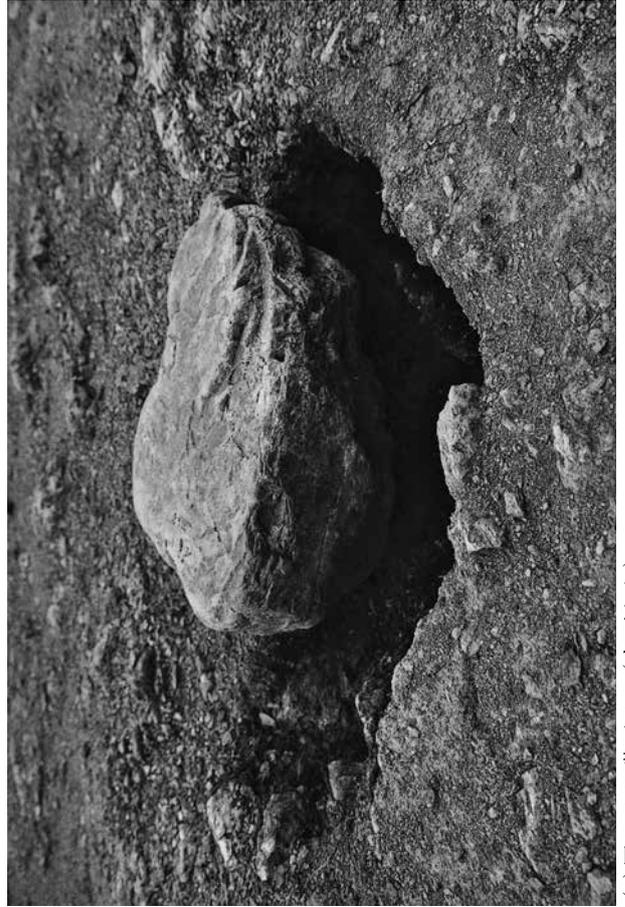


(3)同SB1 礎石P3 (南東から)

三ノ宮東城跡



(2) 同 S B 3 礎石 P 3 (北西から)



(4) 同 S B 3 礎石 P 5 (南西から)



(1) 曲輪 1 S B 3 礎石 P 1 (北西から)



(3) 同 S B 3 礎石 P 4 (北西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 土塁への通路・石垣
S V14(北から)



(2) 同石垣 S V14(北西から)



(3) 同北東虎口石段・石垣 S V16
(北東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 北東虎口・石垣 S V16
(東から)



(2) 同石垣 S V16(南から)



(3) 同北東虎口・石垣 S V16
(南西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 土塁掘削状況(南西から)



(2) 同土塁南東半部掘削中
(南西から)



(3) 同土塁内鍬形台出土状況
(南西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 土塁断ち割り (北西から)



(2) 豎土塁 1 断ち割り (北西から)



(3) 豎土塁 2 断ち割り (北西から)

三ノ宮東城跡

(1)堀切(北西から)



(2)拡張区 1 (南西から)



(3)拡張区 2・3 (南西から)



三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 1 石垣 S V 9 (北西から)



(2) 曲輪 1 南西虎口 (南西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 2 石積土坑 S K 7 (北東から)



(2) 曲輪 2 礎石建物跡 S B 5 (北東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 6 切岸、 豎堀 1・豎堀 2 (南西から)



(2) 豎堀 1 土層断面 (南西から)

三ノ宮東城跡



(1) 豎堀 2・豎堀 3 (北から)



(2) 豎堀 3 土層断面 (南東から)



(3) 豎堀 4 土層断面 (南東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 3 全景 (北西から)



(2) 曲輪 3 石積 S V 10 (北から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 3 石積 S V 10
中間断ち割り(西から)



(2) 曲輪 3 切岸、排水溝(南西から)



(3) 曲輪 4 全景(南西から)

三ノ宮東城跡



(1)道9排水溝(南西から)



(2)道9石積S V11(北西から)



(3)石積S V11(西から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 5 切岸(北西から)



(2) 曲輪 5 全景(北東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 5 全景 (南東から)



(2) 曲輪 5 虎口 (北東から)



(3) 曲輪 5 南門跡 (北から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 6 全景(北から)



(2) 曲輪 6 切岸堆積土断面(南東から)

三ノ宮東城跡



(1) 曲輪 6 礎石列(北西から)



(2) 曲輪 6 土坑 S K 18 (西から)



(3) 曲輪 3 ~ 曲輪 5 (北東から)

三ノ宮東城跡



(1) C - 4 地区(南から)

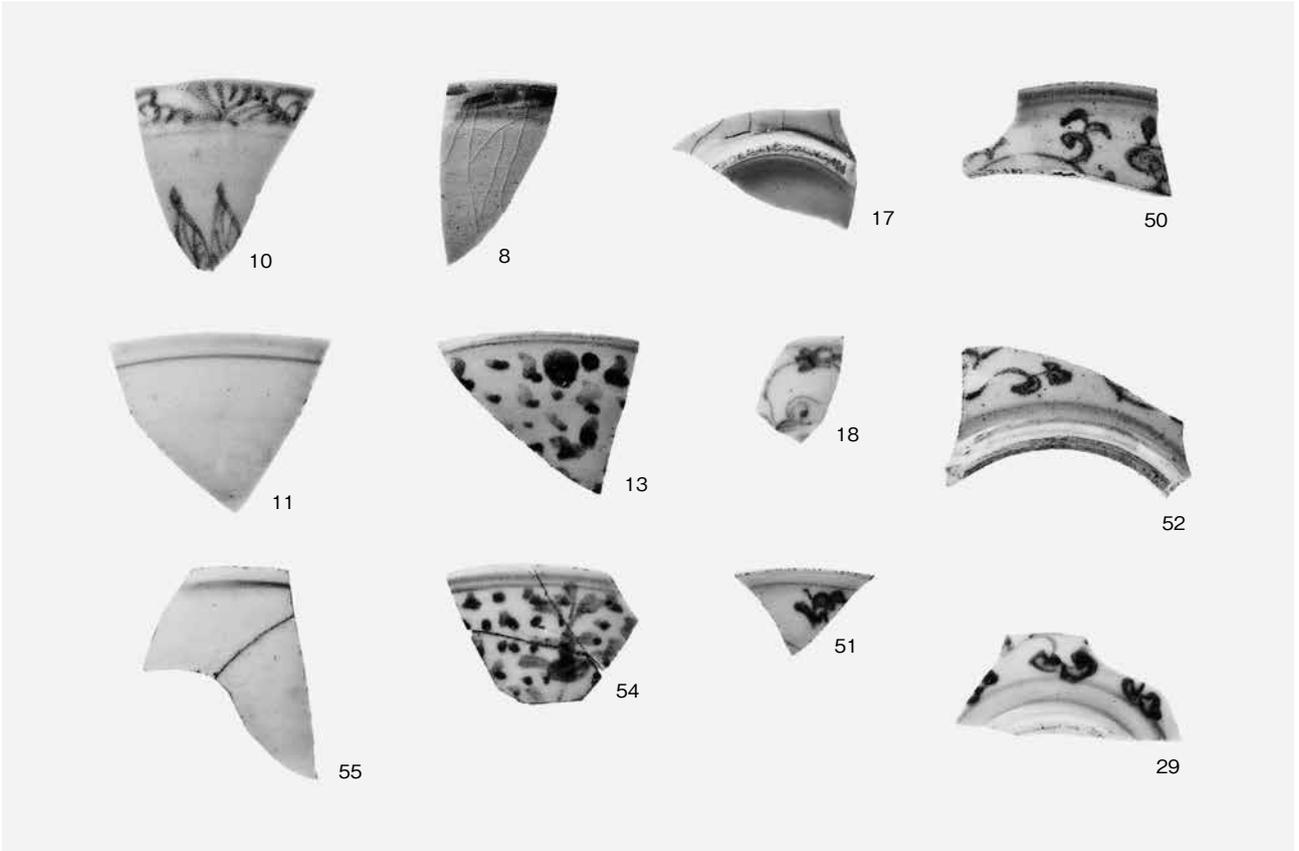


(2) 同土坑内石臼・近世磁器出土
状況(西から)

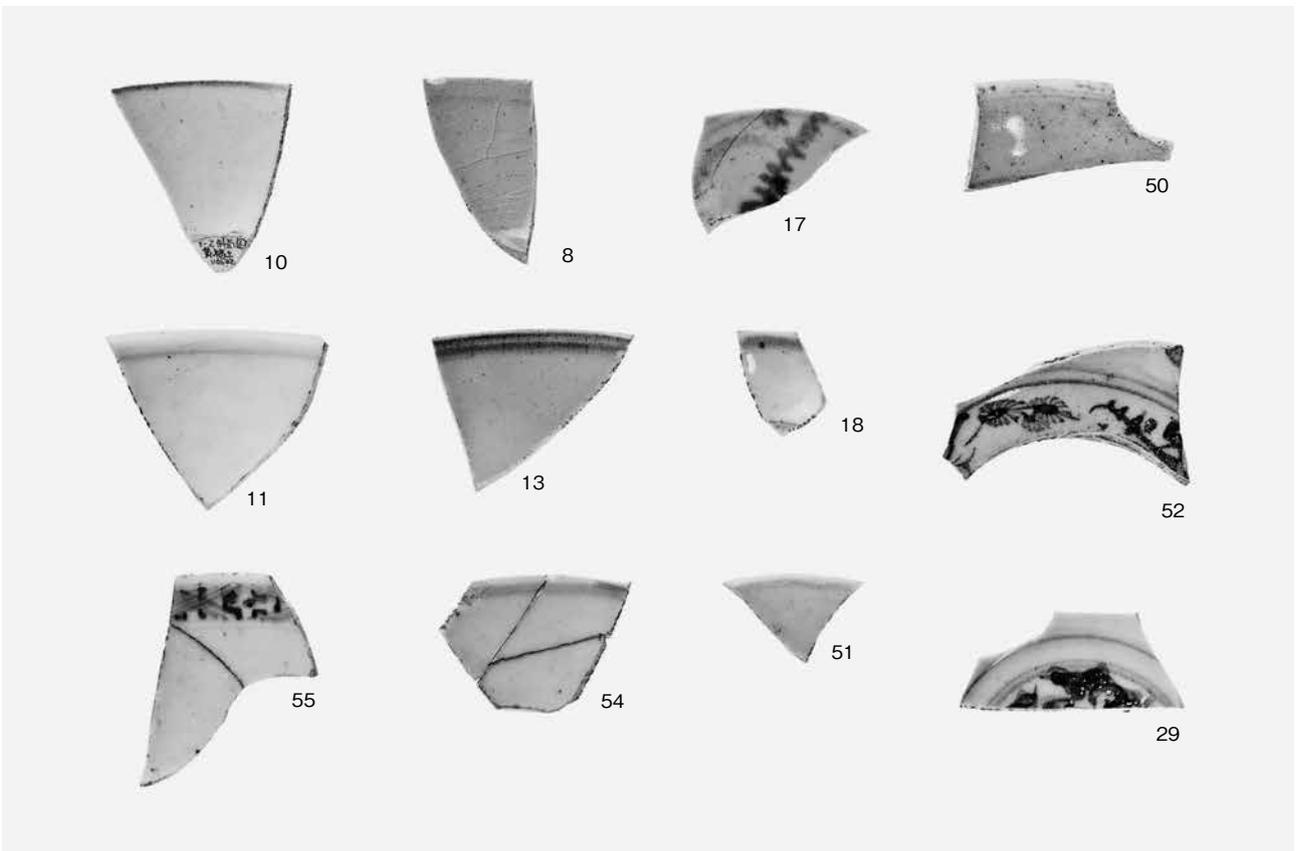


(3) C - 3 地区(北から)

三ノ宮東城跡

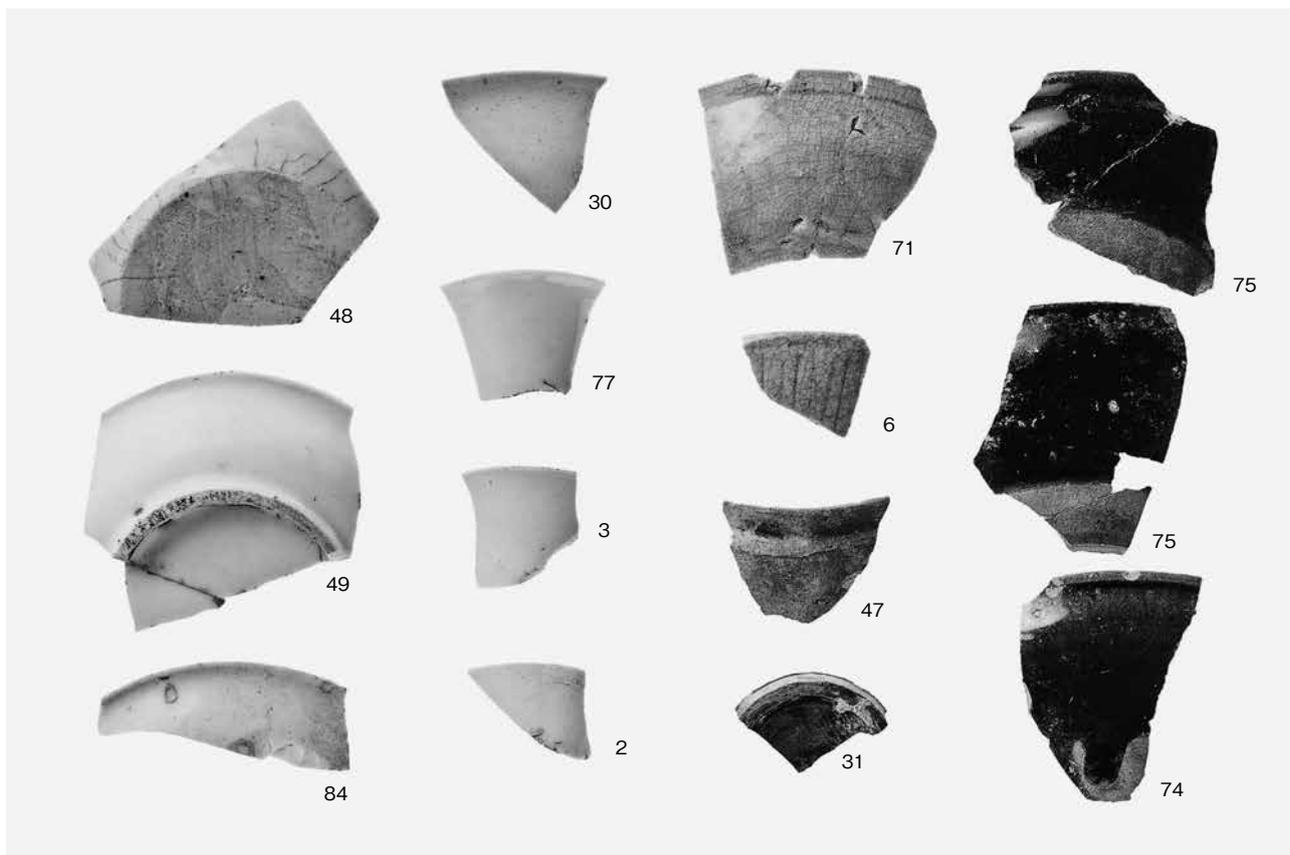


(1)出土遺物 1 (中国製青花磁器、外面)

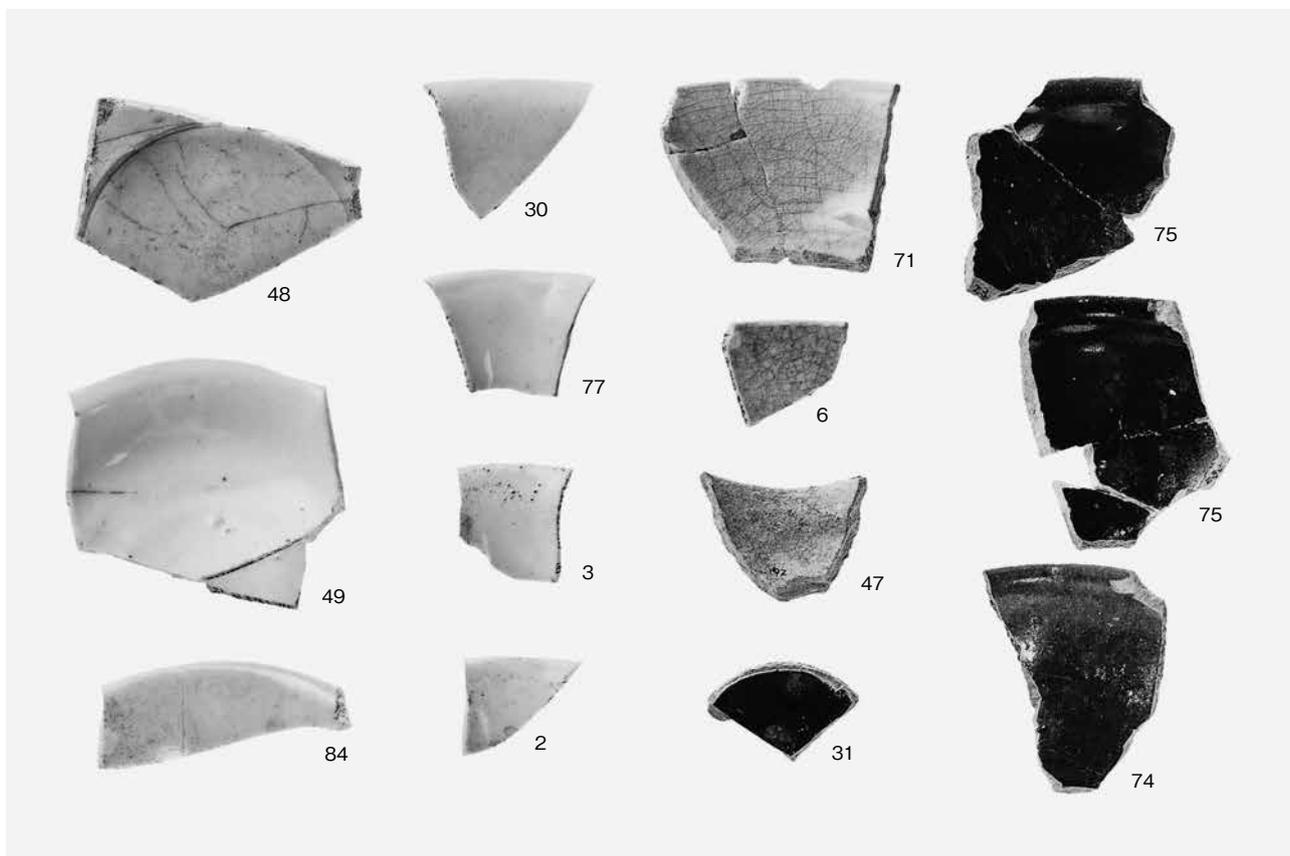


(2)出土遺物 2 (中国製青花磁器、内面)

三ノ宮東城跡

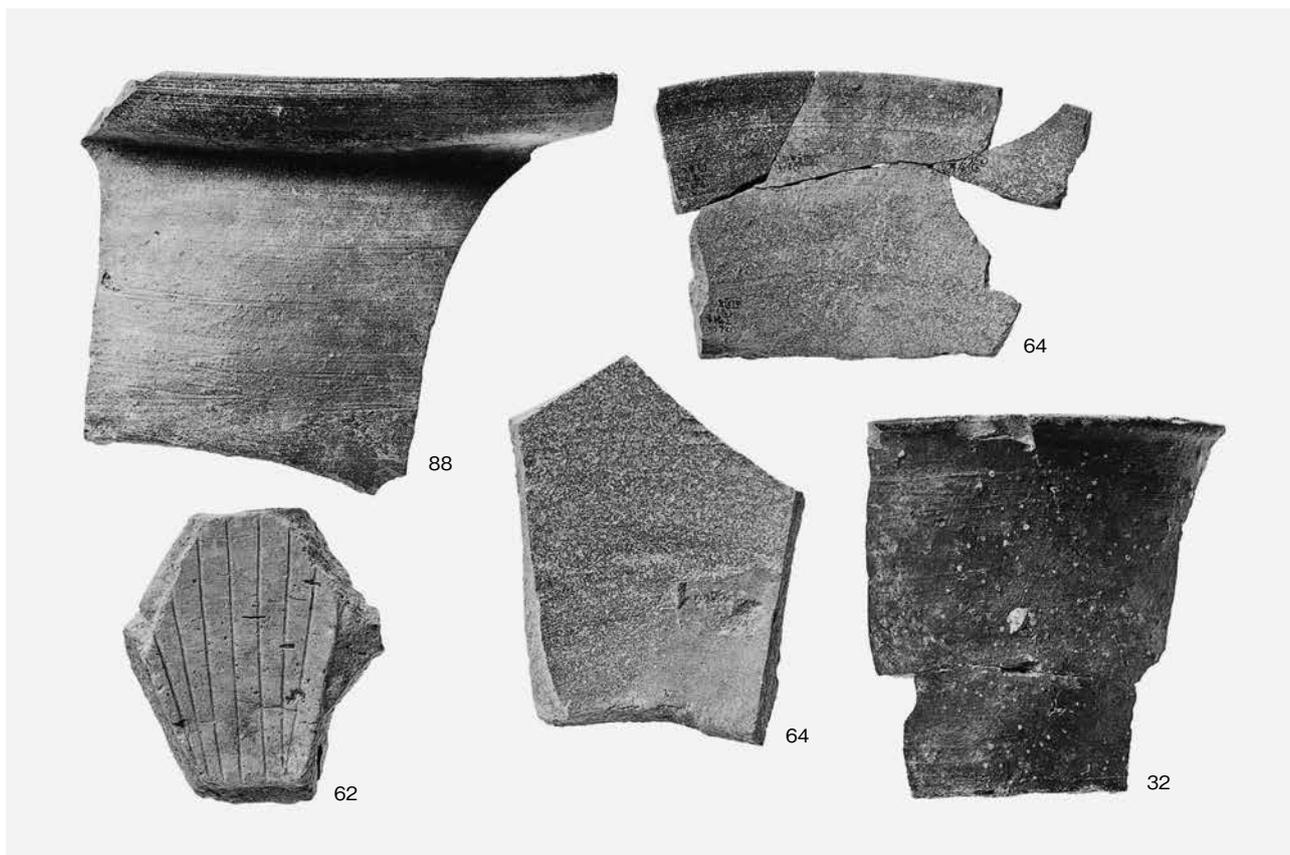


(1)出土遺物 3 (中国製白磁・青磁、国産陶器・土器、外面)

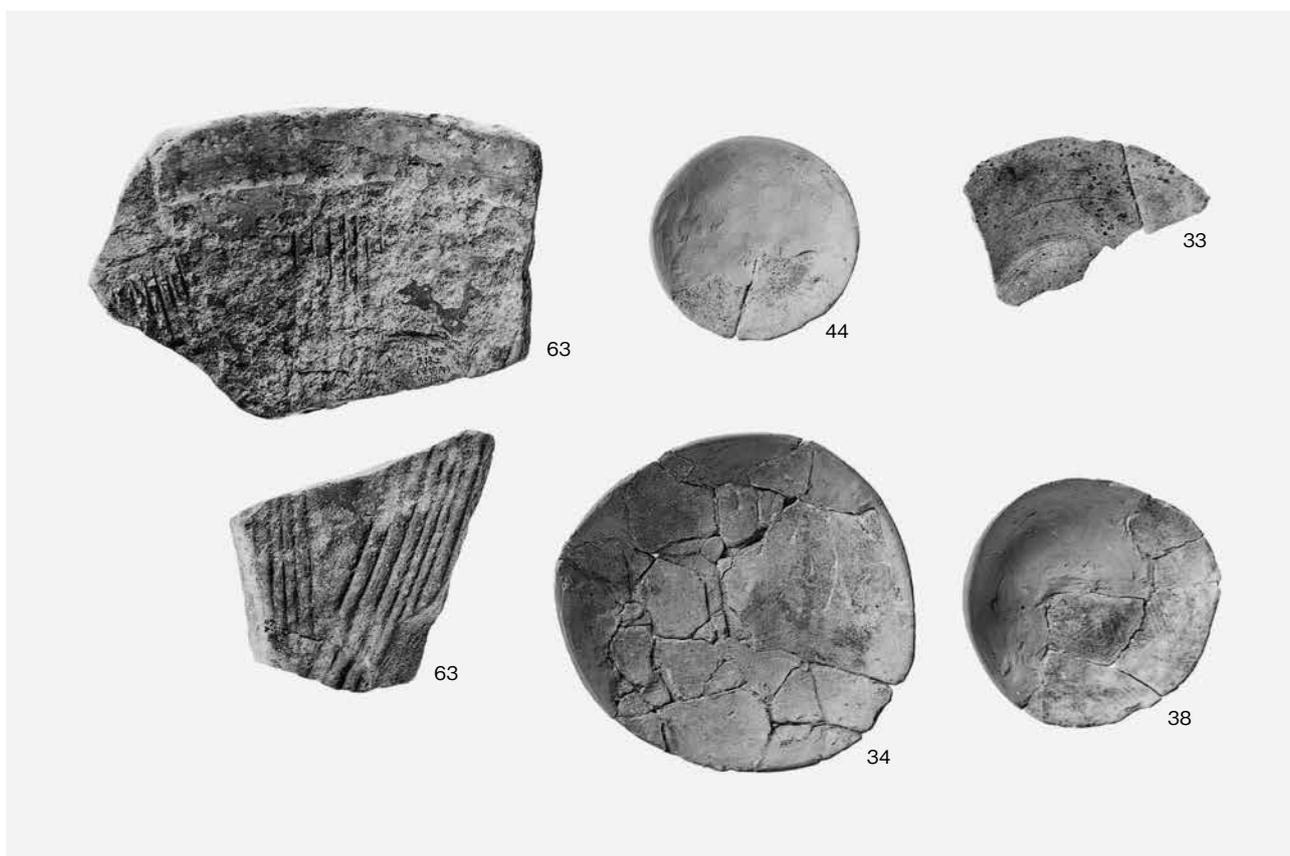


(2)出土遺物 4 (中国製白磁・青磁、国産陶器・土器、内面)

三ノ宮東城跡

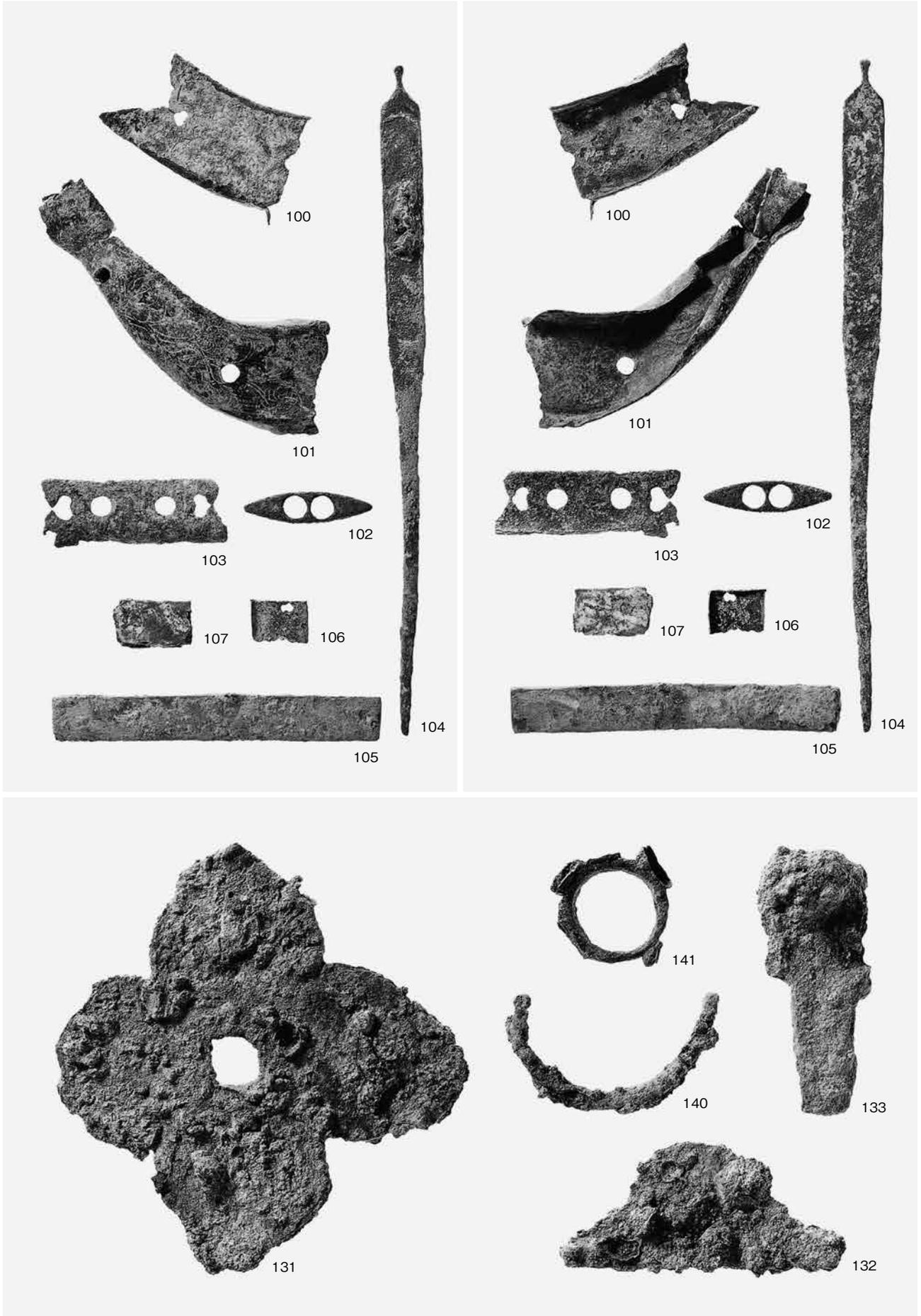


(1) 出土遺物 5 (国産陶器)



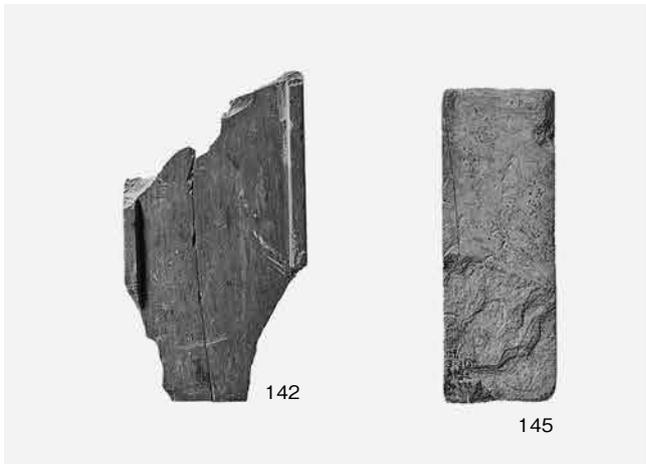
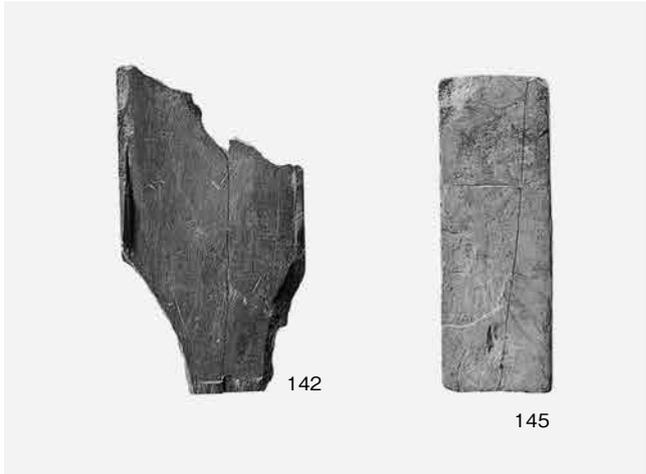
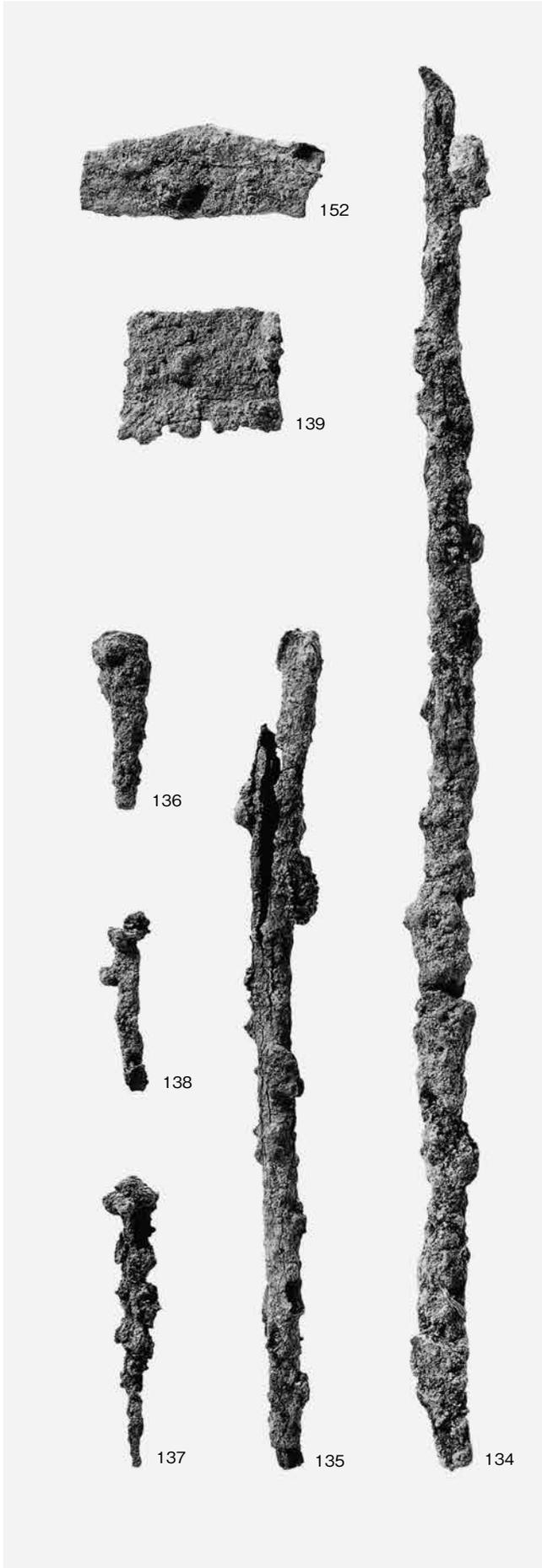
(2) 出土遺物 6 (土器)

三ノ宮東城跡



出土遺物 7 (銅製品、鉄製品)

三ノ宮東城跡



出土遺物 8 (鉄製品、石製品)



(1)北半部空中写真(北から)



(2)北半部全景(北から)



(3)北半部全景(東から)



(1) 土坑 S K27(北から)



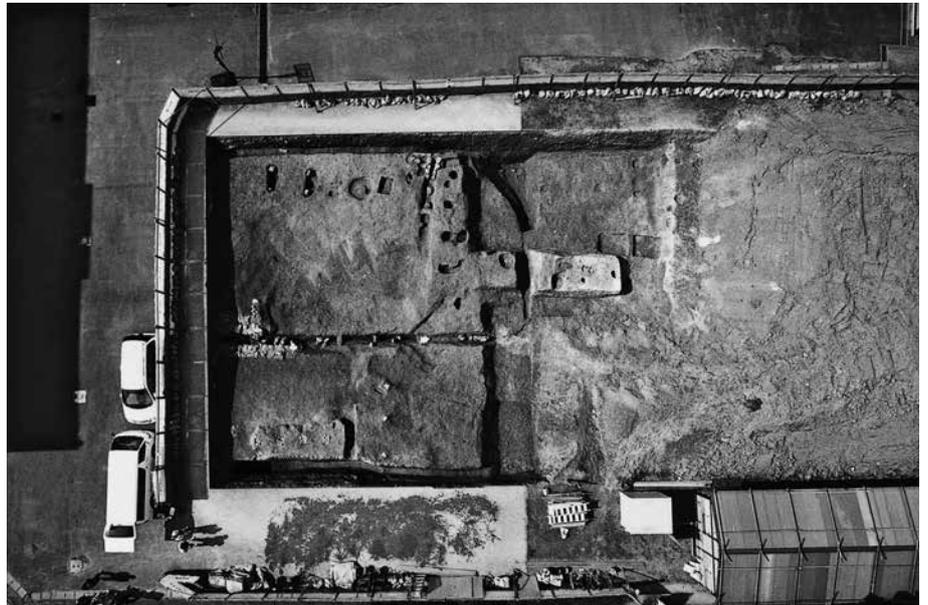
(2) 土坑 S K26・柵列 S A06
(南から)



(3) 柵列 S A08(南から)



(1) 塀 S A43(北から)



(2) 南半部空中写真(右が北)



(3) 南半部全景(南から)



(1) 南半部全景(北から)



(2) 石組溝 S D72(北から)



(3) 石組溝 S D85・柵列 S A78
(西から)



(1) 南半部西半(北から)



(2) 塀 S A43、S K74(南から)



(3) 塀 S A43、S K73(南から)



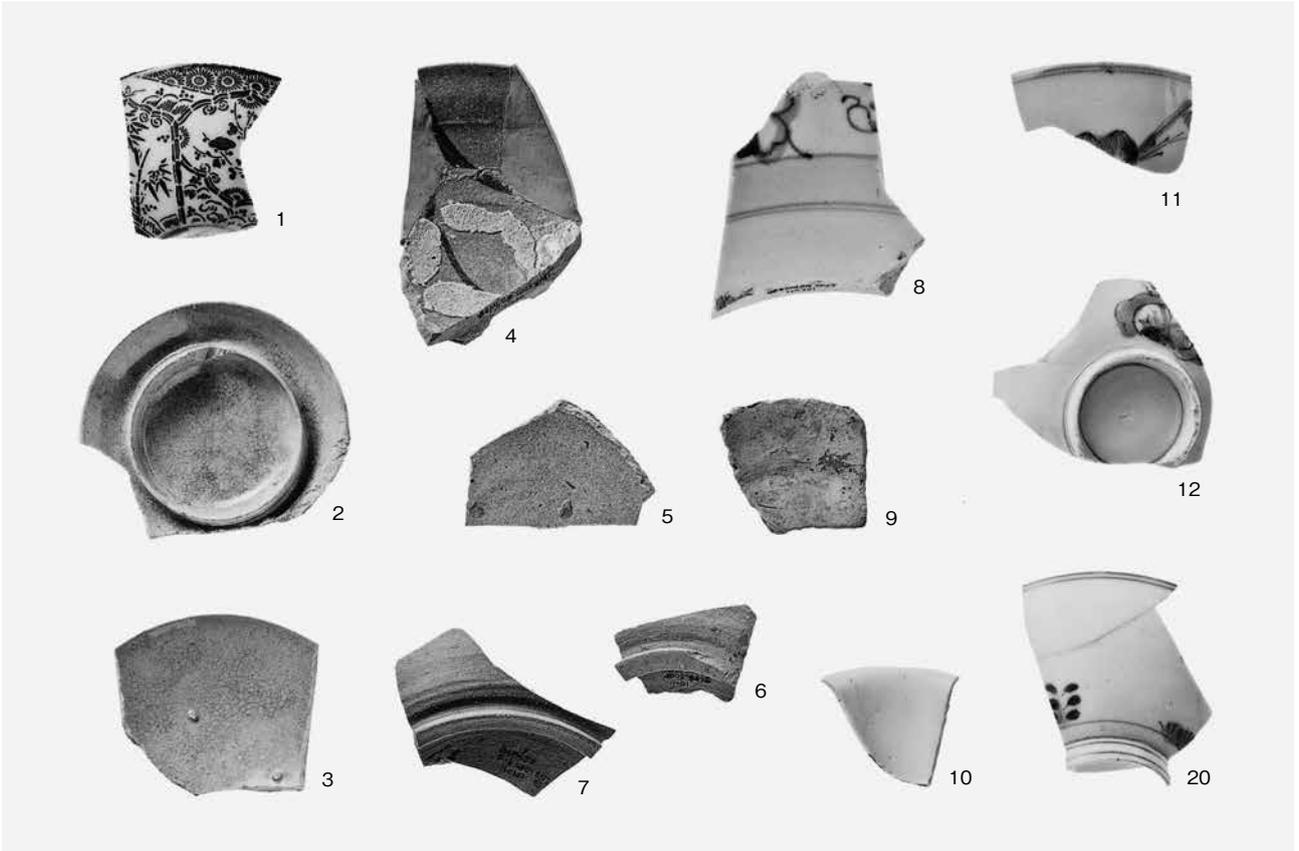
(1) 土坑 S K77(北から)



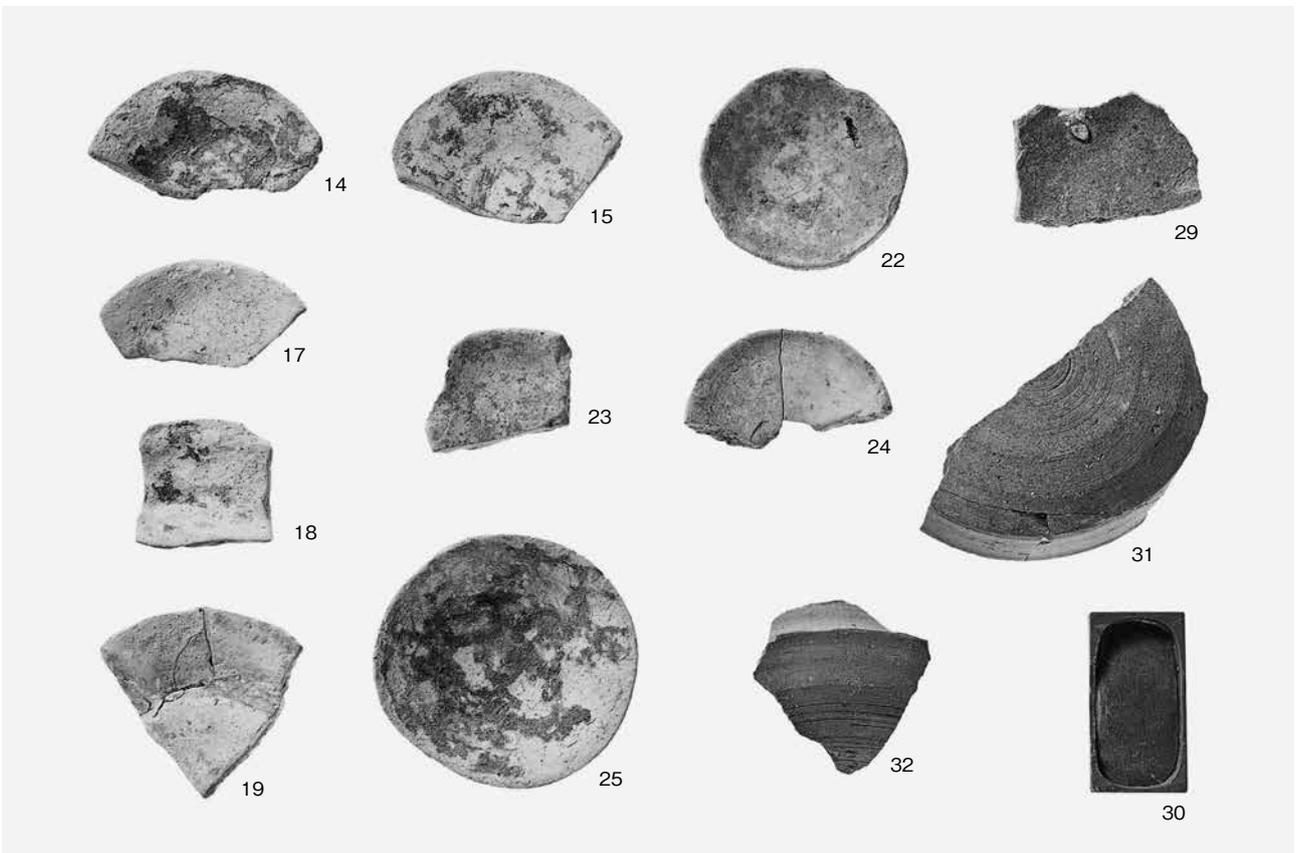
(2) 溝 S D100(西から)



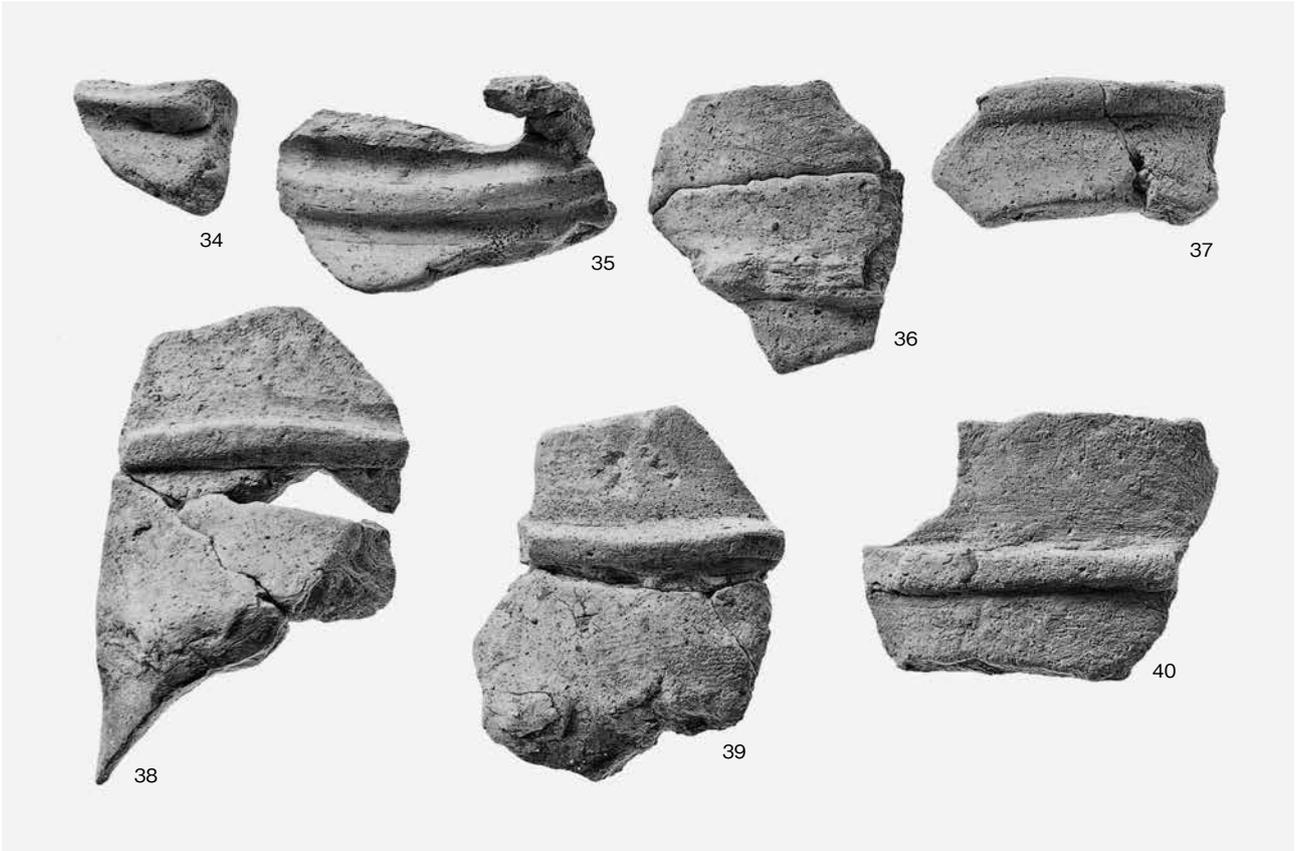
(3) 溝 S D100-2(上が東)



(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2



(1) 出土遺物 3



(2) 出土遺物 4



47



48



49



50



52



58



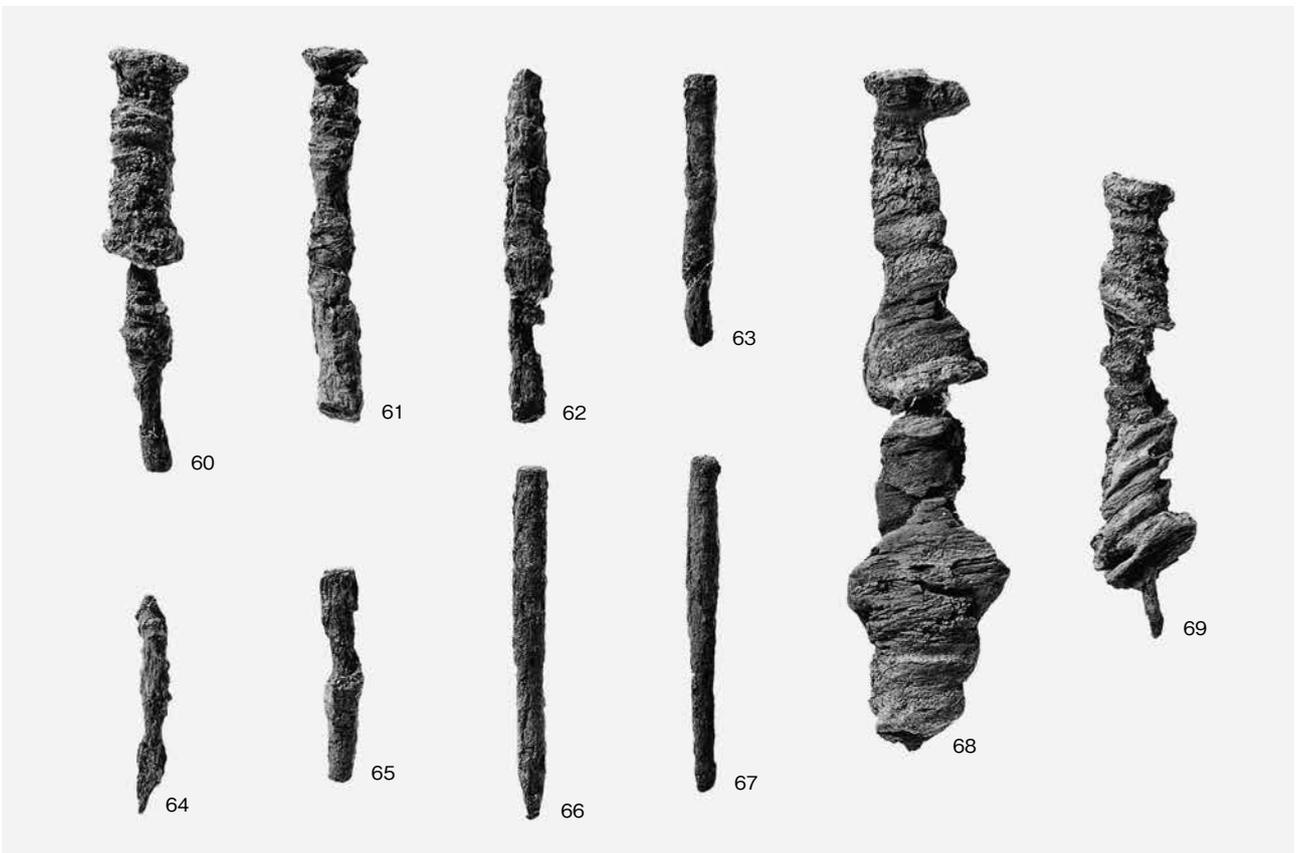
56



59



(1) 出土遺物 6



(2) 出土遺物 7

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第152冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
たんばあやべどう ろかんけいせい しおたにみなみ こふんぐん・さん のみやひがしじょ うあと	ふないぐんきよ うたんばちょう そね・さんのみ や	26407	75	35° 09' 21"	135° 24' 52"	20101018 ～ 20110120	800	道路建設
丹波綾部道路関係 遺跡 塩谷南古墳 群・三ノ宮東遺跡	船井郡京丹波町 曾根・三ノ宮		35	35° 13' 13"	135° 20' 33"	20110204 ～ 20110304、 20110421 ～ 20111129	6,200	
そのべじょうあと だいはちじ	なんたんしその べちょうござ くらまちきゅう じゅうなな	26213	31	35° 06' 16"	135° 28' 11"	20101220 ～ 20110303	600	建物建設
園部城跡第8次	南丹市園部町小 桜町97							

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩谷南古墳群	古墳	古墳	埋葬施設・土坑	須恵器・鉄製品	
三ノ宮東城跡	城跡	中世	虎口・切岸・土塁・堅土塁・ 堅堀・堀切・道・礎石建 物跡・石積土坑・石積	土師器・瓦質土器・陶磁器・金属器・石 製品	
園部城跡第8次	平山城	古墳 近世	空堀・土橋・石組溝・溝・ 土坑・礎石建物・掘立柱 建物跡・塀・柵列	埴輪・須恵器 土師器・陶磁器・瓦・塼・鉄器・石製品	江戸時代 の絵図に ない空堀 を確認

所収遺跡名	要 約
塩谷南古墳群	<p>丘陵頂部に築造された、直径15m、高さ2.3mの円墳である。単独墳である。この古墳では、2基の埋葬施設を検出した。1基は割竹形木棺を直葬する。棺内にはベンガラを塗布する。棺内から平根式の鉄鏃1点が出土した。もう1基は組合式木棺を直葬する。棺内にベンガラを部分的に塗布する。棺内からは鉄剣、刀子、鉄鏃茎部各1点が出土した。墓壇の掘り残し部分から、須恵器長頸壺を中心に須恵器有蓋短脚高杯7点を輪状に配置して供献した状況を検出した。</p> <p>出土した須恵器が陶邑編年のMT15併行期のもつとみられることから、古墳の築造時期は古墳時代後期初期の6世紀初頭頃と考えられる。被葬者は、当地域を広く治めた盟主で、北側に隣接する塩谷古墳群の被葬者と同等もしくはそれを上回る有力者と考えられる。</p>
三ノ宮東城跡	<p>城跡は、平地からの比高50m前後の尾根先端部に位置する。あまり規模の大きい城跡とはいえないが、ほぼ全域にわたって、戦国時代の城の状況を知ることができた。</p> <p>曲輪からは、礎石建物跡や石積土坑、石列などを検出した。また、斜面部では、堅堀や切岸などを検出した。各曲輪を結ぶ通路やそれに伴う護岸の石積、排水溝なども検出した。このように、城内には防御のための様々な工夫がされている。また、岩盤を削り出して各曲輪を整形するなど、丁寧な城造りの様子がうかがえる。</p> <p>礎石建物は、非常時だけに使用されたとみられる一般的な戦国時代の山城と較べると、恒久的な造作である。このような状況から、この城は、非常時だけに使用されたのではなく、ある程度日常的な生活が行なわれていた可能性も考えられる。</p> <p>遺物では、中国製の青花磁器や白磁、国産の陶器甕や土師器皿、甲冑金具、刀装具、銭貨などが出土した。出土遺物から、16世紀前半頃の城跡と考えられる。</p>
園部城跡第8次	<p>園部城については江戸時代の絵図が残っているが、今回の調査では絵図に記載されていない空堀を検出した。この空堀は築城時の元和年間に掘削され、幕末の修城時に埋められている。空堀には土橋が架けられており、周辺では建物跡や柵列等も検出した。</p> <p>今回の調査では、不明な点が多い江戸時代の園部城を考える上で重要な資料を得ることができたといえる。</p>

京都府遺跡調査報告集 第152冊

平成24年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141